



富士

富士

2

柿沼日明 著

白蓮大聖人御伝

富士

2

小説
富

士

第二卷・目次

	二	八七
東條左衛門尉景信	二	九九
小松原の法難	一	一〇七
	一	一〇七
	二	一一三
	三	一二二
	四	一二九
文永の大彗星	一	一三五
	二	一四二
	三	一四九
	四	一五六
慈母御逝去		一六三
蒙古国書		一七一

まな板岩

一

相模灘を横断して鎌倉から伊豆へ渡る最短距離は、伊豆半島では一番東につき出ているといわれる鳥崎である。（現在では明治の初めに日蓮崎と改称、聖人の名を冠した地名は全国でここ一か所）晴れた日には鳥崎では、大島は泳いでいけそうな程に近くにみえ、それに続いて、伊豆七島の中の利島、新島、式根島等がみえる。三浦半島は勿論のことだが、遠く房州の山々がはつきりみえるのである。

今、聖人に乗せた船は、この鳥崎に向って進んでおつた。

「お役人さまに申し上げます」

「なんじゃ、うるさい奴め、先程から申しおるではないか、船頭は黙って船さえ動かしておればよいのじゃ、何処そこに舟をつけるとはこのわしが指図するから、それまでは黙って船を動かす

「お祈りなさい。わかつたなあ……」

「お言葉返すようで申し訳がございませんが、海の上へまいりましたら、やはり船頭のいうことを聞いていただかなければ困ります。もはや伊東はとづくにすぎまして、あの辺が川奈でございます。くもつて参りましたので見通しがききませんが、ここらは篠見ヶ浦の辺りでございます」

「わかつておるのじゃ。船頭、わしも御役目を蒙つて、この船に乗つておるのだ。この辺の磯のことは、もしかしたら、船頭お前よりもくわしいかも知れないぞ……」

「でも、あの坊さまは伊東へ流罪というところでございましたが……」

「左様、伊豆の伊東へ流罪、おあずかりする人は伊東八郎衛門様じゃ。わかつとる……どうしておるあの坊主、少しは神妙にいたしておるか」

「どういたしました、益々元気で御題目とやらを盛んに唱えております……」

「左様か元気で結構、船頭、あの黒くつきでてる処は鳥崎だったなあ……」

「へい、よく御存知でございますなあ……」

「先刻いつたではないか、お前よりもこの辺の海辺はくわしいとなあ、あれへつけれ」

「あれといひますと鳥崎へつ」

「そうだ……」

「滅相もございません。いくら知っておると申しましても且那はやはりしろうとでございます。」

あれには船が着きません。船が着くどころか、あの辺は、かくれ岩が多くて、へたをすると船がやられてしまいます」

「船頭、船頭、余りつべこべいうなよ。そんなことも先刻承知なのだ。鳥崎というのはなあ、この篠見一帯の岩がまっくらである所からつけた名じゃ、その岩がまた切ったように海にせまってるが、潮の上げぐあいでは、かくれ岩が多くて船のつける所がない。岩ずたいに岸にいけるように見えるが、潮の上げぐあいでは、到底岸边になぞゆけるものではない。まあまあ人を捨ててゆくのならば、こんな工合のよい所はないのだ。波はあの通り荒く、いつときも岩の上には立ってはおれまい」

「では、あの坊さまを捨ててまいりますので」

「いや、そういう訳ではないがなあ、だいたいあの坊主は、日蓮というて、鎌倉における時は諸宗を悪口いたし、あまつさへ御政道に口を出して北条様の天下を論難し、兵器を家にたくわえ、徒党をあつめた件によつて、実は焼き討ちに処せられた大罪人じゃ、一時鎌倉から姿を消したので、お上におかれては不問にしておつたが、この春より再び鎌倉に舞い戻つて、前にも増して、御政道を非難いたすのでからめ捕つて、今日の流罪となつたのじゃ。じゃによつて、流罪というても伊東様の役所までとどけなくともよい。まあまあ拙者が采配に任せると、密なる御命令もあつてのことだ……どうじゃ船頭こつちは安全だが、相手はすこぶる危ないといったような手頃な場所

があるであろうがなあ、はっはっはっ……」

「左様な訳があつてのことでございますか、どうも馬鹿正直なものでございますから余計なことを申し上げました。それならばあの鳥崎の真下にこの辺でまな板岩という岩がございます。二間四方位な平らな岩でございますが、どうしたことかこの岩は一つ一つがまな板のようなきれめのはいつた岩からできております。ここならば、少し波が静まれば、人の一人ぐらいがおりる間ならば、船も損することはありますまい」

「左様か、それは都合のよい場所だ。そうときまつたら空模様も少し危なくなつて参つた。早いがよい、早くつけろ」

「畏こまりましてございます」

「断つておくが船頭、拙者は最早知らぬ方が都合がよいから、ここから動かないぞ、よつて船をつけたらお前がああ坊主の側にいつて、ここが伊東でございます。磯ずたいにおいき下さい、今日の風の都合でこんなところに着けましたが、けつして危ない所ではありませんから、と、そこいら辺はうまくやつておいてきほりにしてやつてくれ。わかつたなあ」

「合点でございます……船を早速につけましょう」

磯菊の香が潮の香の間にする。この篠見浦のまっくらな岩の岩辺に、不思議と磯菊が沢山に生え、土のないのに何処に根をはるかと思う程であるが、潮風があらいで葉と葉がこすれて、その葉から美しい匂いを、潮の香に負けじと放つのである。

まな板岩に聖人を残した船は、暮れかけた海に忽ちにみえなくなってしまった。

「……………」

一心欲見仏

不自借身命

時我及衆僧

俱出靈鷲山

……………」

まな板岩に立たれた聖人の口から出る経文の声である。足許に荒れ狂う波。法衣の裾は風にはためいてちぎれ飛ばんとしておる。六尺四寸の偉丈夫は荒海の岩上に置いてもしもその尊厳を失わなかった。却って聖人のみを知る法華経法悦の境地であった。法華経には園中林中山曠谷

いたる処すべてこれ法華經の道場とあるが、ここ伊豆篠見浦のまな板岩も聖人にとっては、ただ法華經の道場であつた。

法華經の道場であるならば何等特別に変わったこともない筈である。

「……」

我此土安穩

天人常充滿

「……」

何故聖人が磯づたいに行こうとしなかつたのか、何故聖人はまな板岩から動かずに經文を唱えていられたのであろうか、凡べては聖人の御仏智である。

その時鳥崎の岩かげからまことに降つて湧いた如く一艘の船がでてきたのである。

「御出家さま……御出家さま……」

あわてた声で船頭かよんだのである。

「おう……」

「なにをされておりますか、そんな危ない処で、その岩はあと半時もすれば海の中に吞まれてしまふ岩ですぞ……」

「そうじゃろう、私もそう思つておつた」

「のん気なことをいっておりますなあ、早くこの船におり下さい」

「左様か、有難いなあ、仔細あつてこの岩に捨てられたもの助けるもよいが、後で迷惑をかけても心ぐるしいから、よく考えてからにしてください」

「冗談どころじゃありませんよ、早く、早く、さあさあこの船におり下さい、訳は後でゆっくりききましよう」

船頭は聖人を船にのせると、あわてるようにして岩からこぎさつたのである。

半丁あまりは口もきかずにこぎさつた漁師はやがて背後をさすと、

「ほうら、御出家、今まであんたの居た所は何処だがわかりますか、わかりますまい、もう海の中へ吸いこまれてしまつたんですぜ、危ない処だつた」

漁師はほつとした様な顔で聖人を眺めた。

「危ないところだつたなあ、日蓮厚く礼を申すぞ」

「今日は母親の祥月命日の日でございます、御坊さまを助けるなんて、こんな有難いことはいりません。私は川奈の漁師で弥三郎と申します。私の家へご案内いたしましたましよう」

「左様か、助けられた以上はお前にこの身体は委せる、たんとでもして貰いましよう」

陽はとつくに落ちてあたりは暗かった。雨雲が海面をおうて、十二日の月は何処にあるのか一向にわからない。

「あすこが川奈でございます」

弥三郎にいわれてみると、そこには暗い中にも、お椀のような可愛い入江がみえてきた。

「おや、ばかに松明があつちこつちと動いておりますなあ」

「左様じゃなあ、あすこが川奈の部落か」

「これは、なにか部落に起きたに違いない、失礼ですが御僧侶、あなたは鎌倉におられたといいましたなあ」

「わしは鎌倉の日蓮というもの、仔細あつて今日伊豆の伊東へ流人となつた」

「そうでしょう、それで村ではあの様に騒いでおるのでしよう。よろしゅうございます。この弥三郎が引き受けました。なんとか、おかくまい申しませう」

弥三郎は入江に舟をつけず、まっすぐに伊東よりに舟をすすめると、入江のぼずれのえぼし岩に舟をおいて、

「さあさあお上りください、ここであの松明の灯がみえなくなるまで少し様子をみましょう」と聖人へ言葉をかけるのだった。

伊豆の月

川奈というところは平地が少なく山が海にせまっているところである。北側は殆ど平地がなく山は海にせまってけわしい断崖になっておるが、南側は山が多少ゆるやかなので、傾斜の土地に藪があり、樹木があつて、人家がそこに点在しておる。五月十二日の月は雨雲をかぶつて、ぼうつとかがやいておつた。これ等の地点を望む七、八丁余の遠方のところにえぼし岩がある。えぼし岩に舟をつげた弥三郎は、舟からおりた聖人を案内して北側の断崖の下を静かに歩き出した。

「お聖人さま、松明の灯がだんだん山にあがつてゆきます」

「……………」

鬼火のような松明の灯が南側の傾斜を上つて、やがて山上に達したが、ふっと急にみえなくなつてしまつた。

「あれは庄屋が村の世話人どもをつれて、お上のおふれをふれ歩いている灯りでございます。今

時分ふれ歩くとは、余程火急のごさいますよう」

「弥三郎と申したなあ、あのふれあるきはなあつ、鎌倉の流人日蓮という僧侶をかくまつてはならぬというお達しだ……」

「お聖人さまもお気づきでございますか、さようでございますよう。私めが漁にでる時まで、なんのお達しありませんでしたが遅くなつてお達しが届いたものと思われます。足許に気を付けて私めについてきて下さい、ご心配はいりません」

川奈の磯は篠見浦とは違つて波音もなく静かなものである。聖人を案内した弥三郎は、崖下のでこぼこ路を五、六丁歩くと、ある岩穴の前にたちどまつた。

岩窟の上は樹が生い茂っている山になつており、岩窟の前には波が静かによせていた。兩人の足音に舟虫がさあと逃げだしてゆく。

「お聖人さま、まことに申しかねますが、この岩屋の中で暫くお待ち下さい。様子をみてまいります。そんなに暇はかかりません。手前の家はこの岩屋の真上になつております。真上と申しましても、道がけわしいのでまつすぐにはゆくことが出来ませんから、四、五丁はありますが、それでもたいした時間はかかりません。ちよつくらいつて様子をみてまいります」

櫓を岩屋の中にもうりこむと、弥三郎はいそいで出ていってしまった。

聖人は独りになると、やおら岩屋の中に入られた。勿論人の棲むべき場所ではないから、

自由に身を置く余地はなかった。ここは漁師が漁に使う道具を置く場所であるらしい。櫓とか楫とか網などが雑然と置かれてあった。

一枚の筵をみつけると、合掌をした聖人はそれを敷いて、入口に向かってやおら坐られたのである。

中はまっくらであるが、外には海がきらきらと光っていた。雨雲を破った月がおそらく照っているであろう。十二日の月である。眼がなれると四辺にちいさな蟹がいるのがみえてきた。蟹は月光をもとめて、ぞろぞろと岩屋の外にでていくのであった。

「日蓮はあの蟹がうらやましいぞ、月の光りをさけてこの岩屋の穴に身をかくさねばならんとは、南無妙法蓮華経……」

聖人は静かに題目を唱えられた。

幕府は如何なる理由によつて聖人を伊東へ流したのであるうか。

「日蓮が生きたるを不思議なりとて伊豆の国へ流しぬ」或は「殺されぬをとがにし、伊豆の国へ流されぬ」と御自身でおっしゃっておる。これは昨年の松葉が谷の草庵焼き討ちをさしておるのである。この時に幕府は聖人を焼き殺したものと思っておったのである。それは聖人を焼き討ちにした念仏門徒には何等の処罰がなかったことでもわかる。当時の法律たる貞永式目第三十三条に「放火は盜賊と同じく死罪に行う」とあるが、念仏門徒にとつてはそれは空文であった。しか

るにその日蓮が生きておったので、執権職北条長時は大の念仏者たる父親重時の心中を察してこの伊豆へ聖人を流したのであろう。聖人もこの内情を察して、妙法尼御返事に「長時武蔵守殿は極楽院殿（重時）の御子なりし故に親の心を知りて、理不尽に伊豆の国へ流し給ぬ」と御自身で語られておるのである。さればこそ一回の訊問もなく、逮捕と同時に流罪に処されたのであろう。

貞永式目第二十二条には「一、悪口の科の事。右鬪殺の基は悪口より起る。その重きは流罪に処せられ、その軽きは召こめらるべき也」とあって、悪口は流罪に処すとあるが、これを聖人の諸宗批判にあてはめれば、適用されるといふが実はそんなものではなく、これは聖人が賢察された如く、執権職北条長時が、念仏者たる父親の重時に対する親孝行の一端であったのであろう。だがこの親孝行は逆効果であった。重時は聖人を流罪した五月十二日から二十日もたため六月一日より発作が起り御祈禱もいろいろやったが効果もなく四か月後の十一月三日に病死しておる。この病死したことが聖人の伊豆伊東の流罪が赦免になった理由なのである。

弥三郎夫婦

「女房、今帰ったぞ……」

「まあ、あんた。随分と遅くなりましたなあ。何か、変わったことでもありましたか」

「いや、変わったことはなかった。ああ腹がへった。女房、飯はないか……」

「おかしなことを訊きますねえ。飯がないかって、いつもいつも晩飯は。あんたが漁から帰って一緒にしているではありませんか、少しぐらいは遅いからとて、私がまつておらないとも思いましたか……」

「これはこれは、女房殿にはえらい剣幕でござるな、あやまる、あやまる、では飯にしよう」

「はいはい、ほうら支度はとつくに出来ておりますよ、ほうら」

「痛いっ、いたい、いたい」

「どうなさいました」

「ああ、腹が痛くなった。急に腹が痛くなったので、飯はお前一人だけたべなさい」

「まあ、いやなこと。腹がへつたといったり腹が痛くなつたといったり、一体どつちが本当なんです」

「両方とも……………」

「嘘なんでしょう……………」

「いや両方とも本当だ……………」

「どういたしましたして嘘だと顔に書いてありますよ……………」

「馬鹿なっ」

「あんたがいい出すまではだまつていようと思つておりましたが、今晩急に庄屋殿からおふれがありました。その使は今さつき帰つたばかりでございます」

「で、おふれというのは一体どんなことであつた」

「それは、本日鎌倉より日蓮という流人があつた故、かくまつては相ならぬ。情けをかけては一切相ならぬという、きつい、おふれでありました。日蓮という坊さんは、南無妙法蓮華経と唱えるから、すぐわかる、そしてよその宗旨を悪くいう悪坊主であると申しております」

「あんな立派なお坊さんを、そんなことをいつておるのか、馬鹿なっ」

「おやつ、あんたは日蓮という坊さんをしておるのですかい」

「なんでおれが知ろうか。この年になつてもまだ鎌倉をみたことがないではないか」

「でもあなたは今、あんな立派な坊さんといったではありませんか」

「そんなこと知らぬ、俺がいう筈がない」

「あなたは、私にかくしておることがありますねえつ、いって下さい。どうしたんですか」

「夫婦の仲というものは、どうしてこんなに嘘がいえないものかなあ、いまましい。女房その飯櫃を俺にくれい」

「ええつ」

「面倒くさい、その飯をなあつ、握り飯にしてその桶に入れて俺に呉れいっ」

「そしてどうします」

「俺はなあ、それをもつて一寸下の岩屋までいってこねばならんだよ、なんにもいいなさんな」

「では、あなたは、日蓮とかいう坊さんを」

「そうなんだ、今日は母親の命日、殺生はいくら漁師でもやめようと思つたが、今日の潮かげんを眺めると、どおしても篠見ヶ浦まで船を出したくなつてしまつた。たいした漁のないのも今日は却つて功德を積むものと、自分にいいきかせながら、鳥崎の鼻を廻ると驚いた。大きな坊さんが海からでも涌いたかと思うようにあのまな板岩につつ立っているではないか、俺はびつくりして訳もきかずに船に乗せると、早速に汐をかわしてこいで逃げたが、今一寸おそれればあ坊さまは魚の餌よ。それがお前のいう坊さんだったのだ。自分から鎌倉の流人日蓮と申すと正直に

いわれた。伊東から三里も離れた篠見ヶ浦を伊東だと役人は嘘をつき、何処にもゆくことの出来ぬまな板岩をこれから磯つづきにゆけばすぐ伊東だと、だまして捨てていったらしい。いくら役人だといつてもすることがひどい。俺はどうしても日蓮という坊さんをかくまう気だ。女房どうだ、お前はいやか」

「……………」

「返事のないのは不承知と思うがどうだ。そりゃあ五月で米も心ぼそい時に、あのでっかい坊さんを養うのはなかなか骨だ。俺も最初は舟をつけたら、すぐ何処かにいつて貰うつもりでおったが、一寸の間船にのせていただけの時間なのに、もういけねえ、あの坊さんになんというのか、ほれてしまったんだ。お前には内緒で、俺の飯をはこびたかったんだが、面倒くさいので白状してしまった。どうじゃ女房、米の飯がおいしいか、それとも有難い坊さんを助けるか、早く返事をしてみろ」

「まあ、あんた、そう息せききつていわなくてもようございます。あなたがその気持なら私もあなたの女房、一緒になって、その日蓮とかいう坊さんを助けましょう。これも前世の約束というものでしょう。さあ握り飯を握るから、あんた早く持つていつて上げて下さい。さぞお腹がすいているでしょう」

「ああ、それを聞いたら俺も急に腹がへった。俺にも少し食わしてくれい……………」

「そんな気持では人は助けられませんか。生つばでも呑んでいらつしやい。握り飯をこしらえて、残りがあつたら、あんたにも上げましょう。それも、その日蓮さんとかいう坊さんに握り飯をとどけてからのことですよ」

「えらいことになってきたわい。女房、人を助けるといふことは腹がへるもんだなあ……」

岩窟の生活

「御聖人さま、おと^音きを持^食つてまいりました」

「これはこれは弥三郎殿の女房か、毎度ご苦勞さまでありますなあ、弥三郎殿はもはや漁にでられたかなあ」

「はい、とつくに漁にでてゆきました」

「この日蓮も漁師の息子でなあ……」

「まあつ、御聖人さまご冗談を……」

「これはこれはご冗談とは痛みいる。法華経という法船に日本国の一切衆生をのせてあやつろうとする船頭のこの日蓮も、実は漁師の息子じゃ、安房の国の海人^{あま}の子供だ。荒波を小守唄にきいて育つたこの日蓮、一寸やそつとの波なぞでは船酔はいたさぬ」

「本当でございますか……」

「本当とも、泳ぎも達者なものだ」

「その御見事な御身体で泳ぐところは立派なものでございましょう、だがその身体には全く御窮窟なこの岩屋すまい、おいたわしう存じます」

「いやいやなげかれては、こちらが痛みいる。樹木石上をすまいとするのが僧家のならい、しかも三度のおときを人目をしので運んで下さる。こんな有難いことがあるうか、南無妙法蓮華経……日蓮深く感謝しておりますぞ」

「お聖人さま……」

「なにかなあつ」

「お聖人さまは何故南無妙法蓮華経とお唱えになるのですか、この辺では皆南無阿弥陀仏とは唱えますが、そのようには唱えません、変った唱えでございすなあ、しかもその南無妙法蓮華経を唱えるために、鎌倉を追われ、まな板岩に捨てられて、危ない命だったとききました、南無妙法蓮華経とはそんな有難いものでございすか」

「有難いとて、有難いとて……まな板岩にすてられてもこのように生きておるではないか、しかもお手前の如きご婦人が食まで調べてわざわざ運んで来てくれるではないか、こんな有難いことがあるうか、すべてこれを法華経の御利益と申さねばならんだ」

「まあ、それはお聖人さまが勝手にそう思ってるだけでございすよ、私どもはただ助けただけでございますのに」

「ところが法華經にはお手前のことが既に書かれてあるのだ」

「ええつ、どんな風にですか」

「法華經第四に、及清信士女供養於法師云々とあつて、法華經を行ぜんとする者には、諸天善神等が、或は男となり、或は女となり、形をかえて、さまざまに、法華經を行ぜんとする者を供養して助くべしと經文に説かれてあるのじゃ、そして疑いなく、今この日蓮の前にお手前が供養に現われておる、法華經の經文に一字一句の間違いもないではないか。不思議とは思わぬか……」

「そういえば不思議でございます」

「それ、それ、その不思議を法華經では南無妙法蓮華經と申すのだ。この世は不思議なことばかりじゃ。この川奈には南無妙法蓮華經と唱える人は一人もなく、みな南無阿弥陀仏だと只今申したが、その阿弥陀仏は、何処から生れてきたのかなあ、考えたことがあるか。阿弥陀仏も生れながらにして仏ではなかった筈。仏になる前には何という名であつたかと言うと法蔵という坊さんであつた。この坊さんが修行をして始めて阿弥陀仏という仏になつたのじゃ。では何を修行して仏になつたかというと、法華經を修行して仏になつたのだ。

釈迦仏も法華經を修行されて仏になつたのだ。一切の仏、一切の菩薩がすべて法華經を修行して仏様になつてござる。お手前は只今日蓮に米の乏しいこの五月に食事を毎度運ばれて下さるが、日蓮が有難いといつてその食事を運んでいるだけであつたらどうじゃろう。お手前の志も無

になり、この日蓮もやせてしまう。食事はただかねば身の栄養とはならぬのじゃ。それと同様なこと、成ってしまった仏さまをいくら拝んだとて仏にはなれぬ。どうして仏さまになったかと、その道理をきわめ因果をきわめて修行することが仏になる道だ。仏さまもそう教えておる。特に今の時代は仏の教からいうと末法といって釈迦仏の唯一の法華経しかねうちのない時代になつておる。ところがこの仏の教にそむいて阿弥陀仏という、われわれにとつては一向に縁のない仏様を、日本国中の人々が拝んでおる仕末じゃ。御利益のあるう道理がない。御利益のない証拠が数年来の天変地天飢饉疫病となつて現われておる。弥三郎殿も、日蓮のいうところが理解されたようじゃ。女房殿も南無妙法蓮華経とお唱えなさい、これも不思議の法縁じゃ、恐らく日蓮が過去の父母がこの伊豆の伊東の川奈に生れきて、このように、すすぎ洗濯、食物の世話までいたしてくれるのであらう。有難いことぞ。南無妙法蓮華経……」

「……南無妙法蓮華経……」

「おう南無妙法蓮華経と唱えられたなあ、目出度い……」

「はい、余りもつたいたいことをお聖人さまがいわれるので思わず南無妙法蓮華経と口から出ました」

「それでよろしい。始めは誰しも大きな声で南無妙法蓮華経とは唱えられないものだ。さあ一緒にお題目を唱えよう」

「南無妙法蓮華經」――――

聖人と弥三郎の女房とが一緒に岩窟の中で御題目を唱え終った時である。岩窟の外で、それにこだまする如く、

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

と御題目の声がきこえてきた。弥三郎の女房がはつとして聖人の顔をみた時である。にっこり笑われた聖人はいった。

「日興……………」

「お聖人さま……………」

岩屋の中へ声ともに飛びこんできた。弟子の日興（十六歳）であった。背中に大層な荷物をしよつておる。大聖人の顔をみて力つきたか、岩にけつまずいたか、ドツとその場に倒れてしまった。

「おあぶのうございませす」

弥三郎の女房があわてて声をかけた。

「けがはないか……………」

大聖人のいたわる声に、日興は、

「はい大事ありません」

といいながら、涙でくもる眼で大聖人をじつとみあげるのであった。

「鎌倉の様子はどうか」

「はい、お聖人さまが流罪になりました故、その弟子たる私どもにも何等かの処置があるかと思いましたが、それは全くございませんでした。お聖人さまの流罪がすでに一回の訊問もなしで不当の処分故、それ以上不当の処断をつづけることができなかつたとみえます」

「それは大慶、して皆無事か……」

「はい皆元気に信心を励んでおります。私はお聖人さまの船がでると、白帆をたよりにくが^陸じから走ってゆきたかつたのでございますが、日昭殿や日朗殿からお赦しが出ず今までぐずぐずしておりました。その代り、皆様からこのことづてや、食べ物をご覧下さい、この袋一杯しよつてきたのでございます。さあさあこの袋の中にはお聖人さまの好物のものが入っております……」

「私の好物のものとは何かなあ……」

日興は袋をひきよせると、紐をほどいて一番最初に竹の筒をとりだしたのである。

「この竹筒でございます……」

「あつはつはつ」

聖人は呵々大笑せられた。岩窟にびつくりする程聖人の笑い声はこだまして、日興と弥三郎の女房達の耳を心地よく打つのであった。

「それまでよく気づいたなあ」

「はいっ」

「有難い。早速賞美というところだが、何分にも流人の生活、少し遠慮しておこう」

「お聖人さま、それは何でございますか」

弥三郎の女房は竹筒を指さした。

「日興、弥三郎の女房殿がお尋ねじゃ。その竹筒の中はなんじゃなあ」

「くすりでございます」

「くすりといいますが、何のくすりでございますか……」

「ええつ、それは身体のあたまのくすりでございます」

「まあつ、鎌倉にはそんな結構なくすりがございますか、私の亭主はご存知の通り毎日漁に出ますので、身体がえろうひえて困ります、どうか、お弟子さま、私にもそのくすりを分けて下さいまし、お願いでございます」

「お聖人さま、なんといたしましたでしょうか」

「おお、弥三郎殿に分けるもあげるもよろしい、鎌倉の結構なくすり、竹筒ごと進呈してもよい、だが女房殿、弥三郎殿も毎晩用いておくすりじや、そう不思議がることはない」

「と申しますと、おさげでございませうか」

「さようじや」

「まあつ、お弟子さまのご冗談の上手なこと、おさげをおくすりなどと真面目にいつて」

「いやいや弟子が冗談をいつたのではない。五戒の中には、ひがごとを制するがために酒を呑んではならんという戒がある。大論には酒に三十六のとががあるといい、又梵網経にはさかづきをすすめる者、五百生に手なき身と生ずるといつて、酒を飲むことを禁じてある。但し、薬酒をば用うべしとある。日蓮が呑むのは薬酒であつて酒ではない訳じや」

「まあ左様でございませうか、結構なおくすりでございませうなあ、岩屋すまいの、筵の生活、早速お用いなさいませ、身体がひえることとございませう」

「女房殿、今もいつた如く流人の生活、ちと遠慮しておこう。だが、近く地頭より呼び出しがあるから、その時には弥三郎殿とゆつくりいただこうと思つてゐる」

「お聖人さま……」

と日興は言葉をさへぎつて続けた。

「私めが、ここにくる途中、道々噂できいたこととございませうが、この地頭は病氣だそうで

ございます。しかも医者にも原因がわからず困っておるとききました。ようきいてみますと、不思議にもお聖人さまが、この地についた五月十二日の夕刻から発病したということでございます」

船守弥三郎

「弥三郎はおるか………」

声とともに、庄屋を先頭にたてて、四、五人の村の衆が家の土間にはいりこんできた。

夕げの支度をしていた女房は、はっとした顔をしたが、それもつかの間で、落着いたようすで、静かに答えた。

「はい、今しがた漁から帰りましたばかりで、背戸の方で身体をふいておりますが、何ぞ御用でございますか………」

「女房どの、落着いている時ではないぞ、早く、弥三郎をここに呼ぶがよい」
庄屋についてきた村の衆から声がかかった。

「はいはい、さつそく呼んで参りますから、ここにお掛けなさいまし、もうし弥三郎どん………」

女房が奥へ声をかけて、炉端から立ち上ろうとした時、ぬれ手拭を片手にもった弥三郎が、

「なんじゃい………」

と言いながら、部屋にはいりこんできた。

「これはこれは、庄屋様はじめ皆さまにはお揃いでございますか。この弥三郎に何か御用でもございますか」

「弥三郎、これだけの顔ぶれを揃えてきたからには、御用の趣きわかつておるであろうな？」

「ええっ」

弥三郎は、思わず女房と顔を見合せて返事をするのであつた。

「庄屋さまのお言葉、いっこう夫婦どもにわかりかねますが、どんなことでもございましょう」

弥三郎の女房が口をはさんだ。

「夫婦二人してとぼけるつもりか、これは驚いた。庄屋さま、早くいつてやった方が、嘘をつかせないですみますよ」

「弥三郎にはこの庄屋が、女房から申し伝えるようにいいおいた筈だ。たしか先月の今日、五月十二日の夜であつた。鎌倉よりの流人、日蓮なる僧侶をかくまつてはならぬと、しかと申し渡しておいたが、女房、よもや忘れましたと申すまいなあ。返答はどうじゃ。」

「はっ、はい」

女房の答には力がなかつた。

「弥三郎は、女房よりその村中一統へのおふれをきかなかつたとでも抗弁いたすつもりか、返答

はどうじゃ」

「弥三公やいっ」

庄屋のお伴が声をかけた。

「弥三公っ。かくしても駄目なんだ。お前が、坊さんを下の岩穴にかくまっておるのは、もう村中の評判になつてゐるぞ。もう少しおとなしくかくまつてればよいものを、日蓮坊と一緒にゐて夫婦で、南無妙法蓮華経と唱えておつたんじや、知れ渡るのがあたりまえだ……」

「どうじゃ弥三郎、返答をしろ」

庄屋と一緒にゐて叫んだ。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

弥三郎が一同の腹わたにしみこむような声で唱題すると、女房も続いて唱え始めたのである。

「南無妙法蓮華経」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

庄屋を始め五、六人一同は、ただ茫然として土間につつ立ったまま、弥三郎夫婦をしばらくの間眺めているだけであつた。

「弥三郎が南無妙法蓮華経と唱えるのを、庄屋は自分の耳できいたぞ」

庄屋は大きな声で叫びながら言い続けた。

「弥三郎、この川奈の村には、南無阿弥陀仏の声はしても、南無妙法蓮華経など唱える奴は一人もおらぬのだ。南無妙法蓮華経と唱える以上は、この川奈の村を、たった今から出ていってもらわねばならないぞ」

「そうだそうだ弥三公、手前も念仏の悪口をいう坊主とぐるになつた以上は、とつとこの村を出ていってもらうぞ。坊主の方は念仏講の連中が、今宵のうちに海坊主にでも食わせてやるわ。大方の手筈を庄屋様がじきじきにきめて、実はてめいの処へやってきたのだ。さあさあご慈悲だ。荷物の少しもつとつとでかけろい」

弥三郎はさすがに顔面を蒼白にさせたが、言葉だけは落着いていた。

「いかにも、この弥三郎夫婦は、地獄ゆきの念仏の珠数をきつて、法華の衆になつた。鎌倉からこられた尊いお聖人を、何の因縁かまな板岩にお助け申して、お聖人よりじきじきに船守りの姓をもらつて、今は船守弥三郎と名も改めて信心修行だ。上原の姓をすてた以上は念仏を唱えるこの村には、一人の親類縁者もないのだ。この川奈の村には何の未練もないわ。女房てめえは女だ。まさか、念仏の奴等がいくら意地悪でも、女には手だしはしまし。そこいらの荷物をまとめとそれこそ、とつとと背戸から逃げだせ。だが、この弥三郎はそうはいかねえ。南無妙法蓮華経と唱える以上は、自我偈の文句じゃねえが、不自惜身命だ」

土間に飛び下りた弥三郎は、壁にかけた櫓をつかむと、仁王立ちになっていった。

「今ききや、お聖人さまに、念仏講の奴等が何か、悪さをたくらむ様子。女房、てめえは逃げる、俺は庄屋のどてかぼちやなぞに構っておれねえ。なにがなんでも、下の岩屋までは、死んでも駆けつけなきや、もつたいねえ。邪魔だてすりや、命はもうぞ」

弥三郎の勢いにのまれた人びとは、

「わあっ…」

と言いながら皆、家の外へとびちってしまった。

「女房つ、忘れるな、南無妙法蓮華経だぞ」

弥三郎は女房に励ましの声をかけた。

「お役人だ」

「お役人さまがみえたぞ」

「伊東からお役人さまがみえたぞ」

「それつ、弥三郎をとりがすな」

家の外で大勢がどなりたてた。

「お前さん、お役人がみえたと外で騒いでいるよ。どうすりゃいいんだい私達は……」

「てめえも気の小さい女だ。何がこようと、南無妙法蓮華経のほかにあるものか。てめえは早く

背戸から逃げて、役人につかまるな。俺は日蓮さまに捧げた命だ。役人がおそろしくて、南無妙法蓮華経が唱えられるかい。すくねええにしまったが、まあ、あきらめろ」

「いやだよ。わたしや、こんな別れ方は……」

「馬鹿野郎、寂光土じゃ一緒だと、日蓮さまがいつてるわ……」

「……………」

「早く、背戸から逃げろ。俺は腕のつづく限りあばれて、少しは、川奈の弥三郎の法華魂をみせてやるのだ」

弥三郎は、女房に言い放つと、獅子奮迅の勢いで櫓をかいこんで、家の外にとびだした。

六月十二日の月が竹藪の上にかかつて、庭はぼうとうすぐらかった。

「それっ、弥三郎を逃がすな」

「それっ、弥三郎の奴。御覧の通り乱気いたしております。早く召し捕っていただきますでございます」

伊東から出向いた役人が四、五人、藪の月影の中にいた。

役人は、弥三郎の姿をみると声をかけた。

「弥三郎とか、気を静めい。思い違いをするではないぞ。召し捕りにまいったのではないぞ」

「ええっ」

弥三郎より、庄屋と村の衆が驚きの声を放った。

「弥三郎に頼みがあつて、わざわざわれら五名が伊東から参つたのじゃ、思い違いをするでないぞ、庄屋、乱気しておるのはお前達のことだ」

「何んといわれますか。お役人さま、手前はこの川奈の村の庄屋庄兵衛にござります。弥三郎こそは、過日おふれのありました鎌倉の罪人、日蓮坊なるものを、先月以來三十日程浜辺の岩屋にかくまい申しました罪人でございますぞ。あれ、その通り庄屋の言葉にも従わず、暴れ狂つております。早く早くお召し捕りの程を願います」

「だまれ、だまれ。庄屋こそ静かにいたせ。これ弥三郎、静かにきけよ。実はなあ、伊東の地頭伊東八郎左衛門尉朝高様は、われらが主人であるが、不思議なことに先月五月十二日の夜よりご病氣になつてひどい高熱じゃ。いくら医者にかけても少しも験がみえない。もはや命があぶないところで、手のほどこしやうがなく、家来一同悲嘆にくれておつたのだ。しかるところ一昨日より陰陽師を頼んで占つてもらうと、この川奈の岩窟に一人の高僧がひそかにおられるとのこと。その高僧に御祈禱を願えば、病氣はたちまちにして癒えるとのことであつた。よつて秘密に探つてみると、鎌倉より日蓮なる御僧侶が川奈にきておられて、弥三郎お前がひそかに御供養申しておること。さようか弥三郎……」

「さようございます」

「弥三郎でかしたぞ……。お前がわれらを案内して、日蓮さまに御祈禱をたのむように取り次ぎをたのむぞ」

ことの意外の急変に、弥三郎はしつかりと握っていた櫓を庭にすてた。折から藪の影をはなれて、中天にかかった十二日の月は、合筆をしている弥三郎の姿をくつきりと映し出した。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

この弥三郎の唱題に唱和する題目の声がめつた。それは戸口に立つた女房の声である。

「女房よろこべ、南無妙法蓮華経だぞ」

弥三郎は女房に声をかけると、二人して一段と大きな声で月にもとどけと唱えるのであつた。

「南無妙法蓮華経」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

.....

.....

.....

「弥三郎、お前の喜ぶ気持はわかるが、こつちも急の用だ。早く、下の岩屋に案内をしてくれい」
役人から声がかかった。

「おうそうだ。こうしちやおれない。庄屋の話では、念仏講の奴等がなにか、日蓮さまに悪さをたくらんだとかの話。女房、お前が役人さまを案内しろよ。俺は一足先に岩屋に駆けつけて、日蓮さまの邪魔をする奴等があつたら、ただではおかねえ」

捨てた櫓をもう一度握りしめると、

「お役人さま、弥三郎、一足先に参ります。南無妙法蓮華経」

うれしさをお題目にまぎらわせた弥三郎は、下の岩屋をめがけて、一目散に駆けだした。

仏像出現

「お聖人さま、手前は、伊東の地頭八郎左衛門尉の家来で綾部正清と申しますが、お願いの義があつて参上いたしました」

岩窟の聖人の前に、ていちように手をつくのであつた。今まで岩窟の周囲は、がやがやという人声で賑やかであつたが、それも静まつた。川奈の念仏講中の人びとが、聖人に危害を加えようとして、すでに行動に移らんばかりであつたが、この時駆つけた弥三郎の捨身の勢いと、続いて現われた地頭の家臣綾部正清の制止によつてことなきを得たのであつた。

なにごともしなかつたような顔をして、弘長元年六月十二日の月が天空に輝き、ここ川奈の浜には静かな波の音がきこえていたのである。

魚灯一つの岩窟の中に、聖人と弟子の日興が仏像のごとく動かない。正清の言葉は続く。

「主人は不思議なことに、お聖人さまがこの川奈にまいりました去月の十二日より発病いたしましたのでございます。百方医療に手をつくしましたが、一向にそのしるしもなく、祈禱師もたのんで

あらゆる秘術をつくしましたが、それも露ほどのしるしがございません。いまは主人とは申せ骨皮すじの餓鬼のごときあさましいいたらくでございます。占師をたのんで占わせましたところ、不思議なことを申すのでございます。これは仏さまのたたりであると申すのでございます。不思議なことがあればあるものだと思いますが、手前の主人はもはや言葉も通じない程の重病でございますので一向に要領を得ないでございました。ところがこの占師の噂が屋敷中に伝わりますと、ものおぼえのよい下人かおりましてこんなことを申しました。大分前のことでありますが、伊東の浜の沖に毎夜々々光りものがあつて、人が騒いだことがございました。なんだろうなんでしょうと浜辺で騒いでおるばかりで、誰も正体を見とどけようとは一向にしなかつたのでございます。

ところが勇氣のある漁師がおりまして、毎夜の光り物をこわがつて船を出さぬとは、浜の名折れであると、ある夜船を出して網を投じましたところが、仏像が上つたのでございます。仏像では漁師も料理のしようがございませんので、もてあましておりましたが、地頭様にとどけたら、ご褒美でも出るかと思つて漁師はその仏像を地頭様に届けたのでございます。地頭様はおつて沙汰をいたすぞと、たった一言おっしゃつたそうでございしますが、それなりで日がたつてしまつたのでございします。

その仏像ではなかるうかとの下人の進言でございました。毎夜海中より光りを発するというよ

うな靈仏ならば、拝まないでほっておけば、たたりぐらいは十分ある。さあ大変だ。その仏さまを拝めば治る。おがめおがめと家中が騒ぎたてましたが、こんどは一向にその仏さまのありかがわからないのでございます。たにしろ当の御主人がご重態で口もきけない。紙に書いてきいてみましても首をふるどころではございません。せめてうわ言でもいってくれまいかと思つても、なんにもいってくれないのでございます。暗夜の海底にあつて光りを発するぐらいだから、暗くしたら仏像が光りだすだろうと、屋敷中に灯りを厳禁しました。昼間も戸締めにしたしておりますが、今度は仏像が一向に光ってくれません。夜も昼も真暗な屋敷の中に病人の呻り声だけが聞こえるという。無気味さでございます。どうぞお聖人さま、御慈悲でございます。お助けをいただきますとう存じます」

綾部正清という家臣は、平身低頭して願うのであつた。

「これはこれは伊東の地から、わざわざ日蓮の名をきいて祈禱を頼みにまいられたか。現前に病人をみて、この日蓮はあわれと思わぬとは申さぬが、地頭が信を法華経にとうぜねば、どうして、法華経へ御訴訟ができればか、感応道交を願うことは叶うまいがながなものじゃ」

「お願いとはそこでございます。何分にも、地頭様が言葉を発せぬのでございますから、そこまでは申し上げられません、本復いたせば、ご内室を始め家人、下人にいたるまで、念仏をすてて南無妙法蓮華経と唱えるつもりでございます。いやいや玖須美の屋敷まで、お聖人さまがおい

でございましただけで、伊東八郎左衛門尉のご内室を始め家来下人一同は、病人の主人に代わりまして南無妙法蓮華経と唱え奉つるものでございます。どうか、この真情をお汲みとりくださいまして、只今でも、この岩窟を出て、どうか伊東の地へおこしを願うものでございます……」

聖人は静かに答えられました。

「これ日興つ、伊東へまいろう。支度をしなさい……」

「お聖人さま、家人が家探しいたしても一向に分らなかつたのは、あれなる仏像でございます。只今はあのような床の開に安置しておきましたが、まことにおそろしいことでございました。もしお聖人さまの御祈念をいただかねば、この朝高は今頃は地獄の何丁目かを歩いておるところでございます」

聖人の祈禱によつて、今はすっかり病のいえた伊東八郎左衛門尉は、四、五十日振りで声を出して笑うのであった。上座にすえられた聖人の顔には慈愛がみちあふれていた。

「左衛門尉殿、御本復まことにおめでとうござる。貴公はいよいよ信心を励まねばなりませんぞ。法華経の第七の巻には、この経は、これえんぶだいの人の病の良薬なりとありますれば、この法華経に信心をいたせば本復いたすは、仏の金言であつて、少しも日蓮の私意ではありません。そもそも病になる因縁を明かそうなれば六つあります。一つには四大即ち身体が不順なるが

故に病む。二には飲食の節度を失うが故に病む。三には心常に動揺するが故に病む。四には悪鬼便りを得るが故に、五には魔の所為、六には業の起るが故に病むとあります。しかしながら、貴公は病を得たが故にこの日蓮に逢うことができた。病ある人、仏になるべしとはこのことです。病によって道心はおおると申しますが、御貴殿の現在がこれです。こう考えれば、病も嬉しいでしょう。」

「いやいやお聖人、朝高今度ばかりは苦しみました。もうこりごりです。これからはお聖人の言葉通りに信心を励むつもりでございます。ついては、あれなる仏像でございますが、海中より出現したは不思議な仏像でございます。お聖人さまのような御高德なお方に御所持を願います存じます」

「左衛門尉殿、貴公はあれなる仏像をなんと思われておりますか」

「なんと申すと申しますと、つまり、みられる通りの仏像でございますが、やはり阿弥陀さまでございますか……」

「とんでもない。あの仏像は釈迦牟尼如来の尊像、釈迦仏の像でありますぞ。今、日本国中の寺々の釈迦仏の像は指をきられて阿弥陀の仏像にされ、日本国中に称名念仏の声があふれて、仏像といえは阿弥陀の像ばかりと申してもさしつかえがありません。御貴殿がこられない以前に、先程この部屋に入ると同時に、日蓮は思わず合掌礼拝いたしましたのです。何故ならば、日蓮はこの伊

豆の伊東に法華經の故に流罪に処せられたのであります。

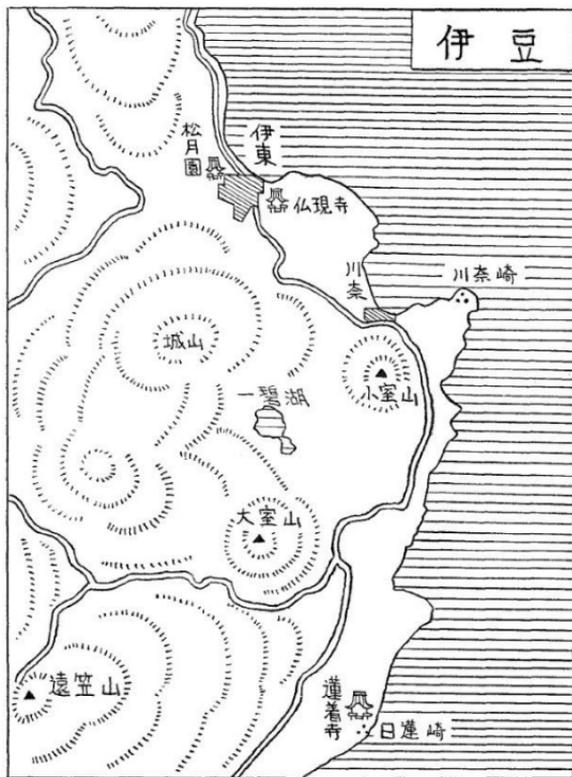
釈尊は末法において法華經を説くならば、必ず刀杖瓦石の難、しばしばところをおわれる難等に逢うべしといわれておりますが、今の日蓮はモの法華經を説いたが故にここ伊豆の伊東に流罪にされました。それなのに、その伊豆伊東において、海中より出現の釈迦仏におめみえするとは、ただ感激のほかはありません。日蓮が法華經の行者なることを証明せられて、釈迦仏海中より出現し、貴公の病悩を縁として、ここに現われた尊い仏像と存じます。もし日蓮にこれを賜うならば、生涯身よりはなさぬ隨身仏といたしましょう」

「それ程までにお喜び下さるとは、朝高は思ってもおりませんでした。お言葉をうかがって大変に嬉しく思います。どうぞ……」

朝高は床の間に進んで仏像をいただく、聖人のお手に渡そうとした。聖人は法衣の袖に仏像をうけると、

「朝高殿、一心欲見仏、不自惜身命と法華經の自我偈にあります。仏を見る一心をみれば仏であります。法華經以外の經文にては心のすむことは月のようであるとか、心のきよいことは花のようであるとか申しますが、法華經ではそのように申しません。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門が法華經の法門です。法華經以外の經々は世法をもって仏法をみておりますが、法華經にては、世間の法が仏法の全体と釈せられて、世法即仏法、仏法即世法となっております。一念三千

の法門よりすれば、凡夫即仏なり、仏即凡夫であります。末法に入れば法華經を持つ男女の姿、即仏の姿であります。この大法門こそ、釈尊が末法に入って病い重きわれわれに特に残された大良薬なのであります。末法において法華經の故にこの伊豆の伊東に配流の身となり、今その釈尊の尊仏を、わが法衣の袖におしいただかんとは、日蓮ただ今生の思い出これにすぎるものはありません……」



四 恩 抄

川奈から伊東にうつられた聖人は、伊東八郎左衛門尉朝高の屋敷にほど近い、玖須美の地の草庵に、流人の生活を送られたのであった。

伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐、これらの国々に流されるのを遠流といい、信濃、伊予を中流とし、越前、安芸をば近流という。と延喜式の文にあるといわれているが、これは京都を中心にしていったことである。ある書には、常陸国京より一千五百七十里、安房国一千一百九十里、佐渡国一千三百二十五里、土佐国千二百二十五里で、伊豆国七百七十里、隠岐国九百十里云々とあつて、この里数を計算すると大変に遠い感じがでてくる。

さて聖人の流罪にあたって、何故伊豆の地がえらばれたかということについては、どの本にも出ていない。伊豆は流刑の地であるから、一向に不思議とも思わず、それに言及しないのである。頼朝がひるが島に流されたのは有名な話であるが、ひるが島は百科辞典によれば、静岡県田方郡菰山村の大字。寺家じげの東方にある。その昔、狩野川がこの地を挾流して島のごとくなつてい

たので、ひるが小島というところ。島は島でも川の中の島である。

さて聖人の伊東流罪については、何故伊豆がえらばれたかを論じた御伝記書はないが、さすがに、現在の伊東市玖須美の仏現寺より発行された書物にはその理由が書かれてあるから、ここに転載しておく。私はこれを何時だったか読んで、真偽の程は別として面白いことだと思つていたので、筆記しておかなかつたので、どの書物で読んだのかを忘れてしまい、今回これをさがし出すまでに半年程、気にかけていて、やっとみつけ出したものである。

伊東市玖須美の仏現寺は、聖人が伊豆伊東配流中三か年、ご不自由の生活を遊ばされたご住居としての御霊蹟地である。その寺誌によれば、

「何が故に、流刑の場所を伊東に定めしかというに、伊豆の伊東がもつとも適當である理由があった。

当時の領主伊東朝高より三代前にさかのぼる伊東祐清の代に及ぶ。頼朝が源家の嫡流として未だ不遇であつた時、六波羅の管領で権勢をほこつた伊東祐親は、女婿たる頼朝を殺さんと計画した。この謀計を一族なる伊東祐清に応援を強いたが応ぜず、反つてこれを頼朝につけてこの危難を救うたのである。頼朝は祐清によつてことなきを得、深く祐清に報ゆることを期していた。その後、頼朝が天下を握り、鎌倉に幕府を興せし時、恩人なる伊東祐清を厚く用いて、その旧恩に報いんと篤く祐清を説きしも、これを潔しとせず、固辞してこれをうけなかつた。頼朝深く彼

の清廉なるを歎賞し、強いて報ゆるに伊豆伊東七郷を彼におくった。即ち聖人が流刑となつた当時の領主朝高（注 画讃によればこれはあさたかと読むよし、下にあるときはともと読み、上にある時はあさと音訓すとある）は祐清の孫である。頼朝の幕府は倒れ、北条の代にいたつた。故に伊東家の浮沈興廢は北条の手中にあつた。かかる実情があるが故に、鎌倉よりの嚴命は絶対的に盲従せざるを得ないのである。かかる關係を、監視嚴重を忠実になしとぐるには伊豆の伊東領こそ絶好の場所である」

以上が、仏現寺誌による、聖人伊豆伊東流刑の理由である。その当否はともかくとして、数百の伝記中にも書かれていないことなので、ここに転載して、他日の研究に供する次第である。北条氏の命令は絶対に盲従しなければならぬという朝高が、信者になつたのであるから、法華經の法力はありがたいといわざるを得ない。

「ヒマラヤの杉をぬきとつて

ベスビヤス火山の噴火口に入れ

その焰をもつて

大空に恋という字をえがく」

とかいったようなドイツの詩人ハイネの詩集を読んで、その形容の壮大さに青年の日に感激したことがあつたが、その同じ青年の日に、

「四大海の水を硯の水とし、一切の草木を焼いて墨となして、一切のけだものの毛を筆とし、十方世界の大地を紙と定めて、しるしおくと、いかでか仏の恩を報じ奉るべき」との四恩抄の一章句を読んだ時に、ハイネを驚倒させるこの雄大な形容に思わず、うむと、うなつたことのあるのを今もって忘れることができない。

その四恩抄は伊豆伊東御流罪中の弘長二年正月の著述で、聖人四十一歳の時である。

同じ弘長二年二月には、教機時国抄という大切な御法門を記述した書があるが、これはまた他日ふれることがあるから、ここでは四恩抄の大略を記述することにして、読者が聖人の御遺文を直接拝読することを切望するものである。

聖人は「そもそも流罪の身になりて候につけて二つの大事あり」と最初に書かれて、一は大いなる悦びと、第二には大いなる嘆であるといわれている。

大いなる悦びとはなにかといえ、仏さまが法華経を説くごとく行えば必らず難に逢うと、二千余年の昔、経文に説きおかれているが、日蓮は今、その仏さまの説くごとくに現在するのが悦びであるとされている。

このわれわれのすむ世界に生まれてくるものは、十悪の人びと、五逆罪を犯した人びと、賢人

聖人をののしつた人びと、父母に孝行しない人、僧侶をうやまわない人びとのみである。こういう人びとのみの集りであるから、仏様がこの世に出てこれに仏の道を教えても、仏様を毒殺しようとしたり、あるいは危害を加えようとするものばかりである。目連尊者は竹杖外道のために殺され、蓮華比丘尼はダイバダッタのために打ち殺された。智慧第一と言われた舍利弗尊者すら、クギヤリのために悪名を立てられ、アジャセ王は醉象を放つて仏を殺さんとしたのである。

仏さまが生きている時ですら、このような難があるのであるから、仏さまの亡くなった後の時代になれば、その難はますます多くなると、法華経には書かれてあるのである。

日蓮も最初に法華経の難きたるべしとの文を読んだ時には、本当に思えなかつたのに、今この伊東に流されてきてみれば、その経文が少しも間違いでないのがわかつたのである。

今の世の中では、妻子をもっている僧侶も、人の帰依を受け、魚鳥をたべる僧侶も人の信仰をあつめることができるのに、この日蓮は妻子も帯せず、魚鳥も服しないが、日蓮坊の悪名は天下にきこえ、この伊東のようなところにきてさえ（地頭、万民、日蓮をにくみ、ねたむこと、鎌倉よりもすぎたり、みるものは目をひき、きく人はあだむ。船守弥三郎御書）悪名がたつているのである。それは何故かといえ、法華経を弘めるといふのが、いけないということである。悪名がたつているのである。

自分程のものが、二千余年以前に書かれた法華経の文にのせられているかと思うとこんな悦び

はないのである。しかも法華經を信じるといつても年数の上からいえば僅かに六、七年位であり、学問や世間の用事にさまたげられて、一日僅かに一卷、一品、題目のみの時もあつたのに、去年の五月十二日に、ここ伊豆の伊東へ流されており、今年弘長二年の正月の十六日にいたるまで、二百四十余日の間は、昼夜十二時に法華經を修行しているのである。その故は法華經のために流罪に処せられたのであるから、寝るも起きるもすべて法華經を読み行ずるのである。

人間に生を受けてこれ程の悦びがあるであろうか。信心を上げようと心がけても、凡夫の習いとして一日十二時（とき）の中に、一時か二時かは励もうけれど、なかなかむずかしいものである。しかるにこの流罪の身となつてからは「思い出さぬにも法華經をよみ、読まざるにも法華經を行ずるにて候か」と思うのである。謀叛を起して流罪になつた人びとは多い。強盜、夜討などの罪によつて流罪になつた人びともある。しかるに法華經を弘めるといふことが理由で、流罪になつたものは末だ一人もおらないのである。昼夜十二時の法華經の持經者は末代にもないであろうと思つ。

そもそも佛法を習う身には、必ず四恩を報じなくてはならない。四恩とは、一に一切衆生の恩、二に父母の恩、三には国王の恩、四には三宝の恩である。

今流罪の身となつて、末代にもあいがたき法華經の持經者とたつたことは、この四恩を報ずるものとして、これ程の悦びはないのである。この悦びにつけて、大いなる歎きがあるのである。

法華經に「もし悪人あって不善の心をもつて一生涯中仏さまの前で仏をののしつたとしても、なおその罪は軽い。もし人が在家出家を問わず、法華經を誦する者をたつた一言でも悪口を吐くならば、その罪ははなはだ重い」と書かれてあるのである。日蓮はこの經文をみて、両眼より涙を出すこと、雨のごとくであった。何故ならば「我一人この国に生まれて多くの人をして一生の業をつくらしむることをなげく……」

聖人は大いなる喜びを身を感じるるとともに、聖人の真意を知らず、聖人が法華經の行者であることを知らない不信の人びとに、なげきを感じながら、伊豆の伊東に流人の生活を始められたのであった。

弘長二年の鎌倉仏教

聖人が伊豆の伊東に法華經の故に流人の生活を送るといふ、仏教史上未曾有の宗教的生活を営んでおつた時に、日本の仏教界はどうであつたらうか。鎌倉の仏教界にどんなことがあつたかを述べるのも、聖人の法華經生活と対比してむだではないと思ふのである。

聖人は伊豆の伊東には弘長元年の四十歳より弘長三年二月にいたる約一か年と八か月の流人生活をなされたのである。

四恩抄は弘長二年の正月の述作であるが、弘長二年という年は、仏教界に大きな出来事が二つあつた。

一つは親鸞上人の入滅である。日蓮聖人の御遺文中には親鸞上人に言及したところは一か所もない。法門の上からいえばその師匠たる法然上人を破折しておるから、親鸞上人に言及する要はなかつたのであらうと思う。四恩抄の中に「世末になりて候へば妻子を帯して侯比丘も人の帰依をうけ」とあるが、これが親鸞上人のことを指したのであるといえはいえないこともないが、御

遺文中には親鸞上人に言及した箇所はない。元亨釈書という、わが国に仏教渡来以後、元亨年間までの七百年間における高僧の事蹟、仏教の史実を記した書物に、親鸞上人のことがのつておらないので、一時は親鸞上人の存在を否定する説まででたことがあったが、これは史上の人物を抹殺することの流行した時代の余波であつて、今はもっと研究がすすんでいるのでそういうことはない。但し聖人の時代には親鸞上人は今の真宗の人が考える程、えらい人ではなかつたらしく、俗人の間にはいつておつたので、聖人の論評もなかつたのであろう。しかし聖人が、伊豆の伊東に流人の生活をなさつておつた弘長二年の十一月二十八日に親鸞上人が入寂していることは、ここに記述しておいても無駄ではないと思う。

さてもう一つの重大なる出来事がある。

念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは聖人の有名なる四つの格言であるが、律国賊と聖人がいわれた律宗の僧侶は、鎌倉の極楽寺の良観を当面の人としておるのである。その良観は弘長元年に鎌倉に律を弘めるためにきたり、文永四年には、聖人を伊豆の伊東へ流罪するために運動した北条重時を埋めた極楽寺に住したのである。

「良観がさんそによつて、日蓮聖人を佐渡に配流し奉り候」とは頼基陳状にあるところであるが、聖人を伊豆へ流罪した重時の菩提所の住職が、八年後には聖人を佐渡へ流罪することに運動したのも不思議な因縁であるといわねばならない。

その良観の師匠たる叡尊は弘長二年二月二十七日に鎌倉にきて八月十五日まで鎌倉に滞在したのである。

叡尊は蒙古襲来の弘安四年に敵国降伏を祈禱して効験があつたとされ、その功を賞せられて、所望はないかといわれた時に「われ本より望なし、ただ天下の酒を止むること三日にして可なり」といったので、お上の命令をもつて、酒屋の酒がめを全部ぶちこわしてしまつた。

酒はりんりんとして流れ、人間はのむことができないのだから、鶏や犬が酒をのんで大いに酔つたと本に書いてある。これを聖人の「ただ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華経となへ給へ。苦をば苦とさとり楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わせて南無妙法蓮華経とうちとなへぬさせ給へ。これあに自受法楽にあらざや」（全集一一四三ページ）と四条金吾殿に教示したことを思うと、天地雲泥の相違といわねばならない。

律宗の僧侶は国師をもつて任じておつたから、このような鶏や犬に酒をのませるようなのは国師どころか国賊であると聖人が叱咤したのである。

この叡尊は、聖人が伊豆の伊東にあつた弘長二年に鎌倉にきて律宗を弘め授戒したのである。鎌倉における貴賤男女受戒聴講の人びとが大変な人数にのぼり、評定衆大名奉行の一族、あるいはまた遠国からくる者はその数五千九十四人とある書にのせ、あるいはまた一万人にも及んだとのせる書物もあるのである。

弘長二年の七月十三日、北条時頼は叡尊の滞在しておる寺を訪ねた。

何故の訪問かとの叡尊の問いに対して、時頼の返答が本当のことをいっているので、ここに引用しておく。

時頼答えて曰く「かたじけなくも不肖の身をもって、征夷の権を執り（これを略して執権職というのである）外出のことは危険極まりもなく競々の思い薄氷をふむが如くである」云々といっている。相手が僧侶なので本当のことを訴えたのであろうが、われわれの考えている執権職と大分違うということ忘れてはならない。

さて、何故戦々競々の思いである自分が尋ねたかといえば、授戒を願うためであるといったのである。叡尊はそんな様子では来るのが大変であろうから、自分の方から出掛けていって授戒してやるといって、七月十八日に、時頼の屋敷におもむいたのである。授戒が終ってから後でしばらく談話をし、退出の時は、時頼は庭においてこれを見送ることしばし、叡尊が門を出た後、始めて座についたという程でいねいを極めたということである。

これをもつてみても叡尊の得意、またわざわざ京都から師匠の叡尊を鎌倉によんだ、極楽寺良観の得意やおもむべしである。後年祈雨のことによって、聖人に負けた良観が、聖人を佐渡に流す程の運動が出来たのも故なしとしないのである。

毒 不 能 害

「日蓮をあだみにくむことは鎌倉よりもすぐれたり」とは聖人が伊豆の伊東にあつて、御自分でいわれた言葉である。川奈の浜の洞窟に一カ月間も聖人を養い申しあげた船守弥三郎は、聖人が伊東の玖須美くすみに移つてからも、ちまき、酒、干飯ほしい、山椒、紙等々の食料品や日用品の数々を聖人へ送っているが、他の人には知られないように十分な心遣いをして品物を使いのものにもたせて行かせたのである。だからいつも弥三郎の使いの者は、聖人に品物をとどけると、どうか、人に知れないよう、世間にわからないようをお願い申しますと、口ぐせのようになつてもいいのであつた。

それというのも、伊東の玖須美や川奈の念仏門徒一同が、とても聖人を憎んでいたからである。考えてみてもわかるが、日本の国が出来てから一回の訊問も取り調べもなく、島流しにされた人はいない、允恭天皇の四十二年（西暦四五三年）軽大女というのが伊予の国に流されたのが、わが国での流罪の始めである。弘長元年に聖人が伊豆に流された時から逆算すると八百年前

のことであるが、もちろん流罪の前に取り調べがあった。罪状がはっきりと日本書紀にのせてあるので、それは取り調べがあつた証拠といえよう。

聖人の伊豆伊東の流罪はもちろんのこと、鎌倉時代の最も信用すべき歴史書たる吾妻鏡には出ておらない。このことからみても、北条一門の私意によって、聖人は流されたと申してもさしかえないのである。当時の執権職北条長時の父たる重時は、極楽寺を建立した程の大の念仏者である。念仏無間、禪天魔の法門は、聖人の鎌倉における大獅子吼であるとともに、献上した立正安国論の所詮でもあつた。北条家は本家は禅宗のかたまり、分家は念仏のちやきちやきというところである。

立正安国論には念仏と禅宗とを信仰すればする程に、災難は増長し、やがては北条一門に同志討ちが始まり、ひいては、この日本国が、よその国から攻められるような始末になるぞと、書かれてあるのである。

さて話は前後するが、聖人が伊豆の伊東に流罪されたことについては、一回の取り調べもなかったと前述したが、北条家の方からいえば、取り調べの必要がなかったのであろう。立正安国論に聖人流罪の咎の数々が挙げられておるといえばいい。北条家からいえば、立正安国論こそ日蓮流罪の調査であるとするかもわからないのである。このような事情で伊豆の伊東に流された聖人であるから、鎌倉よりも人びとの聖人を憎むことは強かつたのであろう。

弘長二年の秋のある日のことであつた。伊東の玖須美の聖人の草庵に、川奈の弥三郎の使いの者ですといつて訪ずれた百姓がおつた。聖人は相変らず書見にいそがしいので、給仕奉公をして聖人につかえておる日興がその応待に出たのである。

「お弟子さまでございますか、私は川奈の弥三郎どんからこれを届けてくれとたのまれて参つたものでございます」

百姓は日興の前に、籠にいれたきのこを差し出したのである。

「おう、これは見事なきのこだが、なんとという名前のきのこでございますか」

「さあ、名前はなんといか知りませんが、川奈あたりの裏山には、たんと今頃になると出来ますでございます。おいしいきのこでございますから、どうか、お聖人さまにたんと食べて下さるようにとのこととでございました。明日食べたのでは味がおちるといふので、夕食前に間に合うようと、弥三郎どんから急がされて、飛ぶようにして持つて参つたものでございます」

「それはそれは、弥三郎どんの何時も変わらぬご親切な御供養、ありがとう存じます。お聖人さまも喜ぶこととでございましょう。だがあんたはあまりみない顔だが、誰方どなたでございましたかなあ……」

「手前ですか、やはり弥三郎どんの知り人でございます。何時も使いに来る奴が、今日は生憎と病気をしましたで、私めが代わりにきたのでございます。ではどうか早く、きのこを召し上つて

下さい。時がたてばたつ程、きのこは味の落ちるものでございます。どうやら大分、あたりが暗くなつてまいりました。これから川奈にまた帰らねばなりません、これで失礼します。どうか、何時もの弥三郎どんのことづけでございます。川奈の百姓が、きのこを持ってきたなどは他言を無用に願います」

「分かった。分かった。何時も何時も弥三郎どんの用心深いこと。念仏門徒の憎しみの厚いこの地のこと、聖人さまはなんとも思つてはおりませんが、守護を承け給わるこの日興は充分に用心をしておるつもりです。どうか弥三郎殿によろしく伝えて下さい」

「ではご免下さい。くれぐれも早く、きのこは召し上つて下さいよ……」
声を残すと、暮かけて浪音の高くなった門外にあたふたと、駈けだしていったのである。

.....

「おい、弥三公よつ」川奈の弥三郎宅に、その夜、夜ふけた頃、酒くさい息を吐きながら、開けひろげた入口から、足許も危ぶなげにはいりこんで来た者があつた。

弥三郎は僅かな油の光りをたよりにして、土間に座つて網のつくろいをしていた。

「なんだい、誰だい。この夜ふけに……」

弥三郎が法華宗に改宗してからは、誰一人も弥三郎を尋ねる人はなかつた。弥三郎夫婦は村人分になつていたのである。弥三郎もまた村中の上原の姓をすてて、聖人からいただいた船守の姓

を名乗つて朝夕に南無妙法蓮華経と唱題修行にいそしんでいるのであつた。

「俺さまさ……随分久し振りだなあ。俺も手前の顔をみないこと久しいが、手前も俺の面をみねえこと幾久しいだろう。どうだ」

「酔つ払いには相手になつて居られない。明日の漁がいそがしいやい……」

弥三郎は顔もあげずに、網のつくろいに忙しかつた。前には村の念仏講の連中が酒の勢いをかりて、よくおどしに來たものだが、聖人が伊東に移り、地頭の伊東八郎左衛門様の病氣を平癒して、聖人の名が高まると、表だつて弥三郎に悪口をいうものは村の中にはいなくなつた。しかし、弥三郎や聖人に対する憎しみが消えたというのではない。かえつて深くなつたのだが、それが表面にはでないだけである。

今夜きたのは珍しいことであつた。

「おい弥三郎つ、手前今夜の夕方あたりから、こうつ胸さわぎがしてねえかなあ」
酔つ払いは自分の胸に両手をあげさげして、ふらついてみせた。

「別に俺は、胸さわぎなどはしねえ。丈夫なものさ、げつぶ一つ出やしねえよつ」

「そうかなあ、そうすましているところをみると、手前の法華信心も口程ではないぞ。胸さわぎがしきりにして、落着いて網のそそくりなぞ出来ねえ筈なんだがなあ、不思議だなあ」

「手前は黙つてきいてりや、先刻から訳の分からねえことをいつてるが、そりや、なんのことだ

い。教えろよ」

「教えろどころが、この夜更けにわざわざ俺は親切にも知らせにきたんだ。驚くなよ、聞いてびっくりだぞ。弥三公っ」

「何をいやる。手前がどんなことをいったって、たとい、川奈の沖で、鯨の四、五頭もつかまえたといったって、びっくりするような弥三郎じゃないわ。早くいつてみる」

「馬鹿野郎、驚けよ。この話にびっくりしなけりや、手前は本当に馬鹿野郎だぞ。いいか、俺は今日、手前の使いの者ですといつてわざわざ伊東の玖須美までかけていつて、日蓮坊主にきのこの御供養をしてきたんだよ。一本くっただけで、ころっといつてしまうという毒きのこをよ。これでも手前はおどろかないと落着いていられるかい」

「ええっ」

弥三郎は思はず立ち上つて網をうしろにほうりなげると、酔っ払いの襟首をぐうつと握りしめた。

「なんだと、そりやつ、手前本当か……」

「そう締めつけられちや、声が出ないよっ。本当だとも、手前がちよくちよく、使いをつかつて、日蓮坊主にいろんなものを届けているのを俺がかぎつけていたんだ」

「このど念仏野郎め、俺が玖須美にじかにいつちや目立つと思つて、日蓮さまに一目あいたいの

もがまんをして、高い賃銀を払って人をやとつてまでして、つまらないものだが、御供養をして
たんだが……」

「痛てい痛てい早くその手を放してくれ、今頃は日蓮坊主は可哀いそうだが、毒きのこを食らつ
て、血へどをはいてお陀仏だろうぜ。夕食に間に合うような頃あいに、俺がもつていったんだか
ら」

「この野郎いかしちやおけねえ。くたばつてしまえ……」

弥三郎が怒りにもえて、首をしめにかかった時である。

「ああもし、お前さん、そんな手荒らなことをしてはいけませんよ」

女房の声が部屋の中からかかった。

「おお、女房、お前も仔細は聞いたろう。この野郎は俺たちの仏さまを殺した太い野郎だ、日蓮
さまは死んだに違いない」

「まあまあお前さん、その手を放して静かになさいな」

弥三郎が手を放すと、苦痛のために酔もさめたらしいその男は、油あせを額に浮かせたまま、
へなへなと力なく土間に坐つてしまった。

「仏さまがそんなことで死ぬもんじゃありませんよ。五逆罪の中にも、仏さまを殺すという罪は
ないじゃないですか。仏さまというものは人に殺されないことにきまつているんだと、あんたが

私に教えたではないですか。お聖人さまだって、普通の人ならば、きつと死んでいたに違いな
い。あの俎岩で助かっていらつしやる。しかも助けたのはお前さん、あんたじゃないの。毒きの
こをたとえ食べたにしても、お聖人さまがそんなことで死ぬもんじゃない。しつかりしてお題目
でも一生懸命に唱えなさい……」

「そうだ、そうだ。お聖人さまが毒きのこぐらいで死ぬものか、末法の法華経の行者だ。女房、
伊東の玖須美の方にむかつて一緒に唱えようじゃないか、お題目を……」

「あいよっ……」

女房は部屋の上に、弥三郎は土間に、それぞれきちんとすわると、手を合わせて合唱した。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

「手前たちは、どこまで気の狂った夫婦だろう。南無妙法蓮華経と唱えたって、あの猛毒のきの
こを食って助かる筈がねえじゃないか。あれだけ念仏の悪口をたたいた坊主だ、死ぬのがあたり
まえよ」

すつかり酔をさました男が、あざ笑いながらいい放った。

「なんだこの野郎っ……」

弥三郎がおければ、そばから女房が

「お前さん、お題目の最中だよつ、おこる人があるもんかねえ。みつともない」

「おうそうだ……女房、一緒に唱えろよ」

南無妙法蓮華経 ……………

……………

「よさねえか、その手前達の唱える題目で、明日の日まで、あの坊主が生きていたら、俺が手前に負けないくらい、一生懸命に、お題目を、南無妙法蓮華経と唱えてみせらあ」

「本当かつ」

弥三郎はお題目をやめて返答をした。

「お聖人さまは生きていらっしやる。さあこれから手前が本当にその気なら玖須美までいってみよう。どうだ……………」

「面白いつ、そのかおり死んでいたら、それこそ手前も本気で南無阿弥陀仏と唱えろよつ」

「なにをいやがる。法華経の安樂行品というお経には、毒不能害というありかたい文句があるんだ。お聖人さまが死んでたまるものかい。さあでかけよう」

「いいとも」

「女房、お前もゆくか」

「私も行きますよ。この酔っ払いが南無妙法蓮華経と唱えるところがみたいからねえ」

夢 想

「お聖人さま。私は、昨夜夢をみました」

「ほう、どんな夢であつたなあ。私なぞは、つい夢をみたこともないが」

「聖人に夢なしと申しますから、お聖人さまは夢をみないのであります」

「はつはつ……」

聖人は豪快に笑われた。

波の音がまじかにきこえる。伊豆伊東の玖須美の聖人の流罪の草庵である。

川奈の弥三郎の使いの者といつわつて、聖人に毒茸を献じたものがあつたが、聖人の身体には何等変おつたこともなかつた。かえつて毒茸を献じたものは、弥三郎に約束した通り、聖人のつがないのをみて驚くと同時に、思わず南無妙法蓮華経と唱えて、念仏を捨てたのである。

それから、幾日かたつたある日のことである。聖人は、弟子の日興と、なごやかに対談せられておられた。

「お聖人さま、昨夜の夢というのは、沖の方から白装束をした老人が不思議なことに、海の上

を歩いてまいりました。そして浜辺に立つておるこの日興に、近く御赦免になりますぞというのでございます。では何時頃でございましょうかと、尋ねたのでございますが、不覚にも眼がさめてしまいました」

「それはおいしいことであつた。日興、お前の口から御赦免の日は何時の何日ですと、ききたかつたぞ、この日蓮は……」

「おそれいます。何分にも夢のことでございますので……」

「夢寐にも忘れぬということがあるが、日興、お前の師匠を夢にも忘れぬその心が、そのような夢をみせたのであろう」

「は、いっ」

日興は師匠からほめられて、思わず顔を赤くしながら、つぶらな眼で、師匠たる聖人の温顔をあおぎみるのであつた。

「信心というものは、自分では深く信心しておるようでも、その信心のどあいというものは、一寸わからないものである。それで、夢の中でも、信心を一生懸命しておるようならば、その人は本当に信心をしておるといふことができるのだ。日興の昨夜の夢は、法華信心のあらわれ、師を思う弟子の真心のあらわれとこの日蓮は思うぞ、ありかたいいことだ」

「何時の何日ときき洩らしたのが、日興の不覚でございました」

「日興つ、何時の何日とは、この日蓮が申し聞かせよう」

「ええつ、では、お聖人さまも夢をみられましたか……」

「はっはっ……」

聖人は日興の顔をみて、笑われた。

「私は、先程、お前にいった通り。その夢はみておらない。だが、たいていのことは、胸中の鏡に映るぞ」

「では、何時頃でございましたうか」

「それはなあ」

聖人は、日興の前に眼をつぶられたが、断言するようにいわれた。

「今年、弘長二年もあと二カ月でくれてゆく、あと四カ月後には、この日蓮も鎌倉に帰るであろうよ」

「すると、来年の二月頃でございますか」

「さよう、その時分であろうなあ」

聖人を伊豆の伊東へ流したのは北条重時である。重時は極楽寺をたてて、隠居するという程の念仏の信者であった。その子息は鎌倉で政治をとっていた執権職北条長時である。立正安国論の中には、念仏宗や禅宗を信心しておると、北条一家の親戚中に争いが起り、ついには、日本国が

よそから攻められるようなことが起ると書かれてある。重時が怒ったのも無理がない。立正安固論を献上した聖人は四十日後には松葉谷の御自分の家を襲撃されて焼き払われてしまった。これは主として念仏門徒のはからいであつた。執権職の父親が、寺までたてる念仏の帰依者であつたので、こんなことが起るのも当然であつた。ところが、その聖人が、焼き殺されもしないで生きておつた。こんなことは、念仏門徒にとつてはまことに意外なことであり、けしからんことであつた。そこで、鎌倉における念仏者の筆頭人たる北条重時は、聖人に伊豆の流罪を、子供の執権職たる長時に命じたのである。一回の取り調べがなかつたのも、不思議ではない。聖人を取り調べれば、草庵の焼き討ちの事件にふれねばならない。このことについて聖人が御自分の筆で書かれている。つまりその夜、松葉谷の草庵の夜討ちした人数は数千人で、あたかも謀叛人を捕縛するような勢いであつたと、書きのこされておるのである。

聖人を問註所に呼んで、取り調べることになれば、聖人の口から、草庵焼き討ちの件についての取り調べが要求されるであらう。そうなつては、北条家が、聖人に取り調べられるようなものである。

こんな事情があつたから、聖人は辻説法の最中に役人にとりかこまれ、さつそく由比が浜から伊豆の伊東へ流罪という、日本流罪史にも類例のなし、取り調べぬきの流罪になつたのである。

考えてみれば、執権職としても、寝ざめのよくない流罪である。ところが、またまた事件が起

きたのである。

聖人を伊豆の伊東へ流したのは、弘長元年の五月十二日であるが、その伊豆において、翌月の十六日に謀叛人がつかまり、伊豆一円の騒動が起きたのである。

話は北条時頼にさかのぼる。

北条時頼は名君のごとく伝えられておるが、それは概評であつて、北条家の政権を維持するためには、相当手あらな手段もとり、この人がこんなことをしたのかしらと疑う程のこともやつておるのである。

Aの所領を時頼が召し上げて、Bにやつてしまった。AはBを非常に恨んだ。そこで、ある闇の夜に、Aは毒矢をもつて、Bを射ころしてしまった。時頼は当然Aを疑つた。しかし、証拠がない。そこで時頼は、Aの下人を呼んで、拷問にかけたのである。そして下人にいつてきかせるのには、お前の主人はもはや白状してしまつたのだから、かくしても無駄である。落ちよ落ちよとせめたのである。ところがその下人は大變に忠義な男で「私の主人はこのような拷問に恥をさらずのがいやであるから、罪をかぶつて死のうと思つて、白状したのであります。私は下郎の分際だから、拷問されても恥とは思いませんが、知らないことをなんで白状できましよう。私の主人が白状したというのなら、重ねて私を拷問しても無駄ではありませんか」といつたので、確たる証拠をつかむことが出来なかつた。

すると、時頼は、Aを呼んできとした。「お前がBを殺したことは、すでに下郎が白状をしてしまったから、お前が犯人であることは間違はないと思うが、仔細のあることであろうから、事情によっては、命を助けてやろうから、ありていに申してみよ」といったのである。Aは涙をながして「日ごろ、恨みがあつて、今は勘忍なりがたく、すきをみて射ころしました」云々と白状したのである。時頼きき給い、神妙に候、いかにも御前を申しとのえて見候はんとて、奥に入り給い、不便ながらも、天下の法令なれば力なし、Aは首をはねられ、Aの同類は薩摩濁硫黄が島に流され云々と書物にある。これを読んでなんだかいやな気がした。

取り調べの模様は今も昔もこんな調子で、ひっかけて、やるのであろうが、司法の末端したつばがやるのならともかく、天下の名君時頼が、じきじきにこんなことをするとは思わなかつた。ところが、このような卑劣な手段を用いたのが、まだ、ほかにもある。

時頼が、三浦泰村を滅亡させた手段である。時頼は三浦泰村と一度和議がととのつて、互いに兵をひいたが、次の日、和平の約束を一方的に破り、三浦方の不意をついてこれを滅亡させ、北条家の政権を維持したのであつた。

三浦の一族は二百七十六人、郎従家の子二百二十余人同時に腹をかつたが、翌日、実検をとげて、首を残らず由比が浜にかけ、三浦の一族のかけおち、逐電したものは、仔細を問わず召し捕るといふふれ書きをかかげたのであつた。

弘長元年の六月、伊豆一円の騒動とは、この三浦泰村の子供律師良賢が起した謀叛を指すものである。自殺した一族二百七十六人というのに、良賢はどこをどうのがれたのか、出家をして律師にまでなっておったが、時頼に対する恨みは消えず、長年、伊豆の山に入つて、修行をしてみせかけ、三村の譜代の郎従達の、子息末孫をここかしこに尋ねて、叛逆の計略をめぐらしておつたのである。

ちなみに律師という僧名を説明しておく、律師はその人数は初めには一人しか日本にいなかったという程高い僧位である。その後六人となり、十五人となつたが、鎌倉時代でも律師といえ、五位殿上人でんじょうびとに准ぜられ、公儀出仕には、從僧二人、中童子二人、大童子四人の從者を許された程の僧位である。かかる僧位にある律師の良賢が永年にわたつて三浦再興を思い続け、北条一門討滅の計画を伊豆において企てたが、不運なことにことが露見してしまつた。それは皮肉にも、自界叛逆の難は近くきたると千言した聖人を、伊豆の伊東へ流した翌月の六月のことであつた。もちろん良賢以下これに味方したものは首をはねられて、先代同様、由比が浜の潮風に首をさらしたのは無惨なことであつた。北条時頼は入道として、この時にはまだ生きておつたのである。

このように、北条家にとつては、伊豆方面は、三浦一族の子息末孫がすむという、油断のできぬ場所であつた。伊豆の伊東へ聖人の流罪を強く主張した重時は、還著げんじやく於本人おとうほんにんで、五月十二日か

ら、二十日もたたぬ、六月一日に発作が起り、何病ともわからず、病気の時は、念仏よりも真言がよいと、さかんに真言の祈禱師をやとつて病氣平癒を祈つたが、法華経誹謗の罪がでて、四か月後の十一月三日に病死したのであった。

さて、重時の弟は政村といつて、一人の娘があつた。これが物の怪けがついて、あらぬことを口走らうになつたのも、弘長元年の、聖人伊豆伊東の流罪後であつた。

弘長元年の十月十五日、あまりにも狂うので、修験者呼んで御祈禱をしたところが、物の怪が現われて、「私はお前のお父さんによつて、亡ぼされた、比企判官ひきはんかんよしかず能員の娘さぬきのつぼね讚岐局である。

恨みに恨みぬいて死に、今は大蛇になつて生まれかわつてきたが、頭に大きな角がはえて、火災かえんの如き熱さにがまんができない程である。身のおきどころもないような苦しみの身で、今は比企ひきが谷やう（鎌倉市中にある）の池の底にすんでおるのである。この悲しさ知らせんために、汝の娘の身体をかりたのである」といつて、今にも死ぬかと思つ程、娘は苦しむのであつた。

政村は大いに驚き、多額の金をつかつて一日のうちに、法華経一部をたちまちに書いて、讚岐の局の追善をいたし、若宮の僧正をたのんで、法華経の説法をしてもらつた。「説法の最中に、かの息女、苦しげに打ち臥して、舌を出し、唇をねぶり、身をもだえ足をのべて、ひとえに蛇身を現わす」云々と書物にあるが、法華経の功德によつて、やがて物の怪は退散したのである。

まことに法華経の功德はありがたいと、鎌倉中のこれをきく人びとは、感歎しないものはなか

つた。

重時の子供で執権職たる長時も、この法華経の、なみなみならぬ功德を耳にして感動したが、心の中では、その法華経の行者と称する日蓮を、伊豆の伊東に流しておくのも、なにか心ざわりであつた。

強く日蓮流罪を主張した父の重時も、聖人の罰にあつたごとく病死してしまつた。日蓮の流罪を赦免しても、もはや、文句をいう人がなくなつたので、父の一周忌が終わると、弘長三年二月に日蓮赦免のことが、発表されたのである。

帰省

一

正嘉二年、聖人三十七歳の時、駿洲岩本の実相寺に入つて、一切経を閲覽されて、立正安国論を書かれたことはすでに述べたが、この閲経中に、聖人の父妙日死去の報が伝わつた。棄恩入無為、眞実報恩者と覺悟された聖人は、ついに故郷にも帰られず、立正安国論に身血をそそがれて、実相寺におられること二か年、鎌倉に帰られると立正安国論の献上、たちまちに草庵は焼かれた。千葉の市川におられること百日、草庵が再び出来あがると、鎌倉に帰られて、前にもまして折伏を続けたが、「日蓮が生きたるを、不思議として伊豆の伊東に流しぬ」といわれたごとく、伊豆に流されて、法華経の行者の修行を三か年つづけられたのである。

日蓮聖人の赦免にあつては、北条時頼の力があつたことは聖人の御遺文中にみられるところであるが、時の執権職たる長時の意向も十分にあつたらうし、長時の父重時の病死、重時の弟政

村の息女の怪異等々がめつたと思われる。

さて聖人は、今は赦免の身となつて、天下晴れての身体となられたのである。しかもその身は四六時中に法華經を修行し、いうならば、聖人の身体即法華經であつた。法華經には斯人行世間、能滅衆生闇とあるが、斯人とは聖人自分であると覺悟をされたのである。

法華經とは聖人にあつては、御宝前に安置し奉つるのみの經卷ではなく、これを身に行じてゆく生きた文字であつた。法華經の文字ごとくが生きた仏様であり、これを行ずるものはまことにその身そのままが仏様である。末代において仏とは法華經を行ずる凡夫をいうのである。聖人はかく考えて、両眼より涙を出すこと滝のごとしといつておる。

わが身は法華經の信仰に感涙を催し、伊豆伊東の三か年間の生活こそ、法華經に説くところに寸分の疑もなしと覺悟された時、この尊い身をこの世に送りだしてくれたところの両親のありがたさは、ひしひしと身にこたえるものがあつた。「孝と申すは高なり、天高けれども、孝よりは高からず、また孝とは厚なり、地厚つけけれども、孝よりは厚つからず」とは有名な聖人の孝行觀である。

自分は法華經の行者として、いよいよ難のきたるをもつて喜びとしておるが、これを生みなした両親は、特に母親はどんな心持でおるであろうか。伊豆伊東の流罪の生活は、末法において法華經を説きしものは、しばしばところを追われると、法華經の中に書かれてあるのだから、あえ

て、聖人にとつては流罪の生活は不思議ではないが、母親にしてみたら、子供が流罪の生活をしておると考えただけでも、たえられない毎日の生活であつたに違いない。

「父母の恩というものは、ここはことあたらしく書く程のこともなく、すべての人の知るところであるが、わけても子を養う母の恩を思うならば、心にしみみとありがたく、貴く思うものである。鳥がその子を養う姿、けだものがその子を養う様子など、よくもまあ、不自由な身をもつて子供を養うものぞと、不思議にさえ思う程である。それにつけても、人間の子を育てる母親の恩は、なかなか忘れることのできぬものである。

胎内に宿る九か月の間の苦しみは、腹は鼓のごとくはれ、頸は針をさげたるがごとく、まげることならず、いきは、はあはあと出るばかりで、はいることはなく、顔の色は枯れたる草のごとく、臥せれば腹もさけるような心持ちになり、座わればとて体のやすまることもなく苦しみが続き、やがて産気が近づけば、腰はやぶれ眼はぬけて、天にのぼるかと思われる。かほどにわれを苦しめる敵なれば、産みおとしたならば、大地にもふみつけ、腹もさいて捨ててやろうかと考える程のようであるが、急いで抱きあげ、血をねぶり、不浄をすすぎ、胸にかきいだいて三か年の間、ねんごろに養う。母の乳をのむこと、百八十石三升五合である。この乳のあたいはたとえ、一合といえども、三千大千世界にかえることのできぬものである。されば、乳一升の価格を米にしてみれば、一万一千八百五十石五升、稻にすれば、二万一千七百束あまり、布に換算すれ

ば、三千三百七十反である。してみるならば、母乳の合計、百八十石三升五合の価格は大変なものになるのである。他人のものは、銭一文、米一合なりと屯盗んだならば、牢に入らねばならない。ところが、親は十人の子をば養つても、子は一人の母を養うものはない。暖かな夫をば抱いてねても、ここへたる母の足を暖むる女房はないものである」

これは聖人が信者の婦人に与えたお手紙の一節であるが、聖人の婦人に対する理解の程も察せられ、母親に対する気持の程もうかがわれるのである。

聖人を伊豆の伊東に流した当局者としては、北条時頼、重時、長時の三人であつたが、重時は聖人の流罪中に死去し、聖人が赦免になつた年に北条時頼も他界し、つぎの年には長時も死んで、時の権力者として、聖人に圧迫をくわえたものは、不思議なことにはたばたとわずか二、三年の間に死去してしまつたのである。

文永元年の八月聖人四十三歳の時、十一年ぶりで、故郷の小湊に帰省せられた。いうまでもなく、聖人の生家のある小湊は、安房の国は東条の郡にある。その東条の領主、東条佐衛門尉景信は、大の念仏者であつて、聖人が、立教開宗の日に、白刃をもつて聖人をおびやかした豪の者である。

聖人が十一年も帰省せず、父妙日の死去にも帰郷しなかつたのは、この東条景信の圧迫をおそれたからであると、説をなすものさえある。筆者はそれを信じない。聖人の歩んだ路から考え

れば、そんな東条ごときの圧力を考慮する方ではない。立正安国論の執筆者、松葉谷の焼討ち、伊豆伊東の流罪等々、まったく帰省をすまいとまがなかつたのである。「日蓮は日本第一の孝の者なり」と自負せられる聖人にとって、この十一年間は心にどれ程帰省を念じられたことであろうか。父なきのちの母妙蓮は、ひとり身のわびしい中に風のたよりに聖人の鎌倉のうわさをきき、伊豆伊東流罪の話を鎌倉から帰ってくる人びとや、旅のものからかいて、どんなに胸が痛んだことであろう。

今日から考えれば、聖人の父となり母となつた人は釈迦多宝の生れ変わりのごとく、功德すぐれた方々と、われわれは考えて、妙日、妙蓮を羨望するのであるが、聖人当時のご両親はいかに聖人のことを心痛せられたことであろうか。けだし寿命のちぢむ思いであつたと思われる。だが、これはわれわれの凡情で、偉人の母とし父とし、仏さまの御両親として、いかなる変事にも、驚くことなく、聖人の心とご両親の心とは、通じて絶えることがなかつたかもわからないのである。聖人が、小湊の生家の軒をくぐつたのは、父妙日の七回忌の年ではあるが、二月十七日の忌日をとくにすぎた八月であつた。

聖人が生家にたつた時、聖人は眼にはみえぬが、太い綱があつて母のそばに、きゆうにひつぱられるような不思議な力を身にひしひしと感じた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

聖人は、庭にたつたまま、思わず題目を唱えられたのである。

「お聖人さまだつ」

あわただしい声で、家人が矢のように家の中からはだしのままで庭にとびだしてきた。

「知つて帰りましたか。知らずに鎌倉から帰えられましたか。お聖人さま……………」

聖人は家人に返答を後にして家の中に向つて題目を唱えられた。

「南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

……………」

「聖人さま。母じやは只今、いきを引きとられましたぞ。たんだけ、側に子息がきておるような、いやいや、お聖人がもう、その村の口まできておるような気がしてならぬ。死ぬのはおしいおしいと、いつておりましたが、たつた今いきを引きとつたのです。もう一足はやかつたらなあ、お聖人さま」

聖人は。再び高声に御題目を唱えられた。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

「お聖人さま、さあさあすすぎの水を汲みまずぞ、おうい、誰かでてこいよ。広くもない家のくせに、誰も出てきおらぬ。実は、お聖人さま、縁者の四、五人が奥の座敷で、母じやの死顔を真中にして、泣きくさっておりますだ。今年は亡くなった父者の七回忌、お迎えがきても不思議ではないが、それは、一目、お聖人さまに母じやもあいたかつたであらうと皆んな思っておつたところです。考えると、それがふびんで、皆んな泣いております。おうい誰か出てこいよ」

家人が悲しみの中にも、聖人の帰省を喜んで家の者を呼ぶのであった。

「さすがは善日さま。いや、善日ではない蓮長さまでもない。そうそう日蓮さまではもつたいない。お聖人さまだ。ようく、母じやの死にめに帰つてきてくれた。これが本当の坊主だ。親の死にめに間に合わぬようじゃ、いくら出世したといつても、本当の坊主とはいえますまい。さあさあ早く枕経を読んでやって下さい。引導をわたしてやって下さい」

聖人は一段と大きな声で、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

と唱えられて一心不乱であった。

「誰かでてこいよっ」

と庭からよんだ時だった。

「大変だ。大変だ」

と座敷から、とび出してきたものがあつた。

「どうしたっ」

「どうしたも、こうしたもあるもんか」

「それじゃ、変わったこともないのか」

「なにを、こんなあわてた時に、理屈をいう奴があるか、仏さまが生き返えつちやっただ」

「ええつ、狐か狸でもついたんじゃねえかよう。俺は側にいくのは厭だよ」

「この馬鹿野郎め、手前がでていった後、おれ達は婆さまに死水をくれてやろうと思つていと、庭さきの方から、お聖人さまの題目の声がきこえたなあと思つと、その一声一声ごとに顔の色が、つやづいて、今さつき、ううんといつて大きな息を吐いて生きかえつてしまつただ。お聖人さま」

聖人は、二人の話に耳をかすことなく、まことに生きた仏様のごとく尊い姿のまま、南無妙法

蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱題されておるだけであつた。

一一

「日蓮法師とは、誰のことよ」

「知らないのか、貫名さまの御子息だ」

「へえっ」

「へえつて、お前も知つてる筈だ。小さい時は、善日磨さまといつておつた」

「ああ、あの坊さんか、知つてる、知つてる」

房州の小湊の浜の砂地である。

老人の漁師が、四、五人あつまつて、網のつくろいしながら話し合つていたのであつた。

十月のひざしは、老人の潮にやけたまつくろなうなじを照りつけていた。

海はどす黒くなつて、にぶい光を放ち、わずかに岸によせる波頭が白くくだけで、その動きをみせている目であつた。

「あの坊んなら知つてるぞ……」

「今は坊んではおかしいぞ。たしか、今年は後厄（四十三歳）ぐらいになるはずじゃ」

「あつはつは、坊んではおかしいなあ、だが、故郷にすれば、四十、五十はまだまだ鼻たれ小僧じゃ、俺がなあ、家に帰れば、まだまだ鼻たれ抜いだから……」

「お前の家は格別だよ。あの大隠居にかかったら、村中が鼻たれ小僧だ」
老人の口々から、どつと笑いが起った。

「あの坊んはなあ……」

「坊んではおかしいというに……」

「ええい、やかましい。坊んで、よいわ。俺は昔、頭をなでてやったことがあった。俺が大漁でよい機嫌で浜から帰える時であった。坊んが、ひとりで遊んでおったので、魚籠の中に手をつこんで、おい坊ん、大きな鯛をやるぞといって、坊んにやったのだ。すると坊んは、ありがとうといったが、波打ち際に持つていって、その鯛を水の中へ放ろうとするのだ。俺はびつくりして

「おい、坊ん。なにするんだ」

と思わず、どなったんだ。すると坊んは、

「おじさん、この鯛は、私にくれたんでしよう」ときくんだ。

「そうだ……」

というと、

「ならば逃がしてやって下さい。この鯛だって、お父さんもお母さんも、兄さんも弟もいるでしょう。殺したらかわいそうです」

というんだ。俺は、びっくりしちやって、返答が一寸出来なかった。

「そんなこと言っちゃ困るよ。それじゃ、漁師はどうしたらいいんだ。捕って逃がしていたんじや商売にならない」

といったら、

「おじさん達は逃がさないでも、それでいいんだ………」
ときた。

「なんで、俺と坊んとは違うんだ」

ときいた時に、坊んが感心なことをいった。それで、俺は、この時のことを、今でも忘れないでいるんだがなあ………。

「なんと、いったんだよ、坊んは、その時」

きき手が、話を促した。

「おじさんは漁師だから、魚を捕るのが役目、だから捕った漁を逃がしたりしなくてもよいのだ。けれど、坊んは漁師でないから、逃がしてやるんだ。漁師は魚をとって人の栄養の助けとなるのが役目だ。漁師が魚をとるのをなまけたら、それこそ本当になまけ者だ。だが、坊んは漁

師ではない。だから、生き物を可愛いがらなければいけない。今、おじさんの手を縁として、坊んに伝ったこの鯛は、坊んの手に渡った時は、助けようと思えば、助かる魚になっていたんだ。おじさんは、その魚籠の中の魚を助けたら、自分が助からないだろう。そこが違うんだといった。商売の人が魚を捕るのは生きてゆく以上は仕方がない。だが、商売でもない人が、自分のすき勝手で魚をつかまえるのは殺生ということになるのだと、この俺に教えてくれたのだよ。俺は、思わず嬉しくなっちゃって、あの坊んの頭を撫でたのだ。こんな村に、子供のくせに、偉いことをぬかす餓鬼がいると、俺は嬉しかった」

語り終った老人は、その時のことをありありと思い浮かべているような眼差であった。

「そうだろう。そうだろう。善日磨さまは、子供の時から、どこか違っておった。そんなことぐらいはあつたらう。けっして不思議なことではないわ。母の梅菊さまが生まれる前に、叡山の頂きに腰掛けて、琵琶湖の水で手を洗って、富士の山から登る旭日を抱くという夢をみて生んだとかいう話だ。そのくらのことはあるはずだ」

そうだ、そうだといって、老人は互いに合点しあうのであった。

「ジイラ、ジイラ……」

「……」

「爺等……」

「じいらとはなんだ……」

「爺さんばかりだから、じいらだ。ごうつくばりの爺さんばかりだから、ごうジイラというかもしれないな」

「なにを、若い者がいうか。なんの用だ」

老人達はいっせいに、自分達の側に突つたつた若者をみあげた。

「もうじき、皆んなも来るが、俺か頼まれて先にやってきたんだ。実はなあ……」
「ごういいながら、若者は、老人達の仲間に加わつて話を始めたのである。」

「日蓮法師のことなんだ」

「なに、日蓮さんのこと、お聖人さまに関係のある話か……」

若い者が、お聖人にどんな関心を持ったのか、老人達は不思議に思つてきくのであつた。

「噂によれば、お聖人さまは死んでしまつたお母さんを、お題目とかの法力で生き返らせたとかの話ではないか。本当かい」

「本当とも、現に俺はその時、その場所にいたんだ……」

老人の一人が、確信のこもつた声で返答をした。

「そうか。それが本当なら、日蓮法師に……」

「おいおい聖人といえ、もつたいない、お名前などを呼んで」

「日蓮を日蓮と呼んでどこが悪いのだ」

「若い者は面倒なことよ。一つ一つ語ってきかせねばならないか。お手前は親御の名前を呼ぶか。呼ばぬじやろうなあ。お父さん、お母さんと呼ぶだろう。耳にしても口に出せぬもの、親の名前ということがある。両親をありがたいと思う尊敬の念が、親の名前を口にださぬのだ。日蓮法師に頼むことがあるならば、お聖人といいなさい」

「爺等に会ってはかなわない。頼みごととは察しのよいこと。では、そのお聖人さまを子供の時分からよく知っておる、年寄り衆に頼みがあるんだ」

「なんの頼みだ」

「年寄りには、そうやってのん気そうに網をそそくっておるが、その網で魚がとれるか。どういう訳かここ四、五か月一向に漁がないではないか。魚はとれぬし、それに加えて陸ではえたいの知れぬ病気がはやって、この浜辺の家で、病人の寝ておらぬ家は一軒もないわ。これを、お聖人さまになんとかしてもらってくれないか。わが母親を死んでも生きかえずという程の法力があるならば、こんなことは朝飯前だろう。どうだ」

「馬鹿っ」

「ええっ」

若者は、一寸老人の語気に驚いた。

「そんな勝手な考え方で、お聖人さまに頼みにいけるか。お前達はどうか。お聖人さまの悪口をいったことはなかったか。お聖人さまのお母さんをいつもいたわってやっていたか。この老人の俺達だって、腹では本当に頼みたいと思っけていても、一寸口に出せないでいるんだよ。あのお聖人が伊豆の伊東へ流されたと風のたよりできいた時、この村中の人はなんといったつげなあ。ほめた人がいたか。謀叛人でもこの東条の小湊村から生まれたように騒いだでねえか。どうか。お聖人さまが、伊豆の伊東に流されていた足掛け三年の間に、誰がお聖人さまの留守の家について、あのお聖人のお母さんを慰めてやったか。この中にそんな奇篤な人がいるか、いたらその人が頼みにいけばよい。お聖人さまはさつそくひき受けてくれるだろう。だがなあ、そんな人がここにはいないんだよ」

「ようし、わかった」

若者は元氣よく立ちあがった。

「どうしたんだっ」

老人がきくと、若者はすぐ答えた。

「お聖人さまに頼みにいくんだ。年寄りは何時だって、今の案配だ。今俺達は本当に困ってるん

だ。だから頼みにいけばいいんだ。ただ頼みに行く心持に嘘があつてはいけないが、俺達は嘘の気持は微塵もありはしない。年寄りには、昔あだつた、こうだつたと、そんなことばかりいつている。そんなことは年寄りのした不義理で、若い者が知つたことか。島流しに逢うなんてのは、謀叛人ぐらいだからお聖人が島流しになつたといえれば、謀叛人だろうというのが、あたりまえさ。今になつてみると、あまり法力があつたから、流されたのかもわからない。この村に病気がはやる、一向に不漁^{しけ}で魚がとれないというんだもの。この村に生まれたお聖人だ。なんで、頼めばほうつておくもんか、俺一人でも頼みにいつてみるぞ」

「お前、いままで仏さまを拜んだことがあるか」

「ないよう」

「若い者は幸せだ。南無阿弥陀仏も、南無遍照金剛もいつたことがないのかよ」

「ううん。そんなことは一辺も唱えたことはないよう」

「それじゃ、お聖人さまに頼みにいく資格が、ひよつとしたら、あるかもしれねえぞ」

老人達はどつと笑つたが、若者は解せない顔をして老人達の顔をみていた。

文永元年の九月のある日である。

小湊の聖人の家の前の浜から、一一艘の小舟が動き出した。櫓をこぐのは先日の若者である。船先には南無妙法蓮華經と書いた旗が、潮風にいさましくなびいていた。聖人はその許に端座されて、静かに經文を読まれておる。若者はへさきの旗を睨みながら、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

と一押し一押しに題目を唱えて、櫓を押すのである。

船は一定の間隔をおいて、小湊の浜の渚にそって、静かに滑べっていった。子供達が、わいわいといいながら、聖人の船を浜の砂地に追いかけてゆく影がみえた。

子供の列の中には犬が二、三匹まじって、後になり先になりして走ってゆく。

浜の砂地をよくみると、ある場所で、突つたつたまま腕を組んで見ているもの、あるところでは、土下座して聖人の船をおがんでいる者、中には寝ころんで肘をついて聖人の船を、あざけり顔で眺めているもの、綱つくろいでもしておるのか、聖人の船に全然背中を向けて無関心の者、浜の人びとの表情は複雑であつた。

聖人は若者から村の様子をきくと、にっこり笑つて承諾されたのである。その時分、この小湊村には、わけのわからない病気が流行していた。若者のいう通り、病人のいないという家は一軒

もなく、その上悪いことに不漁つづきで、一匹の魚もとれないという始末であった。聖人のお母さんもやはりこの病人の一人であったのである。

聖人は若者に船を一艘用意せよといわれた。

小湊の浜にそつて船を出せといわれ、御自分は題目の旗をたてて静かに読経されたのである。これでもいいのかしらと不思議がる若者にはいっこう無頓着であった。

「お聖人さま……………」

若者は、櫓の手を休めて、声をかけた。

「お聖人さま、ご覧なさいまし、船のまわりを鯛がとりまいて泳いでいますよ。不思議なことでございます……………」

「……………」

「先き程から、この船を追っかけて泳いでいましたが、だんだん数がふえてまいりました。大きな鯛でございますなあ。上からみるとあまり大きいので鮫のようにみえますが、あれでも鯛ですよ。こんな大きな鯛が、この辺にこんなにいたとは知りませんでした」

若者が両手で船端を叩くと、それに応ずるようにして、鯛が船のまわりに飛び上るのであった。

「おう……………」

聖人はその壮観さに、思わず歓声をあげられた。

「お聖人さま、これで、村中の病人もきつとなおりましょう。村の景気もよくなるような大漁がきつとありましょう。ありがたいことでございます。この沢山な鯛の群れはその前兆でございます。ああめでたい、めでたい。ご聖人さまのお供をしたこの鯛どもは、孫子の代まで、この浜では、捕らせないようにいたします。あれあれご覧下さい。鯛がお聖人さまの顔を拝もうと、あんなに何匹も飛び上っておりますぞ……」

東条左衛門尉景信

「殿様、近頃日蓮法師のうわさが大変やかましゅうございますが、お耳に達しておりますでしょうか」

「いかなることか申してみよ。まさかこの東条の郷におるのではなかるうなあ」

「それが、その生家に帰っておりますのでございます」

「なになに、小湊の村にきておるのか。馬鹿者奴、なぜ早くそれをいわぬ」

「はい。よく確かめましてからと思っておったのでございます。小湊村も以前とは変わりました、近頃は取り調べにことをかくような始末でございます」

「なぜだ。なぜ小湊村の様子がわからないというのだ。小湊村は東条の領地ではないのか、領主が自分の領地のことかわからなくてどうするのだ。思えば十二年前の建長五年の四月二十日の夕、この東条左衛門尉景信、不覚にも、あの日蓮坊主を討ちました口惜しさは今に忘れるものではない。まことにあの坊主こそ弥陀の怨敵、稀代の仏敵じゃ」

「お殿様……お言葉中でおそれいりますが、その阿弥陀様の尊い念仏を、今あの小湊村では唱えるものが一人もおらなくなりました」

「ええ。また、そりやどうしたことだ。それも、あの坊主の仕業というのか」

「さようでございます……恐ろしいものでございますなあ」

「馬鹿、馬鹿、感心しておる時ではないぞ。して、また、なんで一寸の間に、そのようなことになったのじゃ。くわしく申してみよ」

「はい……そのことについて詳細にとり調べてまいりました。たしか、先月のことかと存じますが、彼の日蓮法師が生家に帰ったのでございます。その時、ちようど、母親が息をひきとった時だそうでございます。すると、日蓮法師は、庭先から、御題目を声たかだかと、

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

……………」

「これこれ汚らわしい。その南無妙……とかは、そう力をいれないでもよいわ。ほどほどにして
おけ」

「さようでございますか。話が日蓮法師の話でございますので、いくらか殿様の前ではありませんが、日蓮法師は庭先で、声たかだかと

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

.....

と唱えましたとは申し上げかねます。南無阿弥陀仏だったら、日蓮法師の母親は本当に死んだでございましょう。ここはどうでも、南無妙法蓮華経と申しあげませんと、話が申しにくくなりま

す」
「ええい。うるさい奴、その唱えごとは、略して話せ。南無阿弥陀、南無阿弥陀、耳が汚されるわ。して、そしたらいかがしたのじゃ」

「母親に日蓮法師の唱えた南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

「ええい。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。その南無妙……とかはやめておけ」

「これをいわないでは、話に調子がでません。南無妙法蓮華経……」

「.....」

「と、唱えますと、不思議や、母親は生き返ったのでございます。さあ、そうなると、大変でございます。このこと、疾風のように村中に知れわたったのでございます。ところが、当時村には病人が多く、かてて加えて、雑魚一匹も浜ではとれぬという不漁続きでございました。そんな法力が、わが村に生まれた日蓮法師にあるのなら、村だすけになることだ。一つ御祈禱をしてもら

つて、村中を助けてもらえと、誰かが、いいだしたのだそうですが、日蓮法師は頼まれると、さつそくに、わが家の前から船に乗って、南無阿弥陀仏と書いた旗をたてまして……」

「馬鹿つ、それは南無妙法蓮華経という旗ではないか」

「ようく、ご存知でございますなあ。その旗じるしでございます。あまり、南無妙法蓮華経というなどご命令なので、遠慮しまして南無阿弥陀仏と申し上げました」

「そんなついでしうはいらぬこと。して、その後いかがしたのじゃ」

「南無妙法蓮華経と書いた旗を船の舳先に立てました。日蓮法師は、船を小湊の浜にそつて、進めますと、お殿様、失礼いたします。こう申し上げませんと話に力が入りません。」

日蓮法師は

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

……………」

「もう、やめておけ……」

「いえいえ、唱え始めだしますと、なかなか、一寸やそつとでばやめられないのが、このお題目

でございます。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

私めも、あまり唱えておる中に、ナンマイダよりは、なんだかありがたいような変な気持ちになつてまいりました。妙なものでございますなあ、お殿様……」

「何をくだらんことをいう。日蓮坊主の話はいかがしたのじゃ」

「はい……たつたそれだけのことで、村中からは病人は一人もいなくなり、不思議なことにそれからは大漁つづきだそうでございます。こんな法力を現わされたんでは、南無阿弥陀仏などと唱える者が一人もいなくなるのは、当然でございます。お殿様……」

伊勢大神宮ニ寄進シタテマツル御厨、壹処、安房国東条ニアリ

右ノ志ハ、朝家安穩ノ為奉ツル私願ノ成就ノ為メ、殊ニ忠赤ヲ抽ンデ、寄進シタテマツルノ状件ノ如シ

寿永三年五月三日

正四位下前右兵衛門左源朝臣

これは聖人がお生まれになった貞応元年よりもようど三十八年前のことであるが、頼朝はこの東条の御厨（伊勢大神宮にそなえる魚采の料地であつて、鎌倉時代が最盛で近世には煙滅した。魚采に代える後世には米をもつてするようになった。）を寄進して八年後に、征夷大將軍になつておる。故にこの東条の御厨は神驗あらたかとしてこの地方の信仰をあつめ、また、この地方の人の自慢の種であつたらしい。

聖人もこの東条の御厨は、御自分の生家に近い御厨として尊重されておる。すなわち、

「日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて彼国は天照太神のすみそめ給ひし国なりと言へり。かしこにして、日本国をさぐり出し給う。あはの国御くりやなり、しかも、此国の一切衆生の慈父悲母なり。かかるいみじき国なれば、定んで故ぞ候らん。いかなる宿習にてや候らん。日蓮又彼の国に生れたり、第一の果報たるなり」（弥源大殿御返事全集一二二七ページ）と、東条の御厨の近いところに生れた事を果報とされており、また開宗に當つては、

「去る建長五年四月二十八日に、安房国長狭郡之内東条の郷今は郡也。天照太神の御くりや、右大将家（源頼朝）の立て始め給ひし日本第二のみくりや（第一は武州の飯倉）今は日本第一なり。此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此の法門申し始む」

（聖人御難事全集一一八九ページ）

云々といわれ、東条の御厨を誇りとされておるのである。

ところが、この東条の御厨の給人（神宮と御厨との中間を斡旋する人）であり、地頭職をしておるのが、東条左衛門尉景信であった。

東条左衛門尉は、聖人が、清澄寺において、念仏無間の法門を口にするや、たちまちに聖人の敵となり、その日その時から、聖人の首を狙う人となった。しかも、この首の狙い方は尋常一様のものでなく、実に徹底していたのである。念仏を悪口する憎き僧侶として聖人を狙うということもあつたらうが、それ以外に、実は重大なる利害関係が伏在しておつた。

聖人のお筆として安房国長狭郡東条の郷今は郡なりと前述にあるが、長狭郡は北条朝時の領地であつた。聖人を伊豆の伊東に流罪に処したのは、北条重時、長時の親子であつたが、北条重時は、自分の兄である北条朝時の死後、安房の国長狭郡の朝時の領地を、自分のものにしようと狙つていたのである。朝時の妻は夫の死後、後家尼となつて、夫の領地を守りつづけていた。後家尼はいかなる故か、聖人のご両親に恩をかけ、聖人も後家尼よりいろいろとお世話になつておるのである。従つて、領地のことについては、聖人がじかじきに、鎌倉の間註所に行かれて、後家尼に有利な証言をしたので、後家尼の領地は重時のものにならなかつた。

重時の命を受けて、安房国の現地で直接働いたのが、東条左衛門尉であつた。聖人が得度をした寺、千光山清澄寺の坊地も山林も、あわや東条左衛門の支配下となろうとしたのだが、鎌倉における、聖人のはたらきによつてことなきを得たのである。

こんな利害関係があるので、聖人の首を狙う東条左折門は真剣であつた。

しかも、重時は四年前に死に、その子執権職長時も今年の八月（文永元年）に死んでしまつた。故に聖人さえ亡き者にしたならば、安房国の長狭郡一帯は、東条左衛門尉の思いのままになるのであつた。東条左衛門尉景信が聖人を念仏門徒の仇敵とするのは表面の理由で、実は、その影にこんな重大な理由があつたのである。だからこそ、三百人の同勢を引きつけて、小松原に聖人を襲撃するという、小松原の法難が起つたのである。

小松原の法難

一

十一月のあい色の空の深さは、四季のいろとりどりの中でも、もつとも魅惑的なものである。そのあい色の空を映す地上の水は、すみにすんで、たとえ、どんな水溜りであつても、澄みきつているものである。

こんなところにこんな水溜りがあつた。こんなところにこんな池があつたのかと、はつきり、人に印象づけるのもこの季節である。何故ならば、水がすんでいるからである。のぞいてみると、水の底は、人が思ったよりも複雑な高低と、大小の窪みがあるのに驚く。水の底を人がのぞくのも、この十一月の季節である。

安房国の東条村の小松原近くの松影に身をひそめながら、水溜りに映る、しかし実の影をじいっと、みつめている物具をつけた者が二人いた。

先程から、黙ったまま、身も動かさないでいる。これはもの見の役の者らしい。

ややしばらくして、駈けてくる人の足音がしてきた。

二人の者は互いに顔を見合わせて、合点しあつた。

足音が二人の側を駈け抜けようとすると、ひよつと、二人とも立ち上つた。

「おいこごだつ」

「ああ、そこにいたのか、あやうく、駈けぬけるところだつた」

「して、首尾は………」

「上々だ……」

「よろしい、では、その旨はこの俺が伝えに行く、貴様はここで休んでおれ」

そういつた男は、すぐに駈け出して、松原の中にみえなくなつていつた。

また二人になると、二人とも松の小影に身をひそめて、ぼそぼそと話しはじめた。

「で、日蓮坊主の一行の人数はどの位だ」

「俺はそんなことは知らないよ。そこまでは俺の役ではないんだ。また後から誰かがすぐ知らせ

てくることになっている」

「ああ、そうだったなあ。その報せがきたら。今度は俺が駈け出そう。半日近くも、水溜りの雲の動きをみていたんで、くさくさしてしまつた。お前は、どこから駈けてきたんだ」

相手の男は、やっと、息づかいがおさまったとみえて、落着き払った声で、もつたいをつけて話し出した。

「華房村の入口近くに、俺達はひそんでいたんだ。すると村の中から、知らせがあった。日蓮坊は今日たしかに村を出て、天津の工藤の屋敷にゆくというのだ。人数はまだ華房村の寺を出ないからわからないが、寺の附近の稲叢に、こっちの見張りがついているから、何人だか、どこの道を通るか、それを追っつけ知らせがある筈だ」

「そうか、どこの道を通るかまだ分らないのか、ふうむ。人数はそう多くはあるまい、一人で、どこでも、ひよこひよこ歩きまわる坊主だから」

「でも、今日は違うぞ。かりにも、天津の領主工藤左近丞吉隆の屋敷に招かれてゆくことから、ひよこひよこ歩きではなからう。弟子もつれて行こう、華房の蓮華寺の檀徒も四、五人は送ってくるだろう」

「幾人きたとて、手強い相手は一人もおらない。ただただ、どっちの道をえらぶかということだ。山の路を通って、いつきよに天津の浜におりてくるか。一人ならば、山路をえらぶだろうが、お供があれば、そんなことはしまい。この東条の村近くを通って、海ぞいの道をえらぶだろう」

「そうになったら、馬鹿というか、大胆不敵といおうか、すごい坊主だなあ」

「なあと、その位のこととするかもしれない。鎌倉の御執権さまの屋敷近くで、御執権さまの政治が悪いと、非難攻撃するかと思うと念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊、とくるんだから、たいした勢いさ……」

「大きな声ではいえないが、安房国の地頭職ぐらいは、怖くないかも知れないなあ」

「馬鹿、自分の主人の悪口をつく奴かおるか。口をつつしめ。とはいうものの、日蓮坊の腹の中はそうかもしれないぞ」

「おや、足音がするぞ」

「きたきた、しらせがきたのだ」

後の伝令がきたらしく、駈けてくる人の気配がした。

もの見の役の者は、松の樹影から身を現わすと、自分の所在をつげた。

「どうした……」

「おう。そこか。日蓮の一行は七、八名、この小松原をめざして、たしかに来るぞ」

「そうか、ようし、貴様ばここで休め、後は俺が飛ぶ。では、手筈は前からきめた通りだ。うまくゆけば褒美の金はたんまりだ」

東条左衛門尉景信は馬上にあつて悠々と歩をすすめていた。引き具する同勢は三百人。弓を持つもの、槍を担ぐもの、いざ鎌倉と、幕府に上る姿と少しも変わるところのない、堂々たる軍勢である。

「日蓮の一行はわずかに七、八名」と見張りのものから使いがあつても、最初からの態勢を少しもくずさなかつた。何故であらうか。

それは聖人の一行を、皆殺しにしようという魂胆であつた。一人でも、その当時の事情を、敵方の口から、語らせたくないのである。そうすれば、ことはうやむやに葬むることが出来るのである。

それにもう一つの用心があつた。それは天津の領主工藤左近丞吉隆の聖人に対する御帰依の深さであつた。聖人の伊豆伊東の流罪中に、聖人はわざわざ御書を工藤氏に送っている程である。すなわち四恩抄という御書が、それである。

それ程に御帰依の深い工藤氏であつたから、それとなく、いつでも、聖人の身边を警備されていたのである。

八月に帰省された聖人が、三月たつても東条方から、手をつけられないでいたのは、工藤左近丞吉隆の無言の警備に負うところがあつた。

ところが、十一月になると、吉隆の夫人の懐婚の噂さがとび、それとともに吉隆が病氣である

との噂さがとんだのである。つまり、工藤宅はとり込み中との噂が、東条景信の耳にはいつてきた。

聖人を襲うのは正にこの時であると景信は考えたのである。ところがその聖人が、大胆不敵といおうか、または自分を馬鹿にしたのか、自分の屋敷のある東条村の小松原をぬけて、天津に行くというのである。

工藤宅に安産の御祈念に行くのか、病氣平癒にゆくのか、あるいは法事で行くのか、そこまでは景信は探らなかつたが、わずかに七、八名で聖人が行くというのである。

わが屋敷の近くを、永年来仇敵としてつけ狙う聖人が通るのである。恨みも深い十二年前の建長五年四月二十八日には、清澄の山を汚してはと、その帰途を待ち受けたが、内通する者があつたので取り逃がしてしまつた。

待てば、海路の日よりありで、今日今度こそは、聖人の方からわが屋敷の近く、わが親父の代に砂よけのために、村人に植えさせた小松原を間違ひなく通るといふのである。なんたるありがたさである。日頃唱える念仏の御恩を報ずるのはまさにこの時である。

今日こそ宿敵日蓮を討ち果たす日である。しかも、伏兵には最も都合のよい小松原の地である。三百の用兵を苦もなくかくすことができるであろう。

日蓮の一行が小松原の真ん中近くに来るまで兵を伏せておいて、機をみて一気に弓矢を注いだ

ならば、いかに日蓮といえども、逃がれる術はあるまい。

馬上の東条左衛門尉景信は、そのように作戦を頭に浮かべて、にっこりと微笑を面に表わした。

「そうれ」

右手を高く景信が上げると、軍勢は心得たとばかりに、左右に別れ、やがて、四分五裂すると、小松原の松影に姿を消した。ここに三百の伏兵があるかと誰れが知ろうか。

文永元年十一月十一日、あたりは、たそがれ時の午後五時頃であった。

浜風もひとしきり、大きな音をたてて松原の上をわたっていった以外は、物音ひとつしない。

東条左衛門尉も、馬からひらりと飛びおると、供の者に馬をひかせて、小松の影の床几に身をおいたのである。

一一

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

先頭に立つた鏡忍坊が、先達になって唱える題目である。

聖人の一行は七人。

ここが、聖人を宿敵とする東条左衛門尉の屋敷にほど近い、小松原であることを、一行の七名も十分に知っていた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

後陣になった乗観、長英の二人も必死となつて題目を唱えていた。

潮鳴りの音が東の方にして、潮風が、さあつと松の小枝をゆるがしていった時である。ばさつと、一本の矢が鏡忍坊の足許にささつた。

「すは……おのおの、御用意、御用意」

鏡忍坊が、声をかけて身を伏せるのと、一行にしゃがめと、いったような合図をしたのと同時であつた。

景信の同勢三百人が、一気に矢を射つたのであろうか。たちまちにして夕立のごとく矢がふりつづいた。鏡忍坊は、思わず砂に鼻をうずめるごとく身を伏せたが、聖人いかにと、ふりかえつてみると、こはいかに、風渡る枯尾芝の原に立つ地藏のごとく慈顔の面をして、聖人は雨のごと

くふりそそぐ矢の中に、凜然としてたたれていたのである。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

これは聖人の口からほとばしる題目の声であった。

「おう……」

鏡忍坊は、怒りの声を発すると、身をおどらして、近くにある松の樹をむんずと掴んで「うー」と吠えたかと思つたが、すつぽりと松の樹を根ごとひき抜いてしまった。

「危ない、お聖人さま」

といいながら、聖人の側によつて、ふる矢を松の樹と、自分の身体を持つて防ぐのであった。

「鏡忍坊は、今日のこの法難のために生まれてきたことが只今わかつたぞ。わしは死ぬ。いいか、その代わり、ほかの者はお聖人を必ず助け参らせてくれ、いいか」

「鏡忍坊っ」

「おつ、乗観と長英つ、頼んだぞ。わしはここを討つて出る。その隙に、お聖人をお助け申せよ。間違つても、右にいつてはならんぞ、左へ左へ、山に逃げて行け、いいか」

こういい残すと、鏡忍坊は大声でどなった。

「東条左衛門尉はいずこにかくれておるか。こしぬけ侍、待ち伏せをして遠矢にかけるとは、卑怯な奴等だ。鎌倉には、こんな卑怯な主人に仕える者は一人もおらんぞ。」

卑怯者、卑怯者、ものかげにかくれて矢を射かけるとは、東条左衛門尉の家来には武士はおらぬのか……」

ふる矢の中に、まつしぐらに飛び込みながら、松の樹を右に左にと、ふりまわし、朗々たる声で、鏡忍坊がいい放った。

「卑怯者、卑怯者。松の木蔭にかくれて矢を放つとは、東条左衛門尉は東国一の卑怯者とみてとった。わあっはっ、わあっはっはっ」

鏡忍坊は、ふりそそぐ矢音にまけぬ声をたて、松の樹を杖にして小松原の真中につつたつと、嘲笑の声を、弦音にもまけぬ程に放つのであった。

誰が下知したか、卑怯者と再三再四呼ばわれた故か、矢は、はたと止った。瞬時の間、嘘のような静けさがあつた。

だが、つぎの瞬間それも、鏡忍坊の大きな声とそれを、とりかこんだ東条勢の軍勢の叫び声に消されてしまった。

「であえ、であえ、東条の卑怯者の家来ども。おう、でてきたなあ」

卑怯者と罵られて、怒り心頭に発した東条の兵達は、さすがに弓矢をすてたか、白刃を秋の野

のすすきを連らねたごとくして、松の樹蔭より身を現わして鏡忍坊をとり囲んだ。

「ようし、ようし、東条の軍勢はこの鏡忍坊三百人とみたぞ」

鏡忍坊はわざと、味方にきこえるようになつて、非常の事態を知らせ、乗観、長英以下の人がとに、一刻も早く、聖人を落せという心持であつたろう。

「わが聖人の味方はわずかに七名じや。これをそこここにかくれて、姿を消すとも、東条左衛門の軍勢は、たしかに三百人はおるとみてとつた。卑怯者、遠矢はやめても三百人の軍勢で七人の命をねらうとは、東条左衛門尉はたしかに東国一の卑怯者ときまつたぞ……」

「さあこい、来ぬか……」

鏡忍坊は、劍の林の中に、松の木をふりまわしながら、飛びいった。

「見よや。見よ。法華経に命を捧ぐるものの最後をみい。日蓮大聖人の弟子、鏡忍坊日暁が最後をみよ……」

この声に応じて、東条の軍勢がときの声をあげて、鏡忍坊を始め、聖人の一行にうってかかり、あとは乱戦となつた。

「お聖人さま……こちらへ……」

乗観、長英は、聖人の手をとらんばかりにして走りだした。二人の気持を察してか、聖人が走りだしてくれたので、

「ありがとうございます」と乗観がいえば、長英は、

「もつたいのうございませう」と両頬に涙を流していた。

「わあっ」

という声が出て、三十人程の東条勢が、行く手をふさいだ。

身に寸鉄を帯びるでもない徒手空拳。乗観、長英は、いかにして聖人を守ろうとするか。

二人とも、白刃の中に法衣の袖をまくって、かいくぐってゆくより外に術はなかった。

小松の枝を楯にして右に逃げ、左によけて、白刃をふせぎ、時をかせぐのが防戦の手段でしかなかったのはまことにあわれであった。

聖人はとみると、この小松原中にたった一本たつておる大きな榎の樹の側にたつて、静かに、

一心 欲見 仏

不自 惜身 命

と経文を誦せられておった。

「やあやあ日蓮。よも、この顔を忘れてはおるまい。余は東条左衛門尉景信なり……」馬を走らせて東条左衛門尉は、声をかけながら、聖人をめがけてまっしぐらだ。

「思えば建長五年に、汝を討ち洩らしてより、ちょうど今年で十二年目、うどんげの花咲く思いとはこのことか」

東条左衛門尉、馬上よりよばわりながら聖人の身近くせまったが、経文を静かに誦する聖人の姿に気おくれしたか。あるいはまた、小雀をつかまえる鷹のごとき優越感を味わうためか、すぐとは聖人によらず、馬上で一刀をすらりと抜くと、榎の周囲を馬で一周りしたのである。――
〔注、この榎は降神榎と呼び、いまなお浄庭に存す。樹齡千有年。周囲一丈五尺、傘のごとく枝を四方にたれ頗る偉觀である。鏡忍寺史による。〕（千葉眞安房郡東条村広場境忍寺境内所在）

榎の周囲を一周りして、勢いをつけた東条左衛門尉は、

「思い知ったか、日蓮っ……」と馬上より刀を振り上げたが、

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

不思議っ。

堂と音たてて地に呻いたのは、左衛門尉景信であつた。

馬は、ひひんと悲しい声をたてて怒り狂った奔馬となり、わが主人を足げりにしたかのようにして、榎の小枝を馬首でうち折りながら、まっ直ぐに飛んでいってしまった。

こわ、どうしたことか。

傘のごとく、枝をたれている榎の樹である、左衛門尉が、馬に威勢をつけ、一刀を聖人めがけ

て切りおろした時、聖人は一足さがって傘のごとくたれさがる槇の枝の下に難をさけたのである。いわば木遁の術というところであろうか。左衛門尉の馬は槇の小枝につきあたり、槇の葉で眼玉をついたから、馬はたまらず狂いだしたのだった。

左衛門尉の刀の手許も狂って、聖人の命を奪うにはいたらなかった。

だが、聖人の額には血が流れていた。

右手の念珠の親珠は真二つに割れていた。

「文永元年十一月十一日頭にきずをかほり、左の手を打ちをらる」（聖人御難事抄）と聖人が自ら書かれておるのは、この時のことである。

「お聖人さま……」

槇の樹のふもとに、駈けよつたものが二人いた。

「おお、これは、忠吾、忠内の二人ではないか。どうして。ここへまいった……」

「主人、工藤吉隆殿、お聖人さまのお出ですが、あまりおそいので、出迎えにここまでまいりましたところこの法難、只今あれにて、東条勢を相手にして、見事な働きでございますぞ、してあれなるは……」

聖人の側から、五、六間向こうの砂地に呻いておる東条左衛門尉を指した。

「あれは東条左衛門尉景信じゃ、助けてつかわせよ……」



聖人の慈愛にみちた言葉である。

「東条左衛門尉景信でございますか、あれが、はっはっはっ……」

忠吾、忠内の二人は思わず笑った。

そして、異口同音に叫んだ。

「やあやあ東条の勢、近くにあらば、すぐきたれ、汝等の主人左衛門尉景信は、聖人の御威光に打たれて、ここに腰をぬかして呻いておるわ……命をとるは安いことであるが、聖人が助けてつかわせのお言葉があったから、助けてやるぞ……さあ、さあ」

二人の叫び声の中に、あわてふためいて、十数人の東条勢が走りよつて、一団の中に左衛門尉をかこみ、逃げるようにして小松の蔭にかくれさせたのは、むしろ滑稽であった。

二

「お聖人さま……お聖人さま」

長英が手負いながらも、鏡忍坊を肩にしてよるけながら、お聖人さまと叫びつづけて、槇の樹のあたりにたどりついた。

「おう、長英、日蓮はここにおるぞ」

聖人は、忠吾、忠内が、一生懸命になって、額の傷を手当てするのに、身を任せておったのである。

「おう、お聖人さまは、ご無事でございましたか。これ、鏡忍坊、お聖人さまはご無事であるぞ、しつかりせい」

だが鏡忍坊の口は動かなかつた。

「鏡忍坊、今の今まで、お題目を唱えておったではないか、なぜ、その口から、お聖人さまと声がでぬ、これっ」

長英は鏡忍坊を肩からおろすと、その身体をゆすぶるようにしたが、鏡忍坊の身体は、お聖人さまに向つて、お辞儀をするような恰好で堂と地に倒れてしまったのである。

「鏡忍坊、こときれていたのか……」

長英はかぶさるようにして、鏡忍坊の身体の上から声をかけた。

「残念だ。鏡忍坊、鏡忍坊、念仏門徒の刃にかかつて死ぬとは情けないぞ」

長英は顔中を涙にして泣きぬれた。

「長英……」

「はこ」

忠吾、忠内の応急の処置で、傷の手当てを終った聖人は、やおら立ち上ると、

「名を呼ぶでない。臨終只今にありと心得て、信心をいたして、南無妙法蓮華經と唱える人を、是人命終、千仏は御手をさしのべ、恐怖せしめず、悪趣に墮さしめずと經文に説かれてある。鏡忍坊は今今まで、お題目を唱えておったというではないか……」

「臨終の時ばかりではありません。南無妙法蓮華經と唱えながら、奮戦し乱戦し、南無妙法蓮華經と叫びながら法敵の刃を身に受け、南無妙法蓮華經と唱えながら命たえたのでございます」

「ならばなおのこと、安祥として鏡忍坊を、寂光の宝刹にゆかしめよ。その名を呼んで、一念のこの世に残るようなことをしてはならぬぞ。」

長英つ、東条左衛門尉は落馬の醜体をさらして、引き上げたとはいえ、まだまだ伏せ兵がどこかにひそんでおるに違いない。鏡忍坊の死体を、この人数で運ぶのも人目につく。幸いここは砂地だ。わしがここで、自我偈一卷をあげる間に穴をほれ。忠吾、忠内お二方も手を貸してもらいたい。よいか……」

聖人は静かに自我偈を読み始められた。

自我偈 仏 来

所經 諸 劫 数

：
：
：
：
：
：

三人は必死になって力を合わせて穴を掘った。わずかに土をかぶせるにたる穴を掘り上げると、鏡忍坊の死体をそこにおき、そそくさと土をかぶせてめじるしに一本の松の苗木を植え、乾いた砂を上からかぶせて、その所在をくりました。

本当の仮り埋葬である。

聖人の読経がやがて唱題にかわると、他の三人も、力一杯に唱和した。

聖人は静かに歩をすすめて埋葬の場所に近づき、唱題をやめられたが、やがていいさとすがごとく口をきられた。

「鏡忍坊、鏡忍坊、日蓮は、朝な夕な、一心欲見仏、不自惜身命と、弟子達に教えていたが、今、お前がそれを実行した。日蓮さきがけしたり、和党どもつづけよかしとは、日蓮が日頃の言葉であるが、鏡忍坊、お前がぬけがけの功名を立てると思いがけなかった。法華経に命をささげた今日のあつばれなる振舞いは、日蓮は終生心に忘れぬぞ。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

.....

この法華経を弘むることは、如来の現在すらなお怨嫉多し、況わんや、仏の滅度をやとは経文にのせるところである。鏡忍坊は今それを身でしめした。だが、法華経に捧げた鏡忍坊のこの命

は、決して無駄となるものではない。大法弘布、広宣流布の暁まで、法華經の雄々しい華として咲き匂うであろう。

鏡忍坊よ。弟子鏡忍よ。この小松原にふく松風が妙法の琴を弾じ、松のみどりは、汝の功績を永久に語り伝えるであろう。即身成仏とは鏡忍坊のごとき最後をいうのであろうか。

南無妙法蓮華經……」

聖人が一歩すすんで、今植えたばかりの松の苗木に進んだ時、ぽとぽと落ちたのは、松の露か、聖人の涙であつたらうか。

鏡忍坊をそうそうのうちに埋葬した聖人の一行が、涙をうち払って歩を早め、松原の中を身をかくすようにして、一、二町きた時である。意外なものに遭遇したのであつた。それは工藤左近丞吉隆の殉難であつた。乱戦でいつか長英と別れ別れになつた乗観がそこにいた。工藤左近丞はよほどの深傷とみえた。

「左近丞殿、日蓮ですぞ、しつかりなされよ、しつかり……」

聖人は左近丞の側によりそつた。乗観が鎧をとつたとみえて、身軽になつた吉隆であるが、その戦衣は真赤になつていた。

「お聖人さま、工藤左近丞吉隆、今生のお暇請いでございます……」

「なにをいわれる吉隆殿、これしきの傷が何事です……」

「おはげまし下さるお言葉は、まことにありがとうございますが、吉隆命数を悟りました。すぎてみれば八十の齢も三十の年少も、どれ程の相違がありましたか。お聖人さまご覧のごとく、吉隆の法衣は、念仏門徒の矢に当って、所々方々が、傷だらけでございます。靈山に一度参じて、新らしき法衣に着かえてまいりたいと存じます。いかがでございますよう」

「ああ、あっぱれ見事なお覚悟でございます、そう申されてはなにをいいます。お覚悟召されよ。ご日蓮が弟子鏡忍坊もたった今、法華経に命を捧げて、靈山に旅立ちました。おそらく、先達となつて、吉隆殿の道案内をいたすでしょう」

「鏡忍坊も討死されましたか。靈山詣りの法友が出来たというもの、いさましい限りでございます。だが、お聖人さま、吉隆今生一生の願いがございます」

「何事ですか。その願ひとは、日蓮必らず叶えて進ぜますから、申されてご覧なさい」
今や、息たえなんとする工藤吉隆は、背後にまわつた乗観にしつかりとだきとめられて、聖人
にうのであつた。

「お聖人さま、お聞きでもございませうが、只今、奥は懷姫しております。生れた子供がもし男子でございましたら、なにとぞお聖人さまのお弟子の一人にお加え下さいまし。そして大きくなりましたら、お聖人さまからおさとし下さい。この吉隆は東条左衛門尉を怨んで死んだのではけつしてない。法華経に命を捧げて死んだのである。したがって、仇討ちなどということも毛

頭思つてはならぬと。子が親の仇を討てば、討たれた親の子はまた仇を討つでしょう。果てしない修羅の巷でございます。怨讐をすてて仏道において身をたてるよう、これが唯一の父親への報恩であると、なにとぞおさとし下さいまし……」

「吉隆殿、日蓮たしかに心得ました。生まれた子が男であつたら、必ずこの日蓮が申し受けて弟子にしよう。法華経に命をさされた吉隆殿をつぐ程の立派な僧侶にいたしてみせよう。ご安心なされ。さるにしても、吉隆殿の心がけ、在俗の志とはまったく異なる。身には甲冑を体していても、心は僧侶だ。只今より、妙隆院日玉上人と名乗らせたまえ」

忠吾、忠内、乗観、長英の四人が「はっ」と一勢に声を出したが、異口同音に工藤吉隆の、消えんとする玉の緒を引とどめようとして叫ぶのであつた。

「吉隆殿。御身に上人号を賜わつたぞ、喜ばれよ、破格の上人号、お弟子の中にも未だ賜わざる上人号じゃ。日玉上人、ああもつたいない」

吉隆は最後の努力をして眼を開けたが、につこり笑つて、聖人を拝んだ。

「きこえたか」吉隆はうなづいた。

聖人は合掌した。

「南無妙隆院日玉上人……」

雁が声高く鳴いて、清澄山の空にむかつてとんでいった。

四

日がくれた。

聖人はともかく、弟子の乗観、長英達が腹の底から願つておつた、日が暮れたのである。

文永元年十一月十一日の日がくれた。

大將が落馬して、戦意をなくしたとはいへ、東条の軍勢はまだ全部引き上げてはいなかった。

ひそかに、聖人の姿をもとめて、ここかしこに動いている気配がある。

鏡忍坊の亡骸は砂地に埋められ、法華経に殉死した工藤吉隆の死体は家来が背負つて、これまた危地をのがれていった。

さて聖人の一行である。

どうこの虎口を脱したであろうか。

東条左衛門尉が聖人の命をねらつたのは、単なる念仏の敵というだけではないのは前々述の通りである。東条左衛門尉は自分の料場として、聖人の得度の寺である清澄寺の裏山が欲しかった。鎌倉には、すでに手をまわしてほぼその了解が出来上つていたので。清澄寺の裏山には猪がおり、鹿が沢山におつた。一步その獣類が、寺領にはいつてしまうと、殺生禁断の地区という手

前があつて、自分の思うままにならない。

その禁札をとつてしまひたかつた。禁札をとるには、その土地を自分の所有にすればよいのである。

鎌倉にまでも了解がついておるのに何故それがかなわなかつたか。清澄寺にも東条左衛門尉に味方した円智、実成等があつたが、これに反対する聖人の兄弟子であつた浄頭、義浄等もおつた。浄頭、義浄二人は、鎌倉にある聖人にいちいち連絡して、東条の横暴を訴え、清澄寺の寺領を守ることに努力したのである。鎌倉の日蓮がなければ、自分の思いのままであるとは、東条左衛門尉の感慨であつたらう。

その日蓮が、自分の屋敷近くの小松原を通るといふのである。聖人の生家小湊は東条の領地にある。必らずや、尋ねてくるだろうと思つたのに、父妙日が死んでも帰つてこなかつた。三年忌にも帰つてこなかつた。「日蓮はこの東条左衛門尉が恐ろしいのだなあ」と東条左衛門尉はやや満足しておつたのであつた。ところが、故郷に帰らなかつたのは国諫にいそがしかつた聖人の都合であつたのだ。東条左衛門尉などは、聖人の眼中になかつたらしい。その証拠には、父妙日の七回忌にあたる本年には、堂々と生家の小湊に帰つてきたのである。

そして聖人が文永元年十一月十一日、東条の屋敷に程近い小松原に現われたのであつた。なんで東条左衛門尉がこれを見逃そうか。

小松原の法難はかくして起った。

鏡忍坊は法華經にいさましく命をささげて、文字どおり小松原の露と消えた。

工藤吉隆は在俗の身をもつて上人号を聖人自から賜わるの榮譽を得て殉難した。

さて聖人はいかがしたであろうか。

聖人の伴をしたのは忠吾、忠内の二人であった。乗観、長英の二人は重傷を負ったが、密集することを不利とさとしてめいめに逃れていったのである。

小松原から程近い小川を渡ると、山坂道にかかるところに、ちいさな洞穴があった。洞穴の上にはうらじろの葉が茂って一見所在がわからない洞穴であった。

勝手を知っている忠吾、忠内の二人は、聖人をここに案内したのである。

「お聖人さま、しばらくすれば日もとっぷりくれるでしょう。ここでお休み下さいまし、われら二人は、一人は華房へ、一人は天津へと駆抜けて、お聖人さまの御無事を知らせ、味方をつれてお助けにまいります。けつして、ここから出ないようお願い申します」

「まだまだ東条勢がうろうろしておる様子でございます。一人の僧侶の命をねらうのに軍勢をくりだすとは、昔からきいた話がございませぬ。また、このあとまたんとはありますまい」

「忠吾、忠内殿、この日蓮は不思議な法師であるよ。文応元年の七月には数千人の人びとによって松葉谷の自分の草庵を焼き討ちされたことがある。弘長元年には、路上で捕えられて、一回の

取調べもなく、伊豆の伊東に流罪された。この度はこの小松原での刃傷となったが、まことに、今日の存命不思議と申すばかりでござる。法華経には、末世にこの法華経を弘むるものは、たびたび刀杖の難に逢い、しばしばところを追われるとあるが、日蓮が所行はこの法華経の経文の通りである。難のきたるをもつて喜びとなす、とは、小松原の法難にのぞんだ、日蓮の本日の感慨でありますぞ」

「お聖人さま、もつたいないことでございます」

忠吾、忠内は、聖人の前に合掌するのであった。

聖人はこの洞穴に一夜をあかして、次の日に華房の里に帰えられたのである。

聖人が洞穴にかくれておったのを通りかかった老婆がみつめて、自分の背中にしよつた真綿をとりだすと、額の傷に風をあてぬようと差し上げたことは、有名な話である。御影様にお綿を上げる行事はこれに由来することである。

洞穴の側の川を、夜長川という。コ僕をこの洞穴にあかした聖人が、夜が長いので「夜が長いなあ」といったところから、つけられたのであると今も村人は語り伝えている。

聖人がこの洞穴に寒い一夜をあかしておった時、東条左衛門尉の屋敷では大変なことが起きて

いた。合戦の中場で主人が落馬したなんというのは聞き苦しい話であるから、家来の者もあまり語らず、主人をお屋敷にお届け申して医者を呼ぶさわざもあつたが、たいした傷でもないので、拍子ぬけしたような顔をして医者は帰っていった。夜も更け渡つた頃である。主人の居間からは、きくにたえぬ呻り声がきこえて、家人は全部起きてしまうという騒ぎであつた。

「苦しい、苦しい」と呻りつづけるのであつた。

まさに断末魔の苦しみというところであろう。現代の医学からいうと、いかなることになるのかわからないが、末魔というのは印度の古代語すなわち梵語の音写であつて、日本語でいうと死穴即ともいふのである。死穴とは、人間の身体の外部、内部にわずかな傷害であつても、生命を失うにいたる部分があることを死穴という。これが六十四か所から百二十か所あるという。水火風の三大の二が増盛して末魔にふれる時は、非常な苦痛を伴い遂には命を断つというのである。

「刀をもつて身肉をきられ、あるいは臼のようなものにて粉にされ、または砥石をもつて身をとぐような苦しみを得るを断末魔とは申すとかや」と書物にある。

東条左衛門尉の死は七転八倒虚空を挿んで死んだと表現すべきであろう。これは人間の最後としては最も下の死に方である。七転八倒というのは断末魔の苦しみである。虚空をつかむというのは、死ぬ人の気持が、下に落ちてゆくような気持になるから、虚空をつかみ、したがって眼は反対に上につりあがるようになるのである。これは「地獄に墮つる者は黒色となる上、身重きこ

と千引の（千人の力で引く石というから大変に重たいの意）石の如し」と聖人は千日尼御前御返事に言われておる。人間が怒るとその血が凝固するというのは現代の医学が教えるところである。七転八倒の苦しみをしては血も凝固して、色も黒くなるであろうと思うのである。

死ぬ時には両眼が下をむいておらなければならぬ。何故下を向いたのかよいかというと、死ぬ人の気持が上に登って行くから、下をみるような気持になつて、眼が下を向くようになるのである。これが大往生の時の眼のあり方である。同じく千日尼御返事に「善人はたとい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども臨終に色変じて白色となる。又軽きこと鷲毛の如し、やわらかなることろめんの如し」とある。この御文中にあるとろめんというのは、そうめんなどの類と思つたら大間違いで、とろとは梵語でとろという草木の名でそれからとつたわたのことを、とろめんというのである。あるいはまた綿糸に兔の毛をまぜて織つた舶来の布のこととも言うのである。ともかくも、臨終の時は、色が白くて、こわばらないことが成仏の現証となつてゐる。

臨終の一念は無量劫をひくといつて、臨終の最後の一念の大切なことを言つてゐる。生死大事血脈抄に「臨終只今にありと心得て、信心を致して南無妙法蓮華經と唱える人を……」と云うことがあるが、これも臨終の正念を教えたものである。

ともかく、東条左衛門尉は、聖人に害をあたえた仏罰によつて、狂死したのである。

報恩抄の御文中に景信が早死したことがみえている。

文永の大彗星

一

大正三年に欧州大戦が起きたが、その前の年か、あるいは大正元年であつたかも知れないが、私は彗星をみたことがある。彗星すなわち彗星である。

私はまだその時分には出家しておらず、入寺する二年前のことであつた。今になると私を起してみせてくれた伯母さんに感謝している。こういうものはなかなかみられるものではないから起きてみなさいといわれて、暁方に起されて彗星をみたのである。その日は、演習にきた兵隊さんが私の家にとまつたので、非常に早く家の人びとが起きて、朝食を供したので彗星を発見したのである。

二、三人の兵隊さんと一緒に、桜の並木がつづいている荒川堤の上に、光芒を長く引いた彗星をみたのを今でもおぼえている。

なんでも知っている伯母さんは、もうじき戦争が始まるといったが一、二年して欧州大戦が始まったのであった。

これが私の記憶にある彗星である。

さて文永の大彗星については、大聖人さまは御遺文中に約八か所程言及されておる。今これを省略して引用してみよう。

「その後文永元年七月五日大明星之時いよいよ此の災の根源を知る」

立正安国論奥書（全集三三三ページ）

「（文永元年）七月五日彗星東方に出で余光大体一国土に及ぶ、此れ又世始まりてより已来無き所の凶瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず、予いよいよ悲歎を増長す、而るに勘文（安国論のこと）を捧げて已後九か年を経て今年後の正月大蒙古の国書をみるに日蓮が勘文に相叶うことあたかも符契の如し」

安国論御勘由來（全集三五五ページ）

「正嘉年中の大地震・文永の大彗星・それより已後今に種種の天なる天変。地天此等は此先相なり」

法華取要抄（全集三三六ページ）

「去る正嘉元年の大地動・文永元年の大彗星・此等の天災は、仏滅後二千二百二十余年の間・月氏・漢土・日本の内に未だ出現せざる所の大難也」

曾谷入道殿許御書（全集一〇三〇ページ）

「但し此の本門の戒を弘まらせ給はんには必らず前代未聞の大瑞あるべし。所謂る正嘉の地動・文永の長星これなるべし」
教行証御書（全集二二八二ページ）

「去る正嘉元年八月二十三日・戌亥の刻の大地震と、文永元年七月四日の大彗星、此等は仏滅後二千二百余年の間・未だ出現せざる大瑞也。此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか」
呵責誇法滅罪抄（全集二二九ページ）

「日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後仏法を行ずる者にあだをなすといえども今のごとくの大難は一度もなきなり」
撰時抄（全集二六六ページ）

「問うて云く正喜の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来せるや答えて云く云々」

撰時抄（全集二八四ページ）

以上の如く、文永の彗星については、大聖人さまは重大なる関心を示しておるのである。いながら関心というのではなく、法華經の行者の出現する瑞相となしておるのである。

正嘉元年の大地震の根源をさぐるために駿州の岩本実相寺に四か年間たてこもつて、一切経を閲読した結果が、立正安國論となったことは前述したとおりである。

「彗星東方に出でて余光大体一国に及ぶ、此れ世始まりて已来なき所…」とあるが、鎌倉時代の

人びとが、いかほど驚いたであろうかを、明治四十三年に現われた、かの有名なハレー彗星と比較して述べてみよう。

ハレー彗星は明治四十三年の五月に現われたのだが、現われる前年の方が騒ぎであったと伝えおる。ハレー彗星が地球と衝突するというので、自殺するものや大散財をする者等々が多数あつたといわれている。

民間人の星の学者、野尻抱影氏はその目撃をつぎのように述べている。

「明治四十三年五月にハレー大彗星が現われた時は、初め頭は太陽に近かつたので見えなかつたが、尾は地平線からななめに天頂へサーチライトのように投げられていた。そして一時は、頭が夕方の西空にみえ、尾は夜明けの東空にみえるという奇観もあつた。太陽に最も接近した時は尾の長さは百二十度に達した。消えたのは六月の末だが、望遠鏡では約一年後まで観測されていた。ハレー彗星が現われた当時、私は甲府にいたが、その年の一月の午後、ハレーの先きがけとして、プラチナのように輝く長い尾をひいた大彗星が西の空に現われ、みている間に、雪の南アルプスの尾根へまっすぐ沈んで行く壯観をみた。「白昼の彗星」というのがこれであつた。」

明治四十三年五月二十日（金）発行の大阪朝日新聞は「すぎゆく彗星」という標題でつぎのようなことを載せている。

「二千万哩の尾を有し、一秒間二十八哩（一哩は十四町四十五間）の速力にて太陽面を通過する

彗星はいよいよ十九日午前十一時二十二分より通り始める訳である。願わくは晴なれかしと祈つた空は、朝来ややもすれば曇りがちであつたが、幸いに十時頃より快晴となり、十一時二十二分に至つては一天拭う如くになつた。(略)十時半頃より観測台の窓を撤した。十一時になる。十一時十分になる。どうもみえぬ。二十二分になつても見えず。二十五分になつてもみえぬ。記者も試みに、望遠鏡の下に首をつつこんでみたがやはりみえない。レンズの上の二つの黒点は太陽本来の上にあるので、たまに見るのは急ぎはしる雲の影ばかり。ふと針のような黒点を発見してたずねたら、それはレンズのきずだという。

平山博士にただせば「見えぬのが本当だ。今回の彗星は十五吋以上の望遠鏡でなければみえまい」ということは、早く欧米の学者間に唱えられていたのだ。遺憾ながら、日本にはこの八吋以上のものがない云々」とある。

この新聞によるとこの論説の外に、この日の市中の模様をのべておるが「ハレー彗星のしつぽに包まれるの、恐ろしいガスにあてられて、生物が皆死んでしまうの、酸素が多くなつて人間がおどり出すの、石がおちてくるの、磁石がきかなくなつてくるなぞ云々といつておつたが、いよいよ太陽面通過の時は、天空一片の雲をもとめぬ日本晴れ、ハレー彗星でなくて晴彗星、しろうとの目には、すず硝子を通して、血のような色をしたまんまるい日輪さまがみえるばかりで、な

んの変つた現象をもみとめることが出来なかつた」と書いてある。

ハレー彗星が太陽面通過の時は、騒ぎがはずまって、彗星がくるぞくるぞといつておつた時の方が大騒ぎをしたとみえる。これが明治四十三年のことだから、鎌倉時代のことならなおのこと大騒ぎであつたと思う。

ハレー彗星の長さは三千二百万キロという長さであつて、地球はそのハレー彗星の尾の中を通りすぎたのであるから、一応世界中の人びとが不安に包まれたのは当然であつたらう。

日本以外のハレー彗星の太陽面通過の記事を探してみると、つぎのごとくである。

「明治四十三年五月十八日欧州やアメリカでは夜の時刻に、ハレー彗星は太陽面を通過しました。「これを観測するため」という特別な目的で、ハワイに一つの観測隊が派遣されました。そこでエラーマンは口径六吋（日本のは八吋）の望遠鏡を使用しましたが、太陽面上には（若干の黒点を発見しましたけれど）彗星はまったく何もみえませんでした」とあつてわが国の天文台の観測と一致しておるのである。

さて太陽面を通過するハレー彗星が、何故みえなかつたかといふと「この事実は、彗星の平均密度が非常に小さいことを示すもので、彗星の体積はぼう大なものですが、その中に含まれている物質の量は非常に少ないのです」といわれておる。

彗星の正体はなにかというと、現在の天文学では以下のごとく理解しておる。すなわち、彗星は現在では太陽系ができた直後に、太陽または大惑星からふきだした物質から生まれたもので、よその星の世界からきたものではないと考えられている。大きな彗星が現われたのをみると頭がぼうつとぼやけて、中心が強く光っている。この中心の部分を核という。たぶん流星のような宇宙塵と、小石大の物質と、数個の大きな岩石とがまばらに集つたものらしい。大彗星でも初めは尾がない、太陽に近づくにつれて生えはじめる。これは太陽の光と圧力によって、頭部の宇宙塵とガスがはね返されて、後方へのびるので、いわば走っている機関車の煙ににている。尾の向きは常に太陽と反対の方向になつていたので、彗星が太陽から遠ざかる時には、尾は前方へなびいている。

ここでハレー彗星について、忘れてはならないことを述べておく。それはこのハレー彗星が日蓮大聖人が御誕生になつた年の貞応元年（一二二二年）に現われておるといふ事実であるが、まだ、このことについて言及したものをみたことがないから大いに研究してみたいと思つてゐる。

コーウエルとクロンメリンの二人の英国天文家はハレー彗星の過去の運動を紀元前二四〇年までさかのぼつて、すべての近日点通過の時刻を算定して、これの二十四回の帰来の場合の一回一回について古い記録をさがし出したが、その二十回目が一二二二年の貞応元年に相当しておるのである。

さてこの記録で面白いことは、ハレー彗星出現とキリスト降誕とを結びつけようとしたが失敗したことである。

すなわち、紀元前十二年にハレー彗星は帰来してゐる。即ちキリスト降誕の数年前に起つたので「これがかのベツレヘムの星なのだ」という風に証明しようとして試みたが、しかし学者たちは、聖誕の日が、そんなに早くないという意見で、キリスト降誕とハレー彗星とは結びつかぬのである。

しかるに「日蓮は一閻浮提第一の法華經の行者なり」といわれた。大聖人の降誕の年には、このハレー彗星が帰来して、聖人の出現を予告することく、その三千二百万キロの光芒を放つたかと思うと、末法の仏出現の感がまことに強いではないか。

一一

前回にキリスト教徒は、キリストの降誕とハレー彗星の出現とを結びつけようとして、十二年という年代のひらきがあるので、残念ながらついに断念したことを申し述べた。

しかるに、日蓮大聖人の降誕の年にあたる貞応元年（一二二二年）にハレー彗星が出現してゐることは、英国のローウエルとクロンメリンの二人の天文家が証明してゐるのである。そこで貞

応元年に彗星が果たして出たであろうか。前回筆者が、「日蓮は一閻浮提第一の法華經の行者なり」といわれた。大聖人の降誕の年には、ハレー彗星が帰来して、日本国に聖人（仏を聖人と申す、開目抄中にある）の出現を告げて、その三千二百万キロの光芒を放ったと書いたが、これを証明するような文献があるであろうか。

文献はたしかにある。

先ず一番確實なる文献吾妻鏡によつてこれを検すると、貞応元年の八月二日の項目に彗星のことが出ておる。

すなわち八月二日の午後八時彗星が西北の方にみえて、その大きさは半月程あり、色は白くその光芒は赤かった。光芒の長さは一丈七尺余とある。さらに十五日の項目をみると、今夜は彗星の光芒はわずかに一尺余であると載せ、二日の日から十五日まで、毎夜出現したと書いてある。そして二十日の日には、七月の二十三日に鎌倉に大地震があり、八月になつては彗星が出現したので、これらの御祈禱を全国の神社仏閣に申しつけたと記し、その甲斐あつたが二十三日には彗星の位置は西南に変わりその長さは五尺になつた。そして二十九日には彗星の姿はみえなくなつたと書いてある。

さらに北条九代記の巻の第六、鎌倉天変地天の項目をみると左のごとく記してある。

「四月十三日に、承久四年を改めて、貞応元年とぞ号しける。この頃鎌倉の前浜、腰越の浦々

に、死せる鴨鳥いくたともなく、波にゆられてより来り、八月の初より、戊亥（西北々）の方に彗星出でて、軸星の大きき半月の如く、色白く光芒赤し、これらの怪異、只事にあらずとて、前浜にしては七座百怪の祭を行なわれ、御所においては、泰山府君の祭をぞ始められる。されど異なる珍事もなく、十一月二十二日には、京都禁裡の大嘗会を無異に遂げ行われ……」云々とある。

もちろん両書ともハレー彗星とは書いてはないが、前述の通り、二人の英国の天文家が、ハレー彗星の帰来を証明した年（一二二二年）であるから、引用文中にある彗星とは、ハレー彗星であることはいうまでもない。

聖人の御降誕はこの年の二月十六日であるから、新しい仏様がこの日本の国にすでに生まれたぞと、大空に天は告示したのであったが、当時の人は知る由もなかった。否、現代ですら、日蓮正宗以外の人びとは、聖人を日蓮宗の開祖ぐらいにしか思っていないのであるから、新しい仏様がこの日本の国に、貞応元年の二月十六日に生まれたとは解釈していいないのである。

日蓮正宗の信徒並びに僧侶の使命は、聖人が、日本に出現した新しい仏様であることを、世界中の人びとに知らせることにある。これを広宣流布の運動と称するのである。

さて、彗星が新仏出現の告示であるとは、当時の人びとは知る由もなく、天変地天の兆として祈禱のお祭りをやったのである。

北条九代記に載せる七座とは、(座とは現在の店のこと)簡略にいえば、魚、米、道具、塩、刀、着物、菓等の七つの売店である。だから、七座百怪の祭りとは、浜辺でやるくらいだから、庶民の祭りであり、泰山君府とは、君を泰山の安きにおくという言葉があるくらいだから、御所においてつとまった御貴人の祭りであろう。

彗星が出ればびっくりして大騒ぎをするのは当然であるが、鎌倉時代の人びとが彗星をどう解釈したかについて少し述べてみよう。

「彗星の出づること、自体に光りなし、日の光りをかりて見ゆ」とあるのは、現在でもその通り間違いはない。

「日の光りをかりて見ゆ、この故に、夕には東に指し朝には西に指す」といつている。これもその通りである。

彗星の光の尾に当たったところに、災難が必ず起こると解釈した。

彗星の光の尾が青いのは貴人に災難が起きるので、天子が兵に苦しめられ、あるいは大名が兵に苦しめられる兆とする。赤い光りの尾であると、賊兵が現われる。黄色であると女難によつて天子あるいは諸侯がその権力を奪われる前兆、または皇后かお姫様がその位を奪われる兆とする。黒い色の場合は水辺の賊兵が起きるといふから、河の入口や海岸に兵乱が起きるといふ。白色の時は天子諸侯が自ら兵を起すといふのである。

さて文永の大彗星についてようやく述べる段になったが、聖人は御遺文中に前回のごとく八か所も言及しておる。これは文永元年七月五日に現われた彗星のことを指す（立正安国論奥書）。

ただし御伝土代（日蓮正宗聖典五八九ページ）では「文永元年七月四日大長星前代未聞一天にはびこり満つ」とあつて一日日附が違つておるが、この時の彗星は大体二カ月位つづいたといわれるから、一日ぐらいの違いはよろしかろう。

ところが、御遺文にこのようにはつきりあるが、吾妻鏡ではこれを検することができない。というのが吾妻鏡では、文永元年の条がないのである。北条九代記には、文永元年に彗星の出たことをのせていない。

文永の彗星については、吾妻鏡も北条九代記も文永二年の出現をのせている。

吾妻鏡の文永二年十二月十四日に、今暁彗星東方に見ゆとある。さらに十八日には晴天午前六時彗星出現、長さ二尺余云々とある。さらに文永三年正月一日の夕刻に彗星が西の空にみえたと書いてある。

北条九代記によると、文永三年の十八日午前六時に、彗星が出てその長さ二尺あまり、茫気色白く、西方にみゆとあつて、この彗星は文永二年十二月以来の彗星でなかなか消えさらないので

御祈禱をしたことが書かれてある。

ところがこの時の彗星の光茫が白かったのが問題となった。すなわち前述の通り、白赤黒青等々の色によって判断したからである。

彗星の光茫の白いの、上方において兵を起すの兆とあるのである。

文永三年といえ、聖人を伊豆の伊東に流罪した影の重要人物重時の弟の政村が執権職であり、連署は北条時頼の長子である時宗である。時宗はその時に十六歳であった。これをのぞいて鎌倉において上方といえ、將軍宗尊親王（在職十五年）以外にはない。

今度の彗星の光が白いの、宗尊親王において兵を起すの兆である。將軍が、執権連署に対して逆心ありと噂されるにいたつたのである。

正月の一日から、彗星がみえて人心恐々というのに二月の一日は、朝から日が出ているのに空が曇つて、四辺がだんだんとまつくらとなり、やがて、夜のようになつたかと思うと、午前十時頃より雨がふり出して終日やまず、ついに夕方には泥の雨がふり出し、草木の葉に泥がたまつて、枝がたおれ伏すという、前代未聞のことが起つたのである。（吾妻鏡にあり）

主殿助（昔宮中の雑役をする人）の業昌という人が勘文を旧記によつて進じた。

それによると

「抑々古は垂仁天皇即位十五年に星のふること雨の如し、聖武天皇天平十三年六月、洛中に米飯

をふらすこと一日一夜、諸人これを食するに、尋常の味に変わらず、もつとも飢をたすけたり、翌年十一月には陸奥国に紅の雪ふる、光仁天皇宝龜七年九月二十日には石瓦のふること雨のごとし、同八年早魃甚しく、井水みなたえて渴死すること多し、これ等の変異は、上古一時の災なり、然るに今泥雨のふることは、極めて先例を考うるに何の事とも知し難し、ただ深く御慎みあるべし」とあつた。

以下は筆者自身に関することで失礼であるが、不思議な雨がふつたものと、筆者の子供にこの勘文をよんできかせたが、そんな事は嘘だと一遍に否定されるかと内心思つたらそうではなくて、そんなことがあるかも知れないと子供から教つたのには驚いた。

子供は、

「陸奥国に紅の雪ふるとあるが、最近アメリカで赤い雪がふつたと本に書いてあつた。調査したら不思議はなかつた。アメリカのある所に染物の工場があり、アノリカのことだから一村中が染物屋という大仕掛で、その染料のかすが河に流れてゆく。その河の水が蒸発して、空に染料のかすが舞い上り、それが赤い雪となつたということが……」
といつた。

「でも、聖武天皇の御代に米飯がふつたというのは嘘だろう」と私がいうと、子供が

「それはねえ、米を一杯つんだ船がどこかにあつて、それが竜巻なんかに出あつたとしたら、米

がふるかもわからないわ」といったのには、なおさら驚いた。

なる程そんなものかと思つたが、文永三年二月一日の泥雨は、どこかの火山が噴火してその泥がまわりまわつて鎌倉にふつたのであろう。(今の世だつてビキニの灰という言葉もある)調べてみたら文永二年には阿蘇山が噴火しておるから、文永三年にもどこかの火山が噴火したのかもわからない。筆者は(昭和三十年)の七月二十八日阿蘇山の噴火中に登山して、坊中駅に下つたことがあつたが、坊中駅では泥が正に雨のごとくふつて、もののすがたがみえなくなるのを体験したことがある。

文永三年の彗星の光茫が白かつたことは、將軍が反逆するのだと噂されたが、四月になつてそれは事実であることがわかつた。

三

文永三年の大彗星が、鎌倉の宵空に真白な光を放つて輝いたことが、將軍宗尊親王に逆心ありと噂されたが、このことは事実となつて現われた。しかもこの事實は、聖人が立正安国論に予言された、自界叛逆の難の前兆であつたことが、後になつてわかつたのである。

後になつてわかつたというのは、七年後の文永九年に事実となつて現われたので、この時は未

遂に終つて、表面に事實は現われなかつた。鎌倉幕府は、立正安国論に聖人が予言したところの、他国侵逼の難、自界叛逆の難の二難は、世論を迷わすもの、人心を動揺させるの論として、これを断罪にしようとして失敗し、北海の佐渡の国に流して、のちに始めて聖人の予言が的中したので、内心に恐れをなして聖人の佐渡流罪を赦免した程であるから、文永三年の出来事が、立正安国論に予言された自界叛逆の難の前兆であるとは知る由もなかつたのである。

文永三年の自界叛逆の難の前兆を語る前に順序として、北条時宗のことを一寸話さねばならぬ。

「元軍百万を前にして北条時宗の胆甕の如し」といわれた時宗が、執権職になつたのは十八歳であつた。しかも大蒙古国より牒状の来社年に、この大蒙古国の侵入を粉碎する一大方針のきまつた時に、執権職になつたのであるから、後世史書を読むものが、北条時宗というと、胸のすく思いがするのも無理がないのである。

聖人と時宗との関係は、なかなか深いものかおるが、これは順を追つてその関係を話すことになるので、今回はそれにはふれないでおく。

さて、この時宗が執権を補佐して、ほとんど執権職と等しいくらいの役である連署の役についてのが、わずかに十四歳の時である。文永三年には北条時宗は十六歳で連署という重大な役についていたのである。しかるに、時の鎌倉の將軍宗尊親王は、建長四年に京都より下向して將軍の

位につき、文永三年に至るまで在職は十五年、御歳は二十五歳という男盛りであった。

かれこれ、思い浮べる時、騒動が起りそうであり、かれこれ考える時、その不平を利用しようという輩も起りそうなものであった。

文永三年の四月頃になると、宗尊親王は御病氣と称して、諸大名との面会を断わられた。その屋敷に出入する人といえば、良基僧正と申す真言の御祈禱師のみで、たまたま屋敷の近くを通る人は、土塀の上に覆いかぶさった満開の桜に、これは思いもよらぬ、真言護身の振鈴の音をきくのみであった。

宗尊親王の病あつしと鎌倉中に知れ渡つた六月の五日の夕刻である。

なんの前ぶれもなく、急に木工頭親家というものが京都より、宗尊親王の御所に入ったが、一晩中親王とお話を申し、わずか一兩日逗留して再び京に登つたのであった。

すると親家が鎌倉に来たのは、親王の病氣見舞ではなくして、諫言に下向したのであるという噂がたちまち鎌倉の街々にひろがった。

「將軍という空名の職にあること十五年、二十五歳の男盛りが、わずか十六歳の時宗という連署に頭が上らぬとは心外と、時宗を討つて將軍が天下を領したいのが御心中……」

こんな噂が、流行させたのか、流行したのかわからないが、鎌倉の人びとは耳にしたのである。

六月十九日執職北条政村の屋敷に、北条時宗、越後守実時、秋田城介泰盛という鎌倉幕府の連署始め要職の人びとが会合し夜のふけるのも知らなかった。

六月二十日、とつじよ將軍宗尊親王の御祈禱師であつた良基僧正が、鎌倉より逐電するという事件が起つたのである。

何故の逐電か。

この逐電によつて、以上の噂が事実であることが立証されたのである。

良基僧正は將軍に謀叛をすすめた張本人であるといわれた。和歌の会などに事よせて、將軍の近習に時宗を討たせ、將軍が本當の將軍になつて、天下の政治をとるようにおすすめたのであるといわれたが、ことが破れたので逐電したといふのである。

これが事実であつたのである。良基僧正は高野山にのがれたが、あまりに噂が高かつたので、これを隠まう人とてもなく、遂に断食をして果てたのはまことに哀れであつた。

月が變つて文永三年の七月一日、この日は朝から雷が鳴つてどしゃぶりという無気味な日であつたが、それにも増して鎌倉中は大変な騒ぎであつた。しかもこれが、どうというわけかわからない。ただ、むやみやたらの大騒動が起きたのである。その前日あたりから、有無をいわせず、寺社民家にいりこんでいた諸国からの御家人侍が、七月一日の早朝から兵具を帶し旗をなびかせて、馬を乗りあらして関所をやぶり、間道を押しまわつて関の声をあげて騒ぎ続け、夜にいたつ

てもやまないのである。

さて何事であろうかということとは、騒いでいる当の御家人どもにもわからないというのである。

だが、ここに迷惑なのは、何時の御代でも同じことで、一般の民衆である。

武士が兵具をつけ、旗をなびかせて馬を鎌倉中のりまわし、夜昼の区別なければ、理由がわからなくとも、これは合戦に違いないのである。

鎌倉は谷が多いので、あわてて横穴を掘って資財をかくす者、女子供をつれて山深く逃げ込む者、舟に乗って他国に逃げる者、上を下への大騒動は近來にないことであつた。

この騒ぎが三日も続き、甲冑をつけた武士が、東西に馳せ違ふかとみる、ある時は、北条時宗の門外に集つておうい！と喊声を上げるかと思うと、政所の南の大路に馬をあつめて、やつ！と鬨の声をあげて氣勢をあげるのであつた。これは今でいえば、デモンストレーションというところ、実に巧妙な戦術である。

さて北条時宗は、入道心蓮、入道行一を使者として、宗尊親王の御所に使わした。その口上には「昔から、かかる騒動の際には、代々の將軍は、必らずまず執権職の屋敷に移られて、世の中の変を伺われたものでございます。もししからざれば、当方から、しかるべき人数を將軍の御屋敷の方に繰り出して、御所を守護したものでございますが、今回の騒動に限って、さようなこと

がございませぬのは、はばかりながら、世の中の人々が怪しむ種をまくようなものでございませぬ。急ぎ急ぎ執権職の御屋敷の方において下さい」とあつた。色を失い、ふるえあわてたのは、宗尊親王の味方であつた。

歳寒くしてのちに松柏の貞を知るといふが、日頃は媚へつらい、君のためなら命をも惜しみませんと申した輩が、皆駈け落ちして行方をくらましてしまい、宗尊親王の許に残つた人数はごくわずかであつた。

しかるに四日の正午頃である。北条教時が將軍に味方して兵をあげたという報告が鎌倉中に、ばあつとあがつたので、騒動はますます大きくなつたのである。

事実、中務権太輔北条教時朝臣は、薬師堂谷の屋敷から、甲冑の武士數十騎を従えて駈け出し、塔の辻にいたつて、鬨の声をおうとばかりあげたので、その辻の近所にひしめいていた三日以来騒諍の武士達も、氣勢をあげて、やあやあと騒ぎたてたのでことは大きくなつたのだ。だが、教時に従う数十騎を除けば、後は文字通り烏合の集なので、誰が大将であるか、どこに攻めたててゆくのか、いつこうにわからず、旗をさしあげ、馬を東西南北に馳せまわすだけで、ただ騒ぎが大きくなり、女童や老人が馬の蹄にかけられ、盗人が多くなるばかりであつた。

この由をきかれた北条時宗は、東郷八郎入道をつかわして教時に仰せ出された。

「北条家は往昔遠州時政より草創して、神に通じて天にかないて天下執権数代に伝われり。泰

時、時頼相續して正道の政治をいたす、これによつて一門すでに余風にあずかり、俸禄その身に相応して、分際に随いて榮耀に誇れり。しかるを將軍家更に國家の政道に御心をかけられず、和歌の道は本朝の風儀なれば、もつとも稽古し給うに足りぬべし。ただその暇に蹴鞠博棊をこととし、酒宴に長じ、女色に落ち入りたまひ、諸人の憂を思召し知らず、しばしば諫言すれば却つて嘲弄し給ひ、ますます恣なること天下の乱根にあらずや。あまつさへ不覺の人びとを集め、北条の家門を滅し、時宗の一族を亡ぼさんの御計い、これ何の事ぞや。それに貴殿心をよせられ、非道の結構すこぶる人外の所行と申すべし、獅子身中の虫とは、かかることの喩ならんか。年来時宗に遺恨のことも俟はば、追つて如何にも承り、しかるべき義に於ては、ともかくも分別あるべし。この度を幸とし給はば、卑怯の企て誰か心ある人一味すべき、早く御志を改めて此方へきたり給え云々」とあつた。

教時は恥しく思つたが、形勢非となりと悟つたか、東郷入道とうちつれて、時宗の屋敷にいたつて、「まったく野心はありません。だが、北条一門に敵対するものが万が一あるかも知れんと思ひまして、わざわざ敵をあざむく計略で、本日、兵を引きつれて騒ぎたてたのでございます。誓状をかくの通り申し出します」

と謝罪をしたので、この時はおさまつたのである。だが、七年後の文永九年二月には、再び叛乱

を企てて、時宗自らの手によつて斬首されたのは後にゆずる。この文永九年二月の叛逆こそ、聖人が立正安国論に予言された自界叛逆の難である。

さて宗尊親王は、その日の午後八時という夕方に相模七郎宗頼以下武士十九人、雑兵四百余人という、ものものしい護衛つきで京に登られたのであった。宗尊親王はその後入道したが三十三歳で亡くなられている。

四

天然現象は人生とは無関係であると思うのが今時である。天文学的变化は地上の出来事とは一切関係ないことである。したがつて、その天文学的变化を、地上の出来事と関係ありとして立論した立正安国論は現代には通用しない論であると、発表した論文を拝聴させられたことがある。鎌倉時代そのままの考えをそっくり支持しようとは思わぬが、さりとて、それがそっくり間違いだとは考えないのが筆者の立場であることを先にお断りしておく。

天然現象が人生と無関係であると思うのが、まず第一の間違いである。人間も天然現象の中にふくまれているのである。

もし地球が現在のように、太陽に対して二十三度傾斜ということがなかつたなら、どうなるか

というと、一日中に、海の水は二度も地球全体を包み、昼夜寒暖の差は非常にはげしくなり、とうてい人類をふくめて一切の生物の存在を許さぬというのが、天文学的常識である。地球が二十一度傾斜しておるといことが先ず人生の始めであるともいえるのである。

これからまた台風の季節がくるが、もしこの台風が日本にこなかったら、どんなに「安心」かと思うのが日本人である。ところが、いづくんぞ知らん、この台風が日本に來なかつたら、日本列島は石ころだらけの島であつて、草木など一切生えない、人間の住めない島であるといふのである。

だから、台風が日本人を生んだといつてもさしつかえない。それで、日本では子供を風の子という……これは冗談だ。子供は風の子というのは、夫婦（ふうふう）の間から生まれるから風の子というのだそつで、ふうふうというのは風の音だそつな。

さてこつ考えて來ると、天然現象と人生とはまつたく關係ないとはいきれない。

いきれないどころか、「新パンドラの箱」毎日新聞社刊「ついに太陽をとらえた」読売新聞社刊などの原子力の構造に関する本をよむと、われわれの身体の構造が、宇宙の構造と同様なることを知つて驚くのである。

「ものを燃やしたら跡にはなにも残らないと考へるのは間違いで、そのものを作つていた原子たちは、変装の下にかくれて、休まない原子のはたらきをつづけています。説明ははぶきますが、

私たちが生きていくことができるのも、元をただしてみると、身体の中で各種各様の原子が、くつついたり離れたりして、いろいろな分子が生まれたり消えたりすることのおかげなんです。また石炭や水や空気から、プラスチックやナイロンを作ったり、塩からソーダーや肥料を作ったりする。いわゆる化学工業も、このような見方からすれば、原子という踊り子を人工的に変装させることにほかなりません」(新バンドラの箱より)これが近頃の常識である。

この極微な原千構造とわれわれの身体と、天体の構造とが、一致しているという不思議さは、妙という外はない。

天体の構造を妙法のはたらきと称する時、わが身も妙法のはたらきと称する思惟とこれは同様である。わが身は地水火風空であり、南無妙法蓮華経の当体であると、聖人はわれわれに教えているが、天然現象もこの地水火風空のはたらきにすぎない。

故に、春になれば人の心も花の咲いた春のような気持になり、秋になれば落葉の感傷的気分になるのは当然である。人生はこの変化を無視して論ずることはできない。

「春は花咲き秋は木の実なる、時のしからしむるに非ずや」と聖人は申されておるが、天地や運の推移と人生とは切り離して考えることができないのである。

過去に戦争の原因になった紛糾の原因は計算したら十六億五千数件あったといわれて、平和のむずかしさを語っておるが、その戦争にしてみても、これが天然現象の一つであるとみる学者も

いる。

俗に陽気を食うという言葉がある。私が歯痛で歯医者に行ったところが、先生がいうのには、こんな陽気になると、あなたみたいな患者が多いですよといわれた。陽気によって、歯痛が多かったり少なかったりするのである。

この話が首肯されると、つぎの説も受けいられるのである。すなわち、戦争が起こるのも地球の熱度いかにかわり、地球の温度が高いか低いかによつて戦争が起きたりやんだりするといふのである。これもうなずけないこともないのである。

薬師経の七難の中の第四番目に、星宿変怪之難というのがある。

文永の大彗星を聖人は(一)他国侵逼難の前兆(二)法華経に予言された上行菩薩出現の前兆(三)本門戒壇の流布の前兆等にもみなされたのである。

(一)の他国侵逼難の前兆であったことは、立正安国論に薬師経を引用されて星宿変怪の難を論じられたが、安国論上書後の七年目に、前代未聞という文永三年の大彗星となり、安国論上書後九年目には蒙古国より、貢物をもつて来るか、戦争するか、どちらでもよい返答しろという、蒙古の牒状となって現われたのである。

(二)法華經に予言された上行菩薩の出現ということは、聖人は弘長三年に伊豆の流罪が赦免になつておる。

聖人の建長五年四月二十八日南無妙法蓮華經の数十辺は、末法に新しい仏出現の産ぶ声であつたことは、今でも、日蓮正宗以外の人は知らないのである。いわんや、鎌倉時代の人が知らないのはもちろんのことである。だから、上行菩薩の出現ということも、聖人の内証には建長五年四月二十八日後はあつても、外的な上行菩薩としての条件がそろわなければ、第三者が認めないのである。ところが伊豆の伊東に流罪になつてからは、

「去年の五月十二日より今年正月十六日に至る迄二百四十余日の程は昼夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、その故は法華經の故にかかる身となりて候えば行住坐臥に法華經を読み行ずるにてこそ候え、人間に生を受けて、是程の悦びは何事か候べき。凡夫の習い我とはげみて菩提心を發起して後生願うといえども自ら思い出し十二時の間に一時・二時こそは・はげみ候へ、是は思い出さぬにも御經を読み、読まざるにも法華經を行ずるにて候」(四恩抄全集九三六ページ)とあつて「昼夜十二時の法華經の持經者」といわれ、「教機時国抄」では(四恩抄述作の二か月後)はつきりと「法華經の行者」といわれている。法華經には、末法において法華經を説く者は、流罪の難に遭うと予言されたが、經文の通りに聖人の身がなつてきたのである。

第三者にも、聖人が法華經の行者なることがわかる条件がそろつたのである。

そこで聖人は伊豆伊東流罪中の弘長二年より、御自身をはつきりと、法華經の行者といわれたのである。内証は上行菩薩たることはもちろんである。上行菩薩か第二の釈迦かと、御書中にはつきりといわれておるところすらある。そして流罪が許された弘長三年より三年後、聖人の内証を保証するかのよう、前代未聞の大彗星出現となったのである。すなわちこれが文永の大彗星である。

すべて偉大なる出来事には必ず前兆がある。一天四海皆帰妙法といわれる程の仏さまが、この国に出現するというのに前兆のないことはないのである。文永の大彗星こそ、新しい仏出現の前兆であった。七年後の文永九年九月十二日に、聖人が仏さまであることが証明されたのだがそれは後にゆずる。

（三）本門戒壇流布の前兆

新しい仏さまが生まれれば、衆生たるわれわれに新しい魂のよりどころをお示し下さるのは、当然のことである。本門戒壇のことについては後にゆつくり述べる機会があると思う。

そこで実は表題が富士となつておるのはこの（三）の理由にあるのである。

聖人の伝記を書いて富士と題した書物はおそらくあるまい。なぜ富士と題したかという、聖人の願いとするとところは前述の（三）の本門戒壇にあるのであつて、そのための御一代と拝しておるのである。そこで筆者はせんえつながら富士と表題を掲げて、あえて大聖人御伝記と申さなか

つた次第である。

慈母御逝去

文永四年八月十五日、聖人四十六歳の時に、聖人の母妙蓮女は亡くなられた。聖人の父妙日におくれることちょうど十年後である。大聖人のおなげきはいかほどであつたらうかと拝察される。

日蓮と名乗られて、父に妙日母に妙蓮と御名をさし上げたと伝えられておるが、聖人の一番最初の御信者はどのかたかという、御自分の父親と母親であつた。御信者になつた故に妙日、妙蓮と御名を授けられたとみるのが至当であらう。

自分の父親と母親とが、自分の一番最初の信者になつたというようなことは、ぼんやり考えると、何でもないように考えられるが、どうして、そんなものではない。

日本仏教史中に、偉い坊さんも沢山おるが、自分の両親を最初の信者にした方というような人は、聖人以外に絶対ない。

一休和尚の書簡集を読んだことがあるが、母親にあてた手紙の中で、自分の悟つたようなこと

は、なかなかお母さんなぞがわかるものではない、といった調子で、聖人の母に対する態度とは雲泥の相違を読んだのを忘れないでおる。

事実、自分の身近かな人を教化折伏するということは、まったくむずかしい。教化折伏する機会は沢山あるが、自分の修行とか実行とかが、折伏することと一致しないことを身近かな人は知っているのである。それで、折伏の効果があがらないともいえる。

大変に強信な信者の人の子孫が、少しも信心しないなんということとは、一寸も不思議でない世の中である。いくらでもその例がある。これは、どういうわけであろうか。

他人を教化するにいがしく、自分の子供を教化する隙がないともいえる。いや、そのうちに、自分の境地を子供がわかってくれるだろうという甘い考えもある。子供は子供で、いくら父親があんなことをいっても自分の行いはどうだ、なんて考えることもある。極端にいうと、お寺にあんなに御供養するなら、俺の小使いをもう少し増やしてくれたらよいではないかと考える。あんなに信心心と他人を教化することが大切なことなら、もう少し自分のお母さんや、自分に、やさしくしてくれたらどんなによいだろうと思っている。

父が母を大切にす。母が父を大切にす。この行為は子供を感動させるのだが、日本人の父

母は、子供の前では、どういう訳か、その反対なことを平気で行っている。子供はそんなことはわからないから、父をにくむと同時に、そんなに毎日毎日がみがみいわれてへいへいっている母親を、けいべつするということになるのである。

信心していても、いつていることと行っていることが別では、子供も信心はしない。信心をしているだけのことがあり、子供が多少でもうなずければ、子供は信心をする気になるであろう。むずかしいことだが、大いに注意しなければならないと思う。

信心をする人は、反省をしなければ信心したくないが、いってもよい。

近頃は、親の方が子供に文句をいうのを遠慮しておるといったような世の中で、本当に困ったと思つているのだから、聖人の孝養觀をのべておくのもこの際無駄ではないと思う。

「孝と申すは高なり天高けれども孝よりも高からずまた孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず聖賢の二類は孝の家より出でたりいかに況や仏法を学せん人・知恩報恩なかるべしや」（全集一九二ページ）という開目抄の聖訓は誰でも知るところである。

「世尊と申す尊の一字を高と申す高と申す一字は又孝と訓ずるなり、一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊と号し奉る」（法蓮抄全集一〇四六ページ）とある。

お釈迦さまは孝養では第一の人であるから、世尊すなわち仏さまというのだと教えておる。

仏は三十二相八十種好を具するというが、三十二相の中で最勝の相を無見頂相というのであ

る。

優婆塞戒經相業品に「一切世間の所有の福德は、如来の一毛の功德に及ばず。如来の一切の毛孔の功德は、一好の功德に如かず。八十種好の功德を集合すとも、一相の功德に及ばず、一切の功德は、白毫相の功德にしかず、白毫相の功德は、また無見頂相の功德に及ぶことを得ず」とある。——大智度論第四では白毫相を最勝とする。

さて、この無見頂相というのは仏が父母に孝養した報いによつて得たところの相であるといふのだから、いかに父母に孝養することが大切であるかわかるであらう。俗にいう、仏さまの頭のとつぺんは、誰もみたことがないというのが、この無見頂相である。誰もみたことがないのが常である。釈尊在世中において、もつとも通力がすぐれたといわれるバラ門教中の竹杖外道が、釈尊の頭のとつぺんをのぞいてみたいと思つた。

頭のとつぺんをのぞいてみるのには、その高さがわからなければならない。俗に、釈尊の身長は一丈六尺というのであるが、竹杖外道はそれは為にする宣伝であると常に疑つていたのである。そこで一丈六尺の竹の杖をもつていつて釈尊をはかるうとしたところが、何時はかつてみても、丈六の竹杖が、不思議にも、釈尊のステッキぐらいにみえるのである。すなわち丈端において一

丈六尺を出過すと書いてある。はかる度毎に、仏身はますますたかくなって、よく、その実をはかることができず、ついに杖を投げて去ったといわれる。

懷調世界の思惟華仏の弟子たる、応持菩薩が釈尊の御身をはかろうとした話もある。すなわち、釈尊がある時、ハラナ国に布教に行かれたが、この時、応持菩薩が、このシャバ世界にきて、釈尊のところにもうでて、仏の御足を礼拝して、めぐること千辺もしたが、釈尊の御身の長さをはかりたくなってしまうた。そこで、応持菩薩は神通力をもつて、身を変ずること三百三十三万里の高さになって、仏の無見頂相をみようとしたところが、あにはからんや、釈尊の身の高さは五百四十三兆核二億里であつたという。女へんに亥と書いてカイと読む。今はこんな字はないが、カイとは数の極まるところを核（カイ）という万々なりとある。十兆を経といい十経を核というとある。何故こんなことをいうかという、昔は億とか兆とかは、一生涯にあまりぶつからない計数の觀念だと思つていたのに、最近では国家の予算が一兆というのだから、この分で行くと、後十年もたてば日本国家の予算も一核ぐらいになるかも知らないので、わざわざ核の字の講釈を試してみた。

さて、釈尊は、この時、神通力をもつて、応持菩薩をして、もつともつと上の方へ引きあげ、百億恒沙（恒沙とは印度の恒河の砂の意味で、無数無量の大数を表わす）の世界を通りすぎて、蓮華莊嚴という世界に應持菩薩を至らしめたが、まだまだ応持菩薩は釈尊のいただきをみることに

ができなかつた。そこで、蓮華莊嚴世界の仏さまである蓮華仏に、応持菩薩が、釈尊のいただきはどこまでいったならみることができるとしようかと、問うたところが、蓮華仏は、さらにこれより恒沙劫（劫も数の無量を表わし種々な説明がある。一説をあげれば、方四十里の石あり、三年に一度天女が舞い下りて、羽衣でさあつとなでる。そしてその石がなくなつた時を一劫という。また、梵天の一日はすなわち人間の四億三千二百万年を一劫という）をすぎても、仏のいただきはみることが出来ないといわれたとある。

竹杖外道の話も、応持菩薩の話も、無見頂相とはいかなるものかを説明して、父母の孝養がもつとも大切であり、父母の孝養を忘れたる、仏道修行も信心もないのだということをお教えているのである。

故に、法蓮抄には「釈尊塵点劫の間（塵点劫とはこれも数量を表わす。たとえば、大千世界をくだいてみじんとなし人間の百年に一塵をとつて、とりつくすのを一劫という。別説もあるが略す）修行して、仏にならんと、はげみしことは何ごとぞ。孝養のことなり」とあつて、仏道修行の空極は孝養にあるのである。

聖人においても孝養の自信たるや釈尊にゆずるものではない。すなわち「教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候経文なり（略）日蓮が心中に第一と思ふ法門なり、父母に御孝養の志あらん人びとは法華経を贈り給うべし」と言われている。日蓮は日本第一の法華経の行者なりといわ

れておる。法華經の行者はまた日本第一の孝養のものでなければならぬ。なぜならば、法華經は内典の孝經であるといわれておるではないか。

經文にも「若し父母に信なくんば、教えて信ぜしめよ、戒なくんば戒をあたえよ、きかずんば、きかしめよ」（父母恩難報經）とあるが、以上をもつてしても、聖人の父母がまつ先に、聖人の御信者になつた因縁がうなずけると思うのである。

これ程聖人が思つておられた慈母が、文永四年八月十五日亡くなられたのである。

聖人は慈母の墓の側に庵を結んで、一百日間、法華經を讀誦して御報恩申し上げたといわれる。

出家なればいたしかたないが、六十一年の生涯中、母親の許にあつたのは、わずかに十二年間である。鎌倉にいつてからの聖人の噂で、善い噂を母はきいたことはあるまい、そして最後に自分の息子は、伊豆の伊東に流されてしまったのである。それでも聖人の母は、聖人への信頼を失わなかつた。しかし、聖人は母親に心配のみかけて、よきたよりを生涯中きかせなかつたことを心痛されたと思うのである。聖人の孝養を以上のべてみたが、聖人はなお孝養たりずとなして、「日蓮が母存生しておわせしに、仰せ候いし事をも、余りにそむきて候いしかば、今おくれ参らせ候うが、あながちに、くやく覚え候えば、一代聖教を考えて、母の孝養をつかまつらんと存じ候」

と御自身でいわれておる。

蒙古国書

一

文永五年、しかも正月一日驚天動地のことが日本国に起つた。とはいってもこの日本国にとつての、驚天動地の出来事は、すでに九か年も前に、聖人が立正安国論に予言したところである。すなわち蒙古の国書が九州の太宰府に到着したのである。

日本国にとつては、突然な出来事かも知れないが、立正安国論の結論からいえば当然な結果であり、世界の状況からいえば、必然の出来事だったことを知らなければならぬ。

安国論の結論はたびたびふれたことだからここではそれにふれず、今は蒙古の国書が到着したのは世界状況からいえば必然だということについてのべてみたい。

ここで面白いことは文永五年は聖人四十七歳の時であるが、蒙古はその四十七年間に史上空前の大帝国をアジアと欧州とに建国して、鎧袖一触日本などは、物の数ならずとやってきたこ

とだ。

閏の正月十八日に太宰府は蒙古の国書を幕府にいたした。二月七日、鎌倉幕府はこれを京都の朝廷におくつた。これは批評すれば蒙古の使節に対して時をかせぐ方法であり、また、朝廷に對する大きな警告でもあつたらう。

朝廷では後嵯峨上皇が来年は御宝算五十歳になるというので、そのお祝の儀式のために、文永五年は正月早々から、舞樂の稽古に宮中をあげての大騒ぎであつた。

「樂所はじめ儀式ば内裏にぞありける。試樂二十三日と聞えし……唐織物のさくらの狩衣、紫のこきうすきにて桜を織れり、赤地の錦のうはぎ、紅のにほいの三衣、おなじひとへ、しじらの薄色の指貫、人よりはすこしねびたりしも、あな清げと見えたり」(増鏡)

まあこんな具合のところ、「兵を用いるに至る、それいずれか好む所、王それこれをはかれ」と、大蒙古国皇帝書を日本国王に奉つるときたのだから、晴天のへきれきといふところである。

未萌(いまだ事のきざさざるの意)を知る聖人というが、この蒙古のきたることを九か年前の文応元年の、立正安国論中に警告を發して、幕府をいさめたのが、日蓮聖人であることを忘れてはならない。しかも文応元年西暦一二六〇年こそ、今大蒙古国皇帝書を日本国王に奉つるといふ当人たるクビライが、実権をにぎつて、蒙古国王の第五代元の世祖になつた年であるとは、まこ

とに不思議の文字につきてはなないか。

聖人とは未萌を知ることだと、日蓮聖人が自らいわれておる。

これについても思い出すのは、つい二か月前の十月の日ソ交渉の成立の後味の悪さ。

日ソ交渉が成立したかと思つたら、次の日に、ハンガリーのブタペストで反ソ運動が勃発したではないか。もう少しねばつたら、ソ連はポーランドやハンガリヤ問題で苦しみ、さらに日本に譲歩したのではないかと考えるのは、あながち素人政治談でもあるまい。

日ソ交渉になつた時、すでに、ポーランドのボスナン暴動の連鎖反応たるハンガリヤ反ソ動乱が起りつつあつたのだ。

鳩山さんや河野さんに徳があつたら、そこがどうにかなつて、国のためになるような、もつと有利な条約が結ばれたに違いない。徳のある人に政治をやつてもらわねば、国中が損をすることになる。

大胆にもフルシチョフは河野さんに「ハンガリヤに行かねばならんから二、三日後にしてくれ」といったが、河野さんも強情で「どうしても二十日に出発だ。十九日に調印したい」といったそうだが、ああ残念なことをしたものだ。徳を積んだ人に政治をやらせたい。国民がとんでもない損をする。徳を積む方法はなにかといえ、信心をせよということにつきては。聖人は法華経は徳の本であるといわれておる。

蒙古の第一回の襲来は文永十一年十月だから、聖人が、立正安国論を献策してから十五年後の出来事となる。われわれには明日の天気もわからないのが普通だが、未萌を知るを聖人というが、われわれは聖人の聖人たるゆえんをここに知るのである。だが、感心するのはまだ早い。十五年後の蒙古襲来（立正安国論）を予言したの、五十年後の南北朝分裂を（法華取要抄）予言したのと騒ぐのは、身延日蓮宗や、普通の日蓮宗だと知らねばならない。

「日蓮が慈悲広大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までも流るべし」（全集三二九ページ）といわれて、末法万年を予告されておることを忘れてはならない。すなわち広宣流布を予告されておるといふことを忘れてはならない。

わが日蓮正宗では、日蓮大聖人さまと申し上げ、われわれの直接の仏様と仰いでおるのであるが、末法万年の外未来までも流るべしといわれた、そのものは、大石寺御奉安殿（現在は正本堂）に鎮座するところの戒壇の御本尊だと心得て、この戒壇の御本尊こそ、大聖人の聖人たるゆえんであると拝すべきである。

いまなお、富山県の地方では、赤ん坊があまり泣くと「蒙古がくるぞ」といっておどかさということをきいたが、鎌倉時代に、わが日本国民をして、驚天動地たらしめた蒙古とはいかなる国であろうか。

蒙古（勇敢無畏の意であるという）国を興したのはジンギスカン（王中の正の意）といわれる

テムジンである。頼朝が伊豆に流された次の年、応保二年の西暦一一六一年、黒竜江の上流オオノン河畔の一酋長の子に生まれたが、西暦一二〇六年、四十五歳の時に、現在の蒙古国を統一して即位の式をあげて、ジンギスカン（元の太祖）と称したのである。

天皇が御三方も臣下から島流しにされるといふ空前絶後の承久の乱で、日本中が大騒ぎをしておった承久年間に、ジンギスカンは大遠征の軍を起こした。南滿北支を侵略し、終りには中央アジアを平定し、さらに裏海の西をまわり、カウカサス山脈を越えて欧州に突進し、南方ロシア及び西部アジアを略定したのである。

ジンギスカンの遠征は西暦一二一九年（承久元年）より西暦一二二五年（嘉祿元年）―聖人四歳の時にいたる六か年間に第一回の遠征であった。

彼は一生涯に征服し九大領土を四つに分けて、四人の息子に分治させた。長子ヂョラは裏海、黒海の北部からロシアの南部にいたる土地を領させ「欽察国」と称し、二子サガタイは天山南路地方を領せしめて「サガタイ国」第三子オゴタイは黒河以北から黒竜江にいたる蒙古本部の地を領せしめ、第四子トウライはペルシャ地方を領治せしめてイラン国と称したのである。

かくて、ジンギスカンは六十六歳で亡くなったが、第三子オゴタイが後をついで太宗と号し、西暦一二三五年、嘉禎元年、聖人十四歳で稚児として千光山清澄寺にあつた時、カラコルムに大集會を開いて、大規模な西欧遠征の議を決したのである。この遠征は聖人が鎌倉に遊學されて二

十歳になった仁治二年の十一月（西曆一二四一年）までつづいたのであった。

四百匹の羊を持つ人は、一匹の羊を持つ人より満足しておらない、とはよくいわれることであるが、太宗の心理もまたそれであつたのだろう。

太宗は兄ジョラの子バツを総指揮官とし、副将にはスブダイ、子供のクユ、末弟のトウライの子モウカなどがあたり、五十万の大軍を堂々進発せしめたのである。

ペルシヤ方面の派遣軍が、アルメニヤ地方を劫掠しつつあるのと相呼応して、一二三七年（嘉禎三年、聖人十六歳で清澄寺に受戒して、名を蓮長と改めた年）の冬に、バスを総指揮官とする大軍は、ロシアの南部ヴォルガ河畔に殺到し、翌年には新設の都市モスクワを焼きウラヂミルを陥れ、一二四〇年（仁治元年、聖人十九歳で鎌倉に遊学中）にはついにキエフを陥れたのである。

かくして、ヨーロッパにせめ入つた蒙古軍は、その軍を二分して、一軍はポーランドからシレジア地方になだれこみ、いたるところで、欧州諸侯の城を攻め亡ぼし、一二四一年（仁治二年、聖人鎌倉の遊学を終つて、叡山に遊学せんとした前年）には、リーグニッツに近い平野のワールスタットにおいて、シレジア侯ヘンリーの旗下に馳せ参じた、オランダ、ゲルマンの諸侯の連合軍三十万と、史上に有名なる大合戦を行い、決戦の末ついに大勝利を占めたのである。

一方バツのひきいる本軍は、カルパシヤの山脈を越えて、旗鼓堂々とハンガリーに入り、いたるところの攻略をほしいままにして、疾風迅雷のごとく首都ブタペストにせまった。(ソ連軍のブタペスト侵入を聞く昨今、うたた感慨無量のものがあるではないか)かくしてハンガリー全土は剽悍なる蒙古軍の鉄蹄にじゅうりんされないところがないほどになった。

そのうち、ポーランド方面を攻略した別軍も本軍に合し、さらにダユユーブ河の凍るのをまつて、グランの市を陥れ、まさに、イタリーの美都ベニスをあらさんとしたのであった。しかるに、この年十一月に太宗は崩御した。この報をきいて、欧亜二大陸をあらしまおったさすがの蒙古軍も、大潮のひくようにひき上げたのであった。

かくて第二回欧州遠征軍は、ロシヤからポーランドに入り、ドイツ、ハンガリヤ、オーストリア諸国を脅かし、またイタリヤの一部やバルカン半島をも騒がせ、ほとんど全欧州を震撼せしめたのである。彼等の過ぎるところは、必らず掠奪をほしいままにし、家屋人畜にいたるまで莫大の損害をあたえ、裏海からインドス海にいたる数千里の地は、彼等の軍勢のために、前後五年間ふみ荒らされ、その旧態に回復するには、優に五百年間にわたる、大努力を要するであろうといわれたのである。

太宗の後を受けて蒙古帝国の支配者となつたのは定宗であるが、彼の即位の式には支那、朝鮮、満州はもとよりビルマ、交趾支那、ジャバ、スマトラ、シヤム等々の近国はもちろん、フラ

ンス、ロシヤ、イタリヤなどの使節が参列し、ことにローマ法王は、特使を派して、定宗の前途を祝福し、かつ今後平和をはかるべきことを勧めた程である。定宗の後、憲宗をへて、第五代がクビライの代となり、北京に都を定めて国号を元と称したのが一二六四年で、文永元年聖人四十三歳の時で、伊豆伊東流罪赦免になった翌年である。このクビライが元の世祖であり、文永五年正月一日に国書をわが国に発した当の本人である。

一一

文永五年正月一日に日本国にとつて、驚天動地のことが起きたと、前に書いた。すなわち蒙古の国書が九州の太宰府に到着したのである。

太宰府は九州本線二日市駅の東方にあつて、現在は太宰府町といつておる。支那大陸や朝鮮方面の外交及び国防上の重要な仕事をしたのが太宰府である。当時の支那朝鮮方面の外交というものは、歴史にうといわれわれが想像するところと違つて、なかなか活潑なものがめつた。九州は元来朝鮮や支那に近いところから昔から交渉があつたことはもちろんだが鎌倉時代にも相当の交渉があつたのである。

朝鮮についていえば、九州の辺民が朝鮮との交易といつわつて沿岸をあらすので、朝鮮（当時

は高麗国)よりわが方の船舶は年に一回二艘と申し込んできておる。これは弘長三年(文永五年より六年前)のことである。ところがこの年に対馬の漁民が朝鮮の態神県勿島に交易の船をかすめとり、椽島にあらわれて掠奪をやつたので、四月に高麗から嚴重な抗議がきた。すなわち、禁札の厳守と掠奪品の還付である。わが方はこれに対して、その求めに応じて、米息麦牛皮をかえしたとある。昭和の昨今では、こちらが掠奪される方の側になっておるが、掠奪されるされないは国力の相違によるのか知らないが、彼我の交渉は複雑であつたに違いない。あまり九州沿岸の住民が、朝鮮の沿岸をあらすので、たまりかねて、朝鮮が蒙古に頼んで、ついに日本征伐になつたのであるという説さえあるのである。

支那についていえば、これはその交易交渉は朝鮮より古いことはもちろんで、鎌倉時代は宋との貿易が大変に盛んであつた。日宋貿易を盛んにしたのは平清盛であつて、宋時代の貿易は非常に自由な貿易で、日本商船も宋に行くし、宋国の商船も日本に来るといつた調子で後の明時代のやうに、明国商船の日本に渡航することを禁じて、日本商船のみ寧波港に入港を許可した時代とは大變な相違である。平清盛時代の左大臣藤原頼長が、送つてくれた書籍の代金として、沙金を宋の商人に送つた時、宋の周良史という者が、日本の爵位を望んだという話がある。

周良史は父は宋人で母は日本人である。これは仁平年間(西暦一二五一年)のことであるから、近松の国性爺合戦(父は明人、母は日本人)が書かれた五百年前の話である。周良史の父が

貿易商人でしばしば日本にきておるうちに、日本婦人を妻として、生まれたのが周良史なのである。

平清盛は太宰府において、帥（太宰府の長官）の輔佐官である大貳の役をしておつて、宋国と貿易するの利をまのあたりみておつたので、天下をとると、兵庫の築港を完成して日宋貿易を盛んにしたのである。

この時代の日本商船は寧波港（宋の都は杭州にあつて、寧波港は東京と横浜の関係みたいであつた）に入港したのだが、渡航は春と秋との潮のよい時だけに限られておつたから、日本商人も半年ぐらゐは寧波港に滞在するのを常とし、また宋人も日本におれば博多に半年は滞在するといふ状態であつた。一航海で多い時は千人、少ない時でも三、四百人の商人が往復したのであるから、宋代には数百人の日本商人が寧波港に滞在したのである。ある時にはこの日本商人が、宋人との間に紛争を起して、日本商船の寧波港入港禁止令が出た程であつた。

即ち、日本商人の揚栄陳七太の二人が張本人となり、宋人との間に大喧嘩をした。これは喧嘩とはいえない程の出来事で、遂に杭州の中央政府にまできこえてしまい、杭州の中央政府は太宰府に日本商人の在留を禁じ、事後日本商船の宋国渡航を禁止するという通達をよこしたのである。

太宰府では日本商船の渡航禁止に驚き、二人の者は厳罰に処するから、日本商船の渡航禁止を

解除してもらいたいと申し込んだのである。渡航禁止で一番打撃を蒙むるのは、博多の商人であるから、太宰府の役人も一生懸命で交渉したのである。しかるに、博多の商人が打撃をこうむるように、宋国の商人も一打撃であったから、この渡航禁止令は事実上はながつぎしなかつたとみえる。しかし、商船の数の制限を宋国から申し込まれ、太宰府に、日本商船の渡航数は年度十艘に制限すると、宋政府から通告があった。これは建長六年（文永五年より十五年前、聖人の宗旨建立は建長五年）である。

以上のように支那との交渉は鎌倉時代にはなかなか活撥であつたことがうなずける。

さて宋の国は、蒙古第五代のクビライの時に亡ぼされてしまったから、宋との交渉はなくなり、これに代つてクビライが現われたわけである。

クビライは蒙古の初代テムジンと同様に、英雄的な人物で、機会あるごとに侵略の手をのびして、安南から南洋諸国まで平定して、その命令にそむくものはたちまちに征服の剣をとつて、当時、世界中その武威に抗敵するものはいなかつた程である。

いかなる動機で日本征伐を企てたかという、高麗の亡命客でチヨウイという人物が日本征伐をすすめたといわれる。チヨウイは高麗の自分の国を悪口して、日本の文物にみるべきものあつて、極東の宝庫であるとのべて、クビライの野心をあおつたといわれる。マルコポーロの説によると、クビライが日本に使者を送つたのは日本の富に垂涎したという。

一説によると、クビライが日本に使者をよこしたのは、元の時代になると、宋時代のごとき貿易がとだえてしまったので、そのとだえた貿易を促進するために、使者をよこしたのであるという説もある。しかしこれは、クビライが日本だけを征服から除外する筈はないから、妥当とは受けとれない。支那人（明人の史家）の書いたものをみると、寧波港に渡航する日本商船が乱暴をはたらくので、クビライは使を派遣してこれをさとしたが、日本がこれに応じないので、文永弘安の役になったと書いておるが、これはクビライの野心をうまく脚色して書いたもので、これは支那人が書いておるといっただけで、その通りだとは承知はできない。ただし鎌倉の幕府は、宋が亡んで元になったことには好意をもっていなかったのは事実である。

日本商船の入航する寧波港は、建治二年に蒙古がおとし入れたのであるから、文永五年から九か年後なので、元の時代になったといっても、寧波港に日本商船は入航しておった。ちなみにいうと、支那の茶と絹が日本に入る貿易品の主なるものであった。

鎌倉の建長寺の住職道隆は宋国人であつて、三十三歳の時に、商船にのつてわが国にきたり太宰府についた。時に寛元四年で聖人は叡山留学中であつた。北条時頼は建長五年に建長寺が落成すると、この宋僧を呼んで建長寺の開山としたのである。このことをみても、わが国がいかに当時親宋的であつたかがわかる。元がその宋国を亡ぼしたのであるから、鎌倉幕府は、元に対しては、好感のもてなかつたのは当然である。

文永五年正月一日に高麗国王の使者バンブが、蒙古の国書を筑前の太宰府に招来したのであるが、実はこの工作は文永三年から続けられていたのである。

クビライは、当時の国際の常道をふんで、高麗国を通じて、わが日本に一書をいたした。文永三年の蒙古の国使コクテキ、同副使インコウは高麗国の使者クンピ、副使キンサンを従えて日本に向けて出発したのであるが、海があれて日本に来ることならず、途中から引きかえしてしまつたのである。そこで、高蒙は、文永四年の正月にクンピを蒙古使者のコクテキに従わせて、蒙古に行きクビライに報告した。とてもとても海があれてゆけません。大洋万里風濤天をけるを見る云々と上奏文にある。しかも彼の日本人たるや頑固で礼儀などない国民で、到底大国が通好するような国ではありませんと申し上げて、仲介の労役をとるのを逃がれようとしたが、クビライはそんな逃げ口上で日本征伐の野望をすてようとはしなかつた。

クビライは国使コクテキ、インコウの二人を再び高麗に派遣して、高麗国王の不誠意を難詰したのであつた。そこで、高麗王はやむを得ず、文永四年九月二十三日、バンブを国使として、蒙古及び高麗の国書をわが国にもたらさせるために出発させたのである。この時、蒙古の使節を同行せしめなかつたのは、自分の国の都合のよいように、日本に交渉をするためであつたと思われる

る。

ハンプは十一月対馬に着き、翌文永五年正月一日に太宰府に到着して、蒙古国書及び高麗国副書を差し出したのである。

正月の一日といえは、昔からめでたいことときまつておるのに、蒙古の国書が、その正月一日に提出されたとは、日本国をあげての大騒動になったのは当然である。

三

「大蒙古国皇帝が、一書を日本国皇帝に奉つる。昔から、小国が相ならんでいた際でも、互に好を結び、親睦を旨とした。況んや、大蒙古皇帝が、天の命を受けて、支那を統一し、位に就いたので、四方の国々は、我が国威をおそれ、徳をしたう国々の数は数えることが出来ない程である。高麗国は我が蒙古の東藩であるが、度々、戦乱を重ねて、あわれむべき状態に陥いつたから、種々と労をとつてやつた。故に我が蒙古国と高麗国とは、義に於ては君臣であるが、歛に於ては父子の如くだ。高麗国は蒙古の国の東藩である、日本はその高麗国に近く、開国以来支那の国と通好しておるのに、蒙古国となつたのに何故貢物を、我に呈しないのか。恐らく、私の即位を知らぬからであると思う。それ故、念のために告げる。聖人は四海を以て家とする。好みを

通じないと、一家の道理にそむくわけである。貴国が早く貢物を届ければそれでよろしいが、若しそうしなければ、止かを得ず、戦争となるかもしれない、その辺を考えて、適當の処置をとるのがよろしい」

以上が文永五年正月一日、ハンプが太宰府にさし出した、蒙古の国書である。

この国書が鎌倉の幕府に到着したのは、閏の正月十八日であった。幕府はこれを二月七日に、京都の朝廷に奏上した。

八日、朝廷では、元老會議をひらき、前関白二条良実、同一条実経、関白近衛基平、前大臣徳大寺実基、前左大臣洞院実雄等々を召し出して、各自の意見をちようされ、會議は連日にわたり、容易に決定をみなかった。おそらく、その會議の主題は、内容の検討はもちろんだが、この蒙古の国書に返書をやるかやらぬかであったに違いない。

この年、すなわち文永五年（一二六八年）よりさかのぼる、九十五年前の延久五年（一一〇七三年）、支那は当時、宋の時代であったが、その宋の皇帝より、わが白河天皇に、自筆の文書と贈物とが贈られたことがあった。

この宋皇帝の文書と贈物が、支那より日本の朝廷に到着したのは、承保二年（一一〇七五年）年の正月であったが、この品物を受くべきや否やについて、連日會議がひらかれ、その年の十月になつてもなお評議がつづけられたということである。それは、宋皇帝の自筆の書中に「廻賜日本

国」の文字があつたからだ。

朝廷では、廻賜なる語について、いろいろ頭を痛めた。日本国の名分上、廻賜なる語をいかに解釈すべきかにあつた。廻賜ということばをいかに解釈するかについて、儒家、有識家、陰陽師等について論文を提出させ、一度でことたらず、二度も論文を諸家から募集して評議したという。これでは、正月から十月ぐらいまでかかるのは当然である。さて、その結果は答札を出すことになつた。答札はだすことになつたが、答札に持参する品物をなんにするか、これがまた問題となり翌年の六月に、品物の評議を行つたが、これまた、それこそ、お公卿さん達の話で、ああでもないこうでもないといひあつてきまらず、次の年の承暦元年（一〇七七年）五月になつて、ようやく、宋国に持参すべき答札の品物が決定したのである。

朝廷に宋国の国書と贈物がきて、これに答札すべきや、持参すべき品物はなんにするか、ということに三年間もつひやしておる。さて、三年たつて、ようやく答札の返書も出来、品物もち、答札使として僧侶の仲回が宋国に出発したのである。

仲回は宋国の都、落陽に入ったが、宋の朝廷に、三年もかかつてこしらえた、日本の国書も贈物も、献上することは出来なかつた。何故、宋の朝廷が日本の国書を受けとらなかつたかという、日本の国書が、宋に対して対等国の態度であつたというのがその理由なのであつた。

鳥羽天皇の元永元年（一一一八年）といえば、前述から四十年後のことであるが、やはり、宋

の徽宗皇帝が日本に国書をいたしたことがあるが、その書中では、はつきりと日本国を東夷と呼び、よろしく事大（力の強大なる方につかえること）の誠をいたせとあったので、これに返書するか、しないかについては、評議がながくつづいたが、決することなく、うやむやにすぎってしまった。

以上のように、朝廷においては、わが日本は東海の君子国として太平洋戦争当時日本人が、日本国にもついていたような、万邦無比の国として威張っていたのだが、隣国の支那は自己の国をみることに、日本どころではなく、支那以外は全部えびすとみなしていたのだから、日本もその例にもれるところはなかったのである。

平清盛は政権を握ると、宋国と貿易することの利益を知っておったので、兵庫の港を築港し、音戸の瀬戸を修築して、船舶の往來を便にし、宋国人のわれにきたるものは、非常に多くなったのである。

高倉天皇嘉応二年（一一七〇年）に、後白河法皇が、摂津の福原にある、平清盛の別荘に行幸されて宋国人をみられたとある。これには当時の公卿は大変におどろき、藤原兼実は日記に、わが朝廷喜以来未曾有のことで、これ天魔のわざかと嘆いたとある。これが八十年たつと、宋国人

の僧侶が、鎌倉建長寺の住職になったのだから、時代の推移もあるが、いかに宋国との往復が盛んであったかがわかるのである。

承安二年（一一七三年）には寧波港所在地の明州の役人から贈物とともに一書をいたしたが、一通は日本国王に賜わるとあり、一通は太政大臣に送るとあった。これも朝廷において、公卿達が、賜うというがごとき字は、わが国体の權威を傷つけるものである、品物は返却し、返書にも及ばぬと公卿の説は一致し、儒者の大家、清原頼業は大いに憤慨して、返却を主張したということである。

前述のごとき尊大な宋国であるから、日本国王に贈物をしたり、国書をいたすなぞ到底あるべきことではなく、これは明州の一地方公使が、勝手に日本国王に賜わるとやった仕事であることなど、充分承知の平清盛は、公卿の意見などには耳もかたむけなかつた。そして、日宋貿易の莫大な利益を忘れず、ひたすら貿易振興を願う平清盛は、宋国に国書の返礼することを朝廷に申し出たのである。すなわち、承安三年三月末に返牒を送ることを決定し、後白河法皇より贈物を宋の使者に渡され、清盛に勅して、宋国に返牒を送らしめたのである。

以上のようなわけで、朝廷も隣国支那からの国書はたびたびうけとっておるので、先例のあることであるが、万邦無比と思いきんでおるわが国体の上から、返書を出す時は相当しんちように考えていたことは申すまでもない。

蒙古の国書についても同様である。だが、宋国からきた承保二年の国書のごとく、三年間も評議をつづけておるといふがごとき、前代未聞のゆうちようさを続けておることは出来なかつた。

というのもこの蒙古国書については、その噂が意外にも早く広がり、すでに正月十日頃には、蒙古の国が、日本国をせめてくるぞという評判が、民間にたつ程になつていたのである。

このような評判が民間に立つようになっては、朝廷も長いこと評議をしておる暇がなかつた。それでも即決したのではない。いわゆるお公卿さん流儀で、儒者や有識家や陰陽師等にいろいろ勘文をつのり蒙古の国書について評議し、その結果が、劈頭に掲げた、蒙古の国書の文字が無礼であるときまり、返書はしないことになつたのである。四月に、中御門経任は上皇の院旨を受けて、鎌倉幕府に使用して朝議を申しつけたのである。

しかし、幕府は、京都の公卿さんの評議などはあてにならず、これは、必らず戦争となると思つたのであろう。二月の二十七日には、讃岐の国の御家人に、蒙古の国が日本国を攻めるかもしれないから、用心をしなければならぬとの布告を出し、九州沿岸の防備をかたくする命令を出しておつた。

かくて、蒙古の国書には返書を与えないことにきまり、従つて贈物をつつかえし、高麗の使者ハンブは五か月間、太宰府から一步もでることなく、四月（一説には七月ともいふ）ついに目的を達せず、帰国したのである。

当時の人びとは、蒙古の国をどう思っておったかを、五代帝王物語（後堀河天皇より龜山天皇に至る五代間のことを記す）によつて記すると、

「蒙古国、もとはキツタンの所屬、ダツタン国なり、年頃キツタン以下の近辺の諸国を打ちとる、大宋国も三百余州のうち、大略うちとられて、僅に六十余州残り、高麗も同じくせめ落とされて、臣として、蒙古につかうよし牒状にもせたり」とある。

十一通の手紙

一

文永五年、築紫路の楠の若芽が花かと思う程、あざやかにもえる頃、蒙古の使者ハンブは前述のごとく返書ももらえず、太宰府から一步もでることなくして帰国したのである。

ハンブなる使者が太宰府から一步も出なくとも、蒙古襲来のうちわさは日本中にひろがっていた。

返書をあたえないということは、当然戦争をするということである。国民は眼の前がまっくらになったような気持であった。道を歩いても、家にいても、戦争になるという不安は消えない。時節を告げる草木は、人間にはお構いなく咲いたり散ったりしてゆくのに、人間だけが、不安な気持ですぎてゆかなければならない。

その中で、ただなぐさめになるのは子供の無心に遊ぶ姿であった。戦争になれば一番弱い子供

が、今は一番強い存在である。子供の遊ぶ姿をみておると、戦争の不安におののく自分の姿が恥ずかしくかった。蒙古来 蒙古来 文永五年の新緑は、国民一般になやましい初夏のみどりであった。

後嵯峨法皇は五十歳の賀宴を廃止され、四月十三日には、伊勢の大廟に勅使をたてて、蒙古来を告げるとともに大和にある神功皇后以下の七の御陵にも、国家存亡の急を報告し、ついで二社に国難の切迫を告げて御祈禱をつづけた。これに対し幕府は、蒙古の野心を早くからみてとり、蒙古の使者がまだ太宰府におるにもかかわらず、文永五年の二月には、讃岐の武將たちに対して、防備をかためるように命令をしておる程であった。

文永五年の三月五日、北条時宗の胆甕のごとしと、いまなおいつたえられる時宗が、十八歳で執権職になった。

時宗は時頼の子である。時頼は執権職を十年つづけたが、その在職中に幕制の刷新をやったことはもちろんだが、北条一族の権力を確立した。鎌倉幕府には評定衆というものがあつたことは有名である。

評定衆は聖人十四歳の嘉禄元年の十一月に設置されて政所が財務事務を、間注所が裁判事務を扱ったのに対し、評定衆はその上に立って、諸政務の最終的決定と、政治的諸策の決定に当たっておつた。故に評定衆に加えられた人びとば、政所に出任して、執権や連署と共に重要政務の評

議に当たつたのである。幕府が公平であつたと評されるのは、評定衆があつたからである。ところが、時頼の時代になると、この公式の評定衆とは別に、時頼の私邸において、秘密会議が開かれて、評定衆制度を事実的に無視する傾向が生まれたのである。これは、この時代になると幕府創立の元老はとつくに死亡し、北条氏以外の三浦氏など有力者も亡ぼしてしまつたので、北条一族の勢力が確立されたといつてさしつかえなかつたからである。

時頼は、最明寺で出家し、嫡子時宗が幼少なので、執権職を一族中の長時にゆづつたが、最明寺入道と名乗つて、政治をみることに八か年つづいた。長時の後、政村をへて文永五年三月五日、政村が連署となり時宗が執権職となつたのである。

時宗の時代には、すでに北条一族の勢力は確立して、専制的色彩がこくなつてきていた。このことは、蒙古襲来という国難に処するためには、だんこたる処置を容易にとることが出来たので大変都合がよかつたのである。だがしかし、この専制にわざわざいされて、長時の時代に、聖人が歴史にも未曾有な一回の取り調べもなく、伊東に流罪というようなことも起つたのである。

時宗は三月に執権職になると、廃止されていた引付衆を四月に復活した。引付衆というのは、評定衆を補佐して、訴訟や公事をつかさどる役で、外見は公正なる機関たる評定衆が強化されたようにみえるが、実はまったくそうではなかつた。時宗は、蒙古襲来の危機を利用して、従来の合議制を打ち破り、北条氏の専制を確立すべく、その私邸において、北条一門の人びとやその他

一部の要人をあつめて、「寄合」を政務決裁の実質的な機関となしつつあつたのである。この「寄合」で審議される事柄は、評定衆の新任、引付衆の異動といったような幕府の人事問題や、兵糧所返付の件などといった重要事項であつた。

時宗の時代には、評定衆は実質的最高決議機関たる地位はなくなつて、北条一門の専制体制を確立したのである。特に諸国の守護職などは北条一門の手中に集中され、蒙古襲来を機会にして九州、山陽、山陰にはそれが露骨に現われたのである。

以上のように時宗は、蒙古襲来ということを利用して、まったく北条氏一門の権力体制を確立させ、命令以下なんでも出来るような状態をつくり上げたのである。

この時に、聖人が時宗を相手にして、蒙古襲来という聖人が九か年も前に立正安国論に予言された予言の中をもつて、時宗にせまつたのである。時宗は蒙古襲来ということを利用して、自己の専制政治を確立したが、聖人は蒙古襲来という自己の予言の的中をもつて、いよいよ仏法上の信念をかためられた。時宗と聖人の間に、まさに一戦あるのは、理の当然ではないか。

「謹んで言上します。正月十八日に大蒙古国の牒状が到来しました。日蓮が九か年前に諸経の要文をあつめて、かんがえた立正安国論のごとく少しも違わず符合しました。未萌を知つたが故に、日蓮は聖人の一分に相当します。よつてこのことについて警告します。いそいで建長寺、寿福寺、極楽寺、多宝寺、浄光明寺、大仏殿等の御信仰をやめなさい。しがらざれば、四方よりせ

めきたります。すみやかに蒙古国を調伏して、わが国を安泰にしなければなりません。蒙古を調伏することは、日蓮に非ずんば出来ません。諫臣が国にあればその国は正しく、争子（父母の不善を諫める子供）家にあればその家は正しい、国家の安危は、政道の直否にあり、仏法の邪正は經文の明鏡によります。

この日本国は神国であります。神は非礼をうけません。天神七代、地神五代、その外諸天善神等は一乗を擁護する神様であつて、しかも、法華經をもつて食となし、正直をもつて力としています。法華徑にいわく、諸仏救世者、大神通に住して、衆生を悦ばしめんがための故に無量の神力を現すと、一乗をすててかえりみない国には善神は当然怒ります。仁王經には「一切の聖人がさる時には、七難必ず起る」とあります。呉王は伍子胥が言葉をきかずしてわが身を亡し、傑と紂の二王は竜と比という二人の臣下を失つて国位を亡ぼしました。今、日本国はまさに蒙古に奪われんとしています。歎かぬ人は一人もなく、驚かぬ者は一人もおりません。日蓮が申すことを御用いなければ、必ず後悔しますぞ。日蓮は法華經の御使いであります。經には「則ち如来の使、如来の所遣として、如来の事を行ず」とあります。この由を方々へ申し上げました。願わくば、一か所にあつまつて、御評議あつてしかるべきです。現在行つておるいろいろな御祈禱をやめて、貴下の御前に、諸宗を召し出し、仏法の正邪を決定して下さい。谷川の底の長松を知らざるは良匠の誤り、闇中の錦衣をいまだみざるは、愚人の失であります。印度、支那、日本の三国

において、阿闍世、陳隋、桓武の御代に仏法の邪正を分別したことがあります。これは決して日蓮が私曲（かたよりしてよこしまの意）ではありません。ひとえに、大忠をいだく故です。自分の身の為に申すのではなく神の為、君の為、国の為、一切衆生の為に言上します。

文永五年十月十一日

日蓮花押（全集一六九ページ）

これは聖人が、時宗にあたえた書である。もちろん、時宗に直接書をあたえることは出来ないから時の寺社奉行であった宿屋左衛門を通じて上奏した文書である。口語体にしたのは、読みやすくしようと思つて筆者がした。読者が直接聖人の御書を読むことを希望する。

ともかく、これが北条氏の専制政治を確立して、なんでも命令いつか出来る北条時宗に、蒙古襲来を前にして、聖人があたえた一言である。事が起らなければ、むしろ不思議である。

一一

「先年（九年前）現在の蒙古来の国難について考えた立正安国論の予冒が、符合したことについて、執権職北条時宗殿に一書を奉りました。

さて本年の正月十八日に、蒙古国より国書が、予言のごとく到来しました。この事実から考えますと、予言が的中したのですから、日蓮は、聖人の資格を一分そなえております。事実がそう

なつたのにもかかわらず、今もって何んのお尋ねもないので重ねて、諫状を呈します。

願うことは、邪宗の寺や邪宗の僧侶の御信仰をやめて、法華経に帰依することです。しからざれば後悔するような国難がくるぞと日蓮は断言します——以上の趣旨を本日十一か所に十一通の手紙を書いて、申し送りました。さだめしこのことについて御評議があることでございましょう。早く、公場にて諸宗との対決を望む、日蓮の本望をとげさせていたきたい。このことについては、ひとえに、あなたのご努力をお願い申します。十一通の手紙の宛名は、平左衛門尉殿の手紙に申し上げてあります。もつと詳細に申し上げたいが、執権職北条時宗殿に差し上げた、書面にのべてありますので省略します。執権職の御機嫌のよい折をみはからつて、御披露をお願い申します。

文永五年十月十一日

日蓮花押

宿屋入道殿

宿屋入道は、北条時頼、時宗の近侍の士であつて、「お側御用とりつぎ」の役の人であるといえる。立正安国論は、宿屋入道のはからいで、幕府に献上されたのである。この人は、聖人の竜の口の法難をまのあたりにみて、念仏より改宗した。その屋敷跡は、鎌倉長谷に光則寺として現存しておく。

「蒙古国の国書がきたことについて、執権職北条時宗殿に書面を出しました。

このことは、九か年前に、目薦が立正安国論に申したことに少しも違わず、符合しております。よつて、国難をうれうる心持を重ねての訴状をもつて申し上げます。

日蓮は、執権職北条時宗殿には諫暁の書面を送り、鎌倉の七大寺に向つては、破折の書をおくりました。貴殿——平左衛門尉頼綱——は、天下の大黒柱であり、万民の手足であります。蒙古来という国難にあたつて、国の存亡を、歎かずにはおられませんまい。恐れずにはいられますまい。一日でも早く亡国の原因たる、誇法の者を退治していただきたい。

妙法蓮華経というものは、ありとあらゆる仏さまの悟の内容であり、一切の神さまの御威光を養う食物であります。よつて妙法蓮華経を信仰するところには、三災七難などは起こるものではありません。しかるに、この妙法蓮華経を唱え、この妙法蓮華経を弘める日蓮を、幕府は、先年伊豆の伊東へ流罪になされました。大日天王等の諸神が罰を日本の国土に加えるのは当然であります。

昔、聖徳太子は十五歳の時に、物部守屋大連を誅して仏法をおこされ、藤原秀郷は、平の将門の乱を平げて、名を後世にまで伝えました。この先例にならつて、法華経の強敵たる北条氏一門

並びに日本国中の人びとの御帰依の寺僧を退治して、神々の擁護を蒙り、国家を安泰にみちびくべきであります。

現今の法律たる貞永式目をみますと、明らかに正しがらざるものを制止しております。今、日蓮が国難をうれうる正しい訴えを御採用ないというのは、これは式目の御起請文を破ることになります。これらの仔細をかいて諸方面に手紙を出しました。それは、北条時宗殿、宿屋入道殿、建長寺、寿福寺、極楽寺、大仏殿、長楽寺、多宝寺、浄光明寺、弥源太殿とこの手紙をいれて、十一か所であります。どうか、国難をうれうるのならば、十一か所の人びとが相談をして、至急に幕府の力をもつて、対決を日蓮とするというお許しの通知をいただきたく思います。

日蓮と諸宗の僧侶との、公場対決が許されるということになりますならば、それは、べんか下和のあらたまがみがかれて立派な玉となり、法王の髻（毛髪を頭上にあつめて束ねたところ）の中にかくされた珠が世にでるようなものであります。以上はまったく、日蓮自身のためにこれを中すのではありません。神の為、君の為、国の為、一切衆生の為に執権職北条時宗殿に書を呈した次第であります。

文永五年十月十一日

日蓮花押

平左衛門尉殿

平左衛門尉頼綱は、北条時宗の執権職の執事と侍所の次官たる所司を兼ねた人である。

侍所とは、鎌倉幕府にあつては、侍の進退宿衛、お供、弓、軍時には、軍奉行として機務にあらずかり、諸士を進退する権勢ははなはだ重いものである。侍所の長官は、別当と称して北条氏の世襲であり、次官が上述の所司である。北条氏の政務は評定制であつたが、最後の決定権は執権が握つておつた。その執権職の執事であるから、頼綱は政府と所司としての軍部の二大政権を握つており、しかも父祖三代これに任じた程である。聖人が、この手紙の中で「貴殿は天下の大黒柱であり、万民の手足である」といったのは、単なるお世辞ではなく、事実であつた。

この頼綱は、聖人を怨嫉した方では屈指の人物で、竜口法難や佐度の流罪にも相当な活躍をしておる。また日蓮正宗の信徒にとつても忘れえぬ人物である。すなわち熱原法難の主役たる熱原の神四郎等の三名を責め殺したのもこの頼綱である。次子の資宗をして、神四郎等三名を射ころさしておる。ついには、頼綱は自分の権勢に酔つて、次子の資宗を將軍にしようとはかり、皮肉にも自分の長男の宗綱に訴えられて、永仁元年（聖人滅後十二年）四月二十二日に父子とも殺されておる。訴えた長男宗綱は、父頼綱が運動して聖人を流した佐度島に流されておるのもなにかの因縁であらう。頼綱は聖人滅後十二年にして、怨嫉謗法によつて倒れたといふべきであらう。

「先月おいで下さいましたが、急いでお帰りになつたので、まことに残念でした。

今度、蒙古の国書が到来しましたことについては、上一人より、下万民に至るまで、ただ驚き騒ぐだけで、いかなる原因であるかは誰も知っておりません、日蓮は、かねてからかくなる原因を知っておりましたので、立正安国論という一冊をつくって、九か年前に幕府に捧げたのであります。前兆というものがあつて、災が必らず後にくると申します。十二年前の正嘉元年八月二十三日夜の、前代未聞の大地震こそこの前兆ではなかつたでしょうか。法華経には、如是相とあつて、真実の姿をみるのが大切です。天台大師は、蜘蛛が下つてくると喜びごとがあり、かささがなければ、客人がくるといっております。易では、吉か凶かは物が動くころとする時に生ずるといっておりますが、これらの言葉には、間違いはありません。しよせんは、諸宗の帰依をやめて法華経を信仰して、この国難を退治せよとの意味で立正安国論を奏上しました。

日本の国の亡びる原因は、浄土宗、真言宗、禅宗、律宗等々の邪法や悪法により起つております。（大東亜戦争に何故まけたかわからない日本人がいたら、この辺を熟読されたい——著者記）これらの諸宗と日蓮とを対決せしめて下さい。これら諸宗のよりどころとする経文と、法華経との勝劣を決定させて下さい。

特に、あなたは、現在の執権職北条時宗殿とは一族であります。北条氏が亡んだら、あなたとて安泰でありますまい。早く蒙古を降伏せしめて、国土を安穩にしてください。法華経をそしめる者は過去、現在、未来のもろもろの仏の大怨敵であります。日本国中の人びとが法華経をそ

しるが故に、天照太神、八幡大菩薩等が、この日本国をみすてたもうた、それ故に大蒙古国より国書がきたのであります。この原因を知らず、ぼんやりしておれば今からのちは皆蒙古に生けどりされて、蒙古国の奴隷となるでし太う。この趣旨を方々に申しのべ、あなたにもこの手紙を差し上げるのであります。

文永五年十月十一日

日蓮花押

弥源太入道殿

弥源太入道の姓が北条氏であることは、右の御手紙中に聖人が「貴殿は、相模守（時宗）と同姓なり」といわれたことによつてわかる。聖人の草庵にゆききしていたことがこの手紙の「去る月、御来臨、急ぎ御帰宅、本意なく存ぜしめ候いをはんぬ」（原文）と、始まつておることよくわかる。この人は、この手紙の外に聖人の御遺文録に、三通の御手紙がのつておる。文永十一年二月十一日の御手紙では、聖人、太刀を二振贈られたが聖人は「あなたがおもちの時は、悪の刀、仏前にそなえれば善の刀」などと御手紙をいただき、その外文永十一年九月十七日と、弘安元年八月十一日の御手紙がある。

その他のことは詳細にはわからないが、御手紙中にもある通り、執権職北条時宗と同族であったから聖人が時宗や頼綱を動かそうとするために、この弥源太入道に前述のお手紙を出したものと思われる。

道隆への手紙

「現今は、寺の建物は軒をならべ、どこの家庭でも仏法の話をして、仏教の盛んなことは、インド、支那にもこえ、僧侶の振舞いは、あたかも神通力を得た羅漢のようであります。だがしかし、表面はそうであつても、内面は逆であつて、仏さまが説いたお経の中でどのお経がすぐれ、どのお経が劣つておるかを全然知りません。その愚かさはけだもの同然であつて、主であり師匠であり親であるお釈迦さまをすててしまつて、われらにとつて縁のないよその仏や菩薩を信じておりますが、これは、仏法に戒められておる師敵対にあります。故に、私は、念仏は無間地獄のわざ、禅宗は天魔のおこない、真言は国を亡ぼす悪法、律は国賊というのです。

日蓮は、去る文応元年に、以上の悪法について考えた一書、すなわち立正安国論を、宿屋入道の手をへて故北条時頼殿に奉りました。この立正安国論の結論は、念仏宗、真言宗、禅宗、律宗等々の悪法を信仰するならば、世の中に、災難がつづき、その上、他国から、この日本国がせめられるようになるであろうと考えたのであります。ところが、去る正月十八日に、蒙古から国書がきました。これは、日蓮が、立正安国論に予言したところと、少しも違わず符合したのであり

ます。かくのごとく、蒙古の国書の到来したことは、諸宗の寺々で行われておる御祈禱の力がなくなつたせいか、または、念仏真言等の悪法がひろまつたせいでありましょう。

鎌倉中の人びとは、道隆聖人を仏のようにうやまい、良観聖人を羅漢のごとくにたつとんでおりますが、仏法上果たしてこれでよいでしょうか。寿福寺、多宝寺、浄光明寺、長楽寺、大仏殿等々の住職は我慢の心がつよく、悟りもせぬのに、悟つた風をよそおう、増上慢の大悪人であります。どうして、これらの僧侶が、蒙古国の軍勢を調伏できるでしょうか。

まかりまちがえば、日本国中の人びとが、ことごとく生けどりにされて国を亡ぼし、来世には、必ず無間地獄におちるでしょう。日蓮が申し上げることを採用なさらなければ、必ず後悔するでしょう。

以上の日蓮の主張を、北条時宗殿、宿屋入道殿、平左衛門尉殿等へ申し上げましたから、一か所にあつまつて、ご相談をお願い申し上げます。これは、日蓮が私に曲げて申すものではありません。ただ仏のお経、先師の論文に説かれてある通りを申し上げたまででございます。詳細はお手紙には書きつくすことが出来ませんから、公場の対決を期して、申し上げます。手紙では、思う言葉をのせきれず、言葉だけでは、心をいいつくすことができません。

文永五年十月十一日

日蓮花押

建長寺 道隆に奉る。

一

——宛名の道隆は、北条時宗が建長寺を建立した時に招かれて住職となり、建長寺の第一祖になった人である。この人は、支那の人で、三十五歳の時に日本に渡ってきた人である。北条時頼は、この人について出家して、法名を道崇と号した。

道隆が建長寺に住職したのは、聖人が鎌倉にきて、南無妙法蓮華經と第一声を放った建長五年である。道隆は、聖人にとっては良観と対をなす法敵であった。特に、竜口法難については、兩人相通謀して、聖人に害を加えたのである。聖人は、妙法比丘尼御返事に

「極樂寺の生仏良観聖人は、折り紙をささげて上に訴え、建長寺の道隆聖人は、輿にのりて奉行人にひざまずく」としるされている。

道隆は、建長寺の第一祖となり、後ち京都の建仁寺の住職にもなったが、門下にざんげんされて甲州に流されること三か年、許されて帰ってきたが、再び甲州に流された。第二回は、すぐ許されて帰り、寿福寺の住職をへて、再び、建長寺の住職となった。流罪の原因は、門下のざんげんとなっていて、その詳細はわからないが、聖人が、道隆の臨終（弘安元年四月）を評した手紙の文中（弥源太入道殿御消息）に「道隆の振舞は日本国の人びとは知っておるが、上の御威光をおそれるから尊んではおるが、内心では、皆うとんじておる」のであるといっておる。いかなる振舞かは、教義上のことでなければ、当らずとも、遠からずの想像がつくと思う。

「蒙古国の国書について、北条時宗殿その外の方々へお手紙を出しました。国書のことは、日蓮が文応元年に考えた立正安国論の予言のごとく、少しも違わず符合しました。この予言の中を、あなたはどのように思いますか、良観上人、日蓮を嘲弄する心を加えて日蓮に帰伏なさい。もし、それが出来ないならば、あなたは仏が法華経に戒められた「世間の人びとを軽くみて、自分の欲のために、法を説くもの」の罪をのがれることは出来ません。法によって、人によらずとは仏の合言であります。あなたのおすまいを、法華経では「静かなる所で法衣をまとって、仏道を修行する所」といつております。静かどころか、好んで日蓮をいつわって訴えるなど、なさつておることと、おすまいになつておる住所と精神が反対ではありませんか。これこそ、戒定慧の三学を修行するとみせかけておる、にせの聖人であります。法華経の勸持品にある第三の法敵、僭聖増上慢にあたります。現在は国賊、後世は地獄におちること必定です。多少でも、従来が悪事を後悔するのならば日蓮に従いなさい。

以上の趣旨を、執権北条時宗殿を始め、建長寺等その外へも申しのべました。仏教の勝劣、邪正をただすのには、公のところでは対決するに限りません。小乗の教えをもつて、諸経中の王である法華経に対抗するのは、江河と大海と、華山としゅみ山の、比較勝劣を論ずるようなものではありません。

あなたも、蒙古を調伏する秘法を、さだめしご存知でありましようが、日蓮は、日本第一の法

華經の行者であつて。蒙古国退治の大將であります。法華經藥王品に「この經は一切經の中で第一であるから、この經をたもつ者も、これまた一切衆生の中で第一である」と説かれてあることに相当します。

いろいろと申し上げても文章では理をつくすことができませんので、省略いたします。

文永五年十月十一日

日蓮花押

極楽寺良観殿

——良観は、聖人にとっては、群をぬいた法敵であつた。釈迦にたしする提婆のごとくと、聖人自らも良観を評しておる程である。「敵に非ずんば、わが非を知らず」という聖語があるが、味うべき言葉である。

良観は大和の国の人で、叡尊の弟子、建長四年に、律宗を関東に弘めるために下向してきた人である。はじめ常州の国におつたが、執権職北条長時が極楽寺に招じて開山とした。当寺の極楽寺は、本堂を華藏院と称し、施薬院、福田院、療病院、癩病舎、薬湯室、馬病屋等々があつたといふ。

良観は弊依粗食で、人の絹をきるのを禁じた。自分で癩病人を洗い、癩病の乞食をあつめて食物を施し、囚人に金錢を施し、井戸を掘り、橋をかけ、道路を修繕し、飢え七人には食物を、貧乏人には金錢を、盲者には杖を、病人には薬をあたえ、棄児を養い、すて犬をあつめて食物をや

り、厩をたてて病馬をあつめ、念仏を唱えてお守りを頸にかけてやった。

饑饉には粥を施し、疫病には病人をあつめて治療し、自ら文殊菩薩、地藏の像をかい、男女に分ちあてた。聖徳太子の悲田、敬田、施薬、療病、四院の制度を願って、療病院、悲田院をたて、二十一年間に病人の治つたものは、四万六千八百人といわれておる。

北条時宗は、良観のこの行いに歓喜して土佐の国に土地を賜わり、その費用にあてた程である。

良観の弟子は二千七百四十人あつて、在家の弟子と称するものは数をしらない。律の三大部を講ずること七へん、その他の註釈書を講ずること三十余へん、雨を祈る名人で二十数回成功しておる。自分が建立の修行寺が七十九か所、修繕した寺が八十三か所、大蔵經をおさめた所が十四か所、橋をかけること百八十九か所、道路修繕は七十一か所、井戸をつくること三十三か所、諸国に殺生禁断する所が六十三か所、浴室、病室、乞食小屋をおくこと各々五か所、経本を表装して僧尼にあたえること三百六十卷、乞食に施こした着物は三万三千領云々とある。

嘉元元年八十三で亡くなつたが、その徳行について、遺弟等が願つたので、後醍醐天皇は、忍性菩薩の称号を許したといわれておる。

さて、以上のように、本朝高僧等々に良観の徳行がのせられておるが、聖人の法華經中心の眼よりみれば、前述のお手紙の中にもある通り、「現在は国賊で、来世は地獄におちること必定

です」といわれておるのである。

聖愚問答抄にくわしく、極楽寺の良観の名をあげて、その所属の律宗を破折されておる。

「律宗の良観上人が、尊げにみえるのは、人が上人を敬うからで、その教えが貴いからではない。仏は「教えによって、人によるな」といわれておる。昔の戒律を守った偉い人は、殺、といって、草木をきるという言葉や、収、といって金銭をたくわえるという言葉さえ、忌み嫌い、美人をみたら、しかばねを連想したという。ところが、今の律僧は、絹布をまとい金銭をたくわえる、あまつさえ金を貸して利息をとるといふありさまで、戒律の教えと、行とがまったく違っておる。心ある人ならば誰が信じようか。

また、道路の普請や、橋をかけ渡すということも、逆に人の迷惑になっておる。現に、多くの人びとは、六浦（現在の神奈川県金沢八景のあたりをいう）で、関所の通行税として米をとられることを嘆いておる。国々に構えた関所も、旅人のわずらいとなっておるではないか」

以上は、良観上人を破した、聖愚問答抄の一説であるが、良観上人は自分の慈善行をする資本を、六浦や、飯島（鎌倉材木座の付近）の通行税からとりたてたことが、この抄によって推量される。

—大仏殿宛—

「本年の正月十八日に、大蒙古国より国書が到来しました。その状には、大蒙古皇帝日本国王に書を呈す、大道の行われるその儀は、ぼうぼうとして広いものである。信を構え、睦みを修める云々、至元三年正月とあります。この国書のごとくならば日本国の返書いかによつては、日本国を攻めてくることは分明であります。このことは、日蓮が立正安国論に考えたことと、少しも相違がありません。いそいで退治をしなければなりません。蒙古退治は、日蓮でなければなりません。蒙古退治は、日蓮でなければなりません。早く我慢の心をたおして日蓮に帰伏しなさい。今生むなしくすぎたなら、後悔しても何んの益があります。詳細は略しますが、この趣を諸方へ申し上げましたから、一か所に皆さんがあつまつて蒙古調伏の方法を御評議下さい。

文永五年十月十一日

日蓮花押

大仏殿別当殿

——大仏殿とは、鎌倉に行ったことのある人ならばご存知の、あの大仏である。晶子女史が「鎌倉や御仏なれど（中略）美男におわす夏木立哉」、と歌った大仏さまで、日本一の美男な仏

さまといわれておる。別当とは、僧侶の官職名で、一山の統卒の任にあたる僧侶をいう。聖人二十五歳の寛元四年に、木仏として出来たのを、時頼が力をいれて、十年後の建長四年に金銅のアミダ仏としたのである。

——寿福寺宛——

「風聞するところによれば、蒙古国の国書が本年の正月十八日に、たしかに到来したということであります。しからば、日蓮が九か年前に上書した、立正安国論にまったく符合したのであります。日蓮はおそらく、ことの未だ起らざるにそれを知ったものでありましょう。蒙古の国書がきたことを立正安国論をもつて考えますと、念仏宗、真言宗、禅宗、律宗等の悪法が天下に充滿して、上下万民の師となつておるが故に、このような他国侵逼の難が起つたのであります。法華經を信じない失によつて日本国の人びとは、来世は無間地獄におちるであります。早く邪見をひるがえして、禅の法をすてて、法華經の正法に帰したまえ、この趣きは、方々へ申し上げたら、早く一か所に集つて、御評議をなさい。委細は公場対決の時を期します。

文永五年十月十一日

日蓮花押

寿福寺殿

——寿福寺は源氏山の扇が谷にある。鎌倉五山の第三位で、禅宗である。頼朝の室たる政子は、この寺を増築して、栄西禅師を招いておらしめたことがある。この寺には、政子及び実朝の

墓がある。

——浄光明寺宛——

「大蒙古国の皇帝が、日本国を奪い取るという意味の国書がきました。このことは、九か年前に立正安国論に考えたことと、少しも相違がありません。日蓮の心中では、この予言の中により、日本第一の勸賞（功ある人を賞し、官位を賜わり、あるいは物をたまわること）にもあずかるかと思っておりますのに、何んの御沙汰もありません。これひとえに、鎌倉中の禅宗や律宗の僧侶たちが、法華経の勸持品にあるごとく「国王や、大臣に向つて、誹謗して、わが悪をとく」からであります。小乗教の二百五十戒などは早くなげすめて日蓮に帰伏して、仏道第一の目的たる成仏を心がけなさい。しからずんば、無間地獄におちるばかりです。この主旨を方々へ手紙で申し上げておいたから、早く一か所にあつまつて、日蓮との対決をご相談下さい。これが、日蓮の希望であります。日蓮は決して、諸宗をあなどるのではないのですが、法華経の大王のごとき戒に、小乗の蚊や虻のごとき戒とをくらべようとするのが、おかしくて、笑うべし、笑うべしと思っただけであります。

文永五年十月十一日

日蓮花押

浄光明寺殿

——浄光明寺は、鎌倉扇ヶ谷の泉谷にある、真言律と念仏と禅との兼学道場であつたといわ

れ、鎌倉七大寺の一である。聖人を伊東に流罪した北条長時の建立であつて、彼はこの寺で死んでおる。

——多宝寺宛——

「日蓮が故北条時頼殿に、文応元年の七月十六日に献上した立正安国論を、御覧になつたことがありますか。この立正安国論は九か年前に、いまだことが起きない前に、法華経の真文より考えて、蒙古の襲来を予言した書であります。すでに、本年の正月、蒙古国より国書が到着しました。これを驚かないでおられましょうか。たとい。日蓮がにくくとも安国論に考えると、ころが的中したことについて、どうして採用がないのでありましょうか。実に奇怪千万であります。早く、一か所にあつまつて、日蓮の予言的の中について、ご評定下さい。もし、日蓮が申したことを御用いなければ、現世には国を亡ぼし、来世には地獄に必らずおちるであります。以上の趣きを、方々へ申し上げました。日蓮が私曲ではありません。詳細なご返答をいただきたいと思ひます。言葉は心をつくさず、書面は言葉をつくせない。これゆえ、これで省略いたします。

文永五年十月十一日

日蓮花押

多宝寺殿

——多宝寺は鎌倉七大寺の一。現存はしないが、良観が聖人に対抗しての雨の祈禱の折りに「多宝寺の弟子等数百人をよびあつめて力をつくした」とあるから、往時は大寺であつたことが

わかる。

——長樂寺宛——

「蒙古国調伏のことについて、方々へ申し上げました。これは、すでに、日蓮が、立正安国論に考えた通り、符合しております。早く念仏の邪法をすてて、法華經の実法実教を信じなさい。もし、この言を用いなければ、今世には蒙古にせめられて、後世は必らず地獄におちるでしょう。一か所にあつまつて、談合をとげ、評定をなさい。日蓮が望むところでありませぬ。御返事をいただいて、御意をうけたまわりたいと思ひます。決して、諸宗をあなどつて申し上げるのではななく、わが国の安泰を願つて申し上げます。

謹言

文永五年十月十一日

日蓮花押

長樂寺殿

——鎌倉七大寺の一。北条氏一門の名越家建立の寺。佐介が谷の佐々目が谷にあつたといわれるが、今はその跡もない。

以上で十一通の手紙は終るのであるが、聖人がこの十一通の御手紙をいかなる決意でしたためられたかは、弟子檀那中への御状という御書を拝読すれば充分にわかる。この十一通の手紙のしめくくりとして、ぜひともその御書をここに、掲載して、十一通の御手紙の主旨をくみとつていただきたい。

「大蒙古国の国書がきたことについて、十一通の手紙を方々へ出しました。さだめし、日蓮は勿論、弟子も檀那も、流罪か死罪に行われるでありましょう。だが少しも、これを驚いてはなりませんぞ。皆様方に申し上げたい、折伏のことはを一々記載しませんが、これは毒鼓をうって、誇法の夢をさます手段であります。流罪死罪は、日蓮が望むところであります。おのおの方も、覚悟をはつきりときめていただきたい。妻子眷属のことを、少しも思つてはなりませんぞ。御上の權威などを恐れてはなりません。今度こそ、生死のきずなをきつて、成仏をとげる時であります。北条時宗殿、宿屋入道殿、平左衛門尉殿、弥源太殿、建長寺、寿福寺、極楽寺、多宝寺、浄光明寺、大仏殿、長楽寺、以上十一通の手紙をかい、諫め申した。必ず、なにか出来事が起きようと思いません。日蓮のところに来て、いろいろの書状なぞ御覧になつたがよろしいです。

文永五年十月十一日

日蓮花押

弟子檀那中

この十一通御書の反響はどうであつたらうかはおいおいわかつてくるが、弟子檀那を戒めた言葉の中に、少しも妻子音族を思うことなかれとか、流罪死罪を覚悟せよという。強い言葉がある。聖人在世中の信徒の信心というもののありかたを、考えさせる御言葉である。信心とは、妻子眷属を思うための信心と思つておるのが現代である。信心して流罪死罪になつたら大変だ

と思うのが、現今の信心であろう。どうして、こんな違い方があるのでしょうか。聖人の御意中をさぐってみればわかるのである。それも、おいおいのことに譲っておこう。聖人が、法華經の行者なのに、何故佐渡の流罪や竜の口の死罪があったのでしょうか、わかれば以上の解決がつくのであるが、これも、おいおいということにしたい。

富士(第二卷)

印刷 昭和四十九年五月七日

発行 昭和四十九年五月十六日

著者 柿沼日明

発行者 岩井福次郎

発行所 法華講連合会 大白法編集室

東京都墨田区吾妻橋一―四―一一

TEL 〇三(622) 五六四三

装幀・挿絵 落合歌二郎

地図作画 小山康夫